

五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう

下田東遺跡発掘調査概報 I

—平成13・14年度—



2006.3

香 芝 市

香 芝 市 教 育 委 員 会



調査地全景（南上空から、平成14年9月12日撮影）

卷頭図版 2



下田東古墳全景（南上空から）

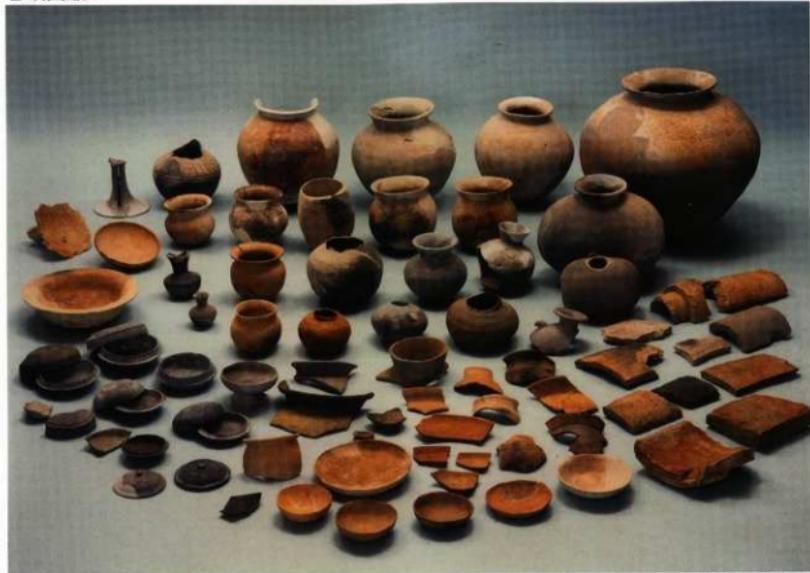


1 下田東古墳出土人物形埴輪（武人・馬曳・巫女）



2 下田東古墳出土馬形埴輪

卷頭図版 4



1 旧河道出土遺物（土師器・須恵器・瓦塼類）



2 旧河道出土遺物（軒丸瓦・軒平瓦・鶴尾）

序 文

本市は、奈良県北西部に位置し、古代には『万葉集』に詠まれた奈良盆地西端にそびえる二上山を背景に市域がひろがっています。

大阪都市圏に近接して交通至便であることからベッドタウンとして開発が進展しており、現在の人口は71,000人を超えて、なお増加の一途をたどっています。

一方、古くから自然環境にも恵まれており、埋蔵文化財をはじめとする各種の文化財が数多く残されています。

なかでも、二上山麓で産出するサヌカイトを利用した石器製作遺跡である二上山北麓遺跡群や市中央には前方後円墳の狐井城山古墳、市北部には飛鳥時代の平野塚穴山古墳や寺院跡である尼寺廃寺跡などがあり、ひろく学会に知られています。

このたび、平成13年度および14年度において、国土交通省国庫補助金事業の一環として下田東遺跡の発掘調査を実施しました。下田東古墳から円筒・形象埴輪群やその南西方では多数の建物跡が発見され、当地には縄文時代から中世までの遺跡が広がっていることが初めてわかりました。これらの成果をまとめ、その発掘調査概報を発刊する運びとなりました。

この発掘調査を実施するにあたりまして、ご協力賜りました地元の方々をはじめ、その他関係者の皆さんに深く感謝を申し上げますとともに、この概要報告が多くの方の目にふれ、本市の埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸甚に存じます。

また、今後とも埋蔵文化財行政に邁進していく所存ですので、関係各位のより一層のご指導、ご協力をお願いする次第です。

平成18年3月

香芝市教育委員会

教育長 山田勝治

例　　言

1. 本書は、奈良県香芝市下田東3丁目および孤井に所在する下田東遺跡、瓦口森田遺跡、未命名の遺物散布地2箇所における発掘調査の成果をまとめた概要報告書である。なお、今後調査地一帯を「下田東遺跡」に再編する予定で、本書も下田東遺跡として報告する。

2. 発掘調査は、平成13・14年度国土交通省国庫補助金事業の一環として実施した。

事業名：大和都市計画・五位堂駅前北第二土地区画整理事業

事業者：香芝市

調査主体：香芝市教育委員会事務局 生涯学習課 香芝市二上山博物館

調査担当：主　　査 佐藤良二（平成13・14年度）

発掘調査員　湯本　整（平成14年度）

臨時職員（発掘調査）　金松　誠、波多野　篤（平成14年度）

臨時職員　巽　義夫（平成14年度）

3. 現地調査から遺物整理、本書作成に至る間、下記の調査補助員を雇用し、業者とは業務委託した。（敬称略・順不同）

調査補助員：大倉利子、大竹正裕、金村茂子、近藤真紀、國木田大、黒沼保子、小林由
弥、須崎憲一、須田友喜、竹田静子、田中久美子、戸室怜央、中川香織、
波岡久恵、西口祥人、野水宏美、原田うの、山根弓果、米澤陽一

現地調査：安西工業㈱、㈲香芝市シルバー人材センター、㈱礪俣建設、
㈱成瑞興業、旭建機業

測量業務：㈱アコード、㈱ウェスコ、㈱アスコ、㈱日本テクノ

遺物保存処理・材質同定：㈱吉田生物研究所

遺物復元：㈱スタジオ三十三

4. 本書の挿図の座標軸は国土座標第VI座標系による。また、標高は海拔高（東京湾標準海面）で示している。

5. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録一切及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17-17）内で保管している。

6. 現地調査及び出土遺物の検討等の本書作成に関しては、下記の方々より有益な御教示を
いただいた。御芳名を記して感謝の言葉にかえさせていただく（50音順・敬称略）。

青木勘時、泉森　皎、大脇　潔、岡村直樹、小池香津江、(㈲)小泉俊夫、清水昭博、

(㈲)伊達宗泰、千賀　久、花谷　浩、林部　均、坂　靖、前沢郁浩、増田　啓、

松藤和人、森　郁夫、山川　均

7. 本書の執筆は各調査担当がおこない、目次にその分担を明記した。編集は湯本がおこな
った。

目 次

I	位置と環境	(波多野・湯本)	1
II	調査の契機と経過	(佐藤)	4
III	平成13年度(五位堂区画第1次)調査概要		7
1	はじめに	(佐藤)	7
2	各トレンチの調査概要	(佐藤)	7
3	下田東古墳の概要	(佐藤)	16
4	出土遺物		16
	(1) 下田東古墳	(湯本・金松)	17
	(2) 旧河道	(湯本・波多野)	31
	(3) 水路2	(湯本・波多野)	35
	(4) 第18トレンチ大溝	(湯本)	35
	(5) その他の遺構	(湯本・金松)	38
IV	平成14年度(五位堂区画第2次)調査概要		40
1	はじめに	(湯本)	40
2	各調査区の調査概要	(湯本)	41
3	出土遺物		58
	(1) 旧河道66下層(縄文砂層)	(波多野)	58
	(2) 旧河道66上層(古墳流路)	(湯本)	62
	(3) 区画溝	(湯本)	62
	(4) 住建物	(波多野)	62
	(5) 土坑・井戸	(金松・湯本)	64
V	まとめ	(湯本)	66

挿 図 目 次

- 図1 香芝市と調査地位置図 (S=1:50,000)
- 図2 下田東遺跡の範囲と周辺遺跡分布図 (S=1:12,500)
- 図3 調査区配置図 (S=1:3,000)
- 図4 第4~13・23トレンチおよび各拡張区遺構配置図 (S=1:400)
- 図5 第17~23トレンチおよび各拡張区遺構配置図 (S=1:400)

- 図6 下田東古墳出土 円筒形埴輪実測図 ($S = 1:6$)
 図7 下田東古墳出土 器財形埴輪実測図 ($S = 1:4$)
 図8 下田東古墳出土 家形埴輪実測図 ($S = 1:3$)
 図9 下田東古墳出土 鶴形埴輪実測図 ($S = 1:2$)
 図10 下田東古墳出土 馬形埴輪実測図 ($S = 1:80$)
 図11 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図1 ($S = 1:4$)
 図12 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図2 ($S = 1:4$)
 図13 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図3 ($S = 1:4$)
 図14 下田東古墳出土 土器・金属製品実測図 ($S = 1:4$)
 図15 旧河道出土 土器・土製品・木製品実測図 ($S = 1:4$)
 図16 旧河道出土 瓦・埴・鷺尾実測図 ($S = 1:4, 1:6$)
 図17 水路2出土 土器・木製品実測図 ($S = 1:4, 1:10$)
 図18 第18トレンチ大溝出土 土器・鋳造関係遺物実測図 ($S = 1:4$)
 図19 第16トレンチ他出土 石器実測図 ($S = 2:3$)
 図20 第1・9~11・13トレンチ出土 遺物実測図 ($S = 1:4$)
 図21 第25~27トレンチ遺構配置図 ($S = 1:400$)
 図22 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 遺構配置図 ($S = 1:400$)
 図23 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 上層遺構配置図 ($S = 1:400$)
 図24 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 下層遺構配置図 ($S = 1:400$)
 図25 本調査北区 溝・土坑・井戸 平面図・断面図 ($S = 1:40$)
 図26 本調査北区南東部 柱建物 平面図・断面図 ($S = 1:50$)
 図27 本調査南区 土坑・井戸 平面図・断面図 ($S = 1:40$)
 図28 第31~34・36・37トレンチおよび本調査北西区 遺構配置図 ($S = 1:400$)
 図29 旧河道66下層（縄文砂層）出土 石器実測図1 ($S = 2:3$)
 図30 旧河道66下層（縄文砂層）出土 石器実測図2 ($S = 2:3$)
 図31 旧河道66下層（縄文砂層）出土 縄文土器実測図 ($S = 1:4$)
 図32 旧河道66上層（古墳流路）出土 土器実測図 ($S = 1:4$)
 図33 区画溝出土 土器実測図 ($S = 1:4$)
 図34 土坑・井戸およびその他の遺構出土 遺物実測図 ($S = 1:4$)
 図35 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 遺構変遷図1 ($S = 1:1,600$)
 図36 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 遺構変遷図2 ($S = 1:1,600$)

表 目 次

表1 旧河道66下層（縄文砂層）出土 遺物観察表

図版目次

- 卷頭図版 1 調査地全景（南上空から、平成14年9月12日撮影）
- 卷頭図版 2 下田東古墳全景（南上空から）
- 卷頭図版 3 1 下田東古墳出土人物形埴輪（武人・馬曳・巫女）
2 下田東古墳出土馬形埴輪
- 卷頭図版 4 1 旧河道出土遺物（土師器・須恵器・瓦塊類）
2 旧河道出土遺物（軒丸瓦・軒平瓦・鶴尾）
- 図版 1 1 試掘・確認調査地景観（東上空から）
2 下田東古墳検出状況（北西から）
- 図版 2 1 下田東古墳北側（後円部側）周濠断面（東から）
2 下田東古墳南側（後円部側）周濠内遺物出土状況（西から）
- 図版 3 1 下田東古墳周濠内馬形埴輪出土状況（北東から）
2 下田東古墳周濠内人物形埴輪出土状況（南から）
- 図版 4 1 第5トレンチ水路1円筒形埴輪出土状況（北から）
2 下田東古墳後円部上溝内遺物出土状況（北から）
- 図版 5 1 下田東古墳北東部土坑土師器出土状況（南から）
2 第5・13トレンチ間旧河道内遺物出土状況（北東から）
- 図版 6 1 第18トレンチ大溝遺物出土状況（東から）
2 第23トレンチ掘立柱建物跡-SB-01-（南西から）
- 図版 7 1 第18トレンチ水路2・堰（南から）
2 第18トレンチ水路2・堰（北から）
- 図版 8 2 第18トレンチ水路2馬鍔出土状況（南西から）
2 第18トレンチ西南拡張区掘立柱建物跡-SB-03-（北から）
- 図版 9 1 下田東古墳周濠出土土器
2 第18トレンチ大溝出土土器
- 図版10 1 第18トレンチ水路2出土木製品（馬鍔）
2 第13トレンチ旧河道出土土器（左：須恵器擂鉢・右：須恵器双耳壺）
- 図版11 第25～27トレンチ全景（南上空から）
- 図版12 1 第25トレンチ井戸1512土層断面（南から）
2 第27トレンチ溝1500・井戸1501土層断面（北から）
3 井戸1501枠内遺物出土状況（北から）
- 図版13 第28～30トレンチ・本調査北区・南区全景（南上空から）
- 図版14 1 本調査北区西北部第3層上面素掘小溝群検出状況（南西から）
2 本調査北区西北部第4層上面素掘小溝群完掘状況（南東から）
3 本調査北区南西部第5層上面素掘小溝土層断面（南から）
- 図版15 1 本調査北区南西部土坑10遺物出土状況（南東から）
2 土坑10出土遺物（古式土師器大甕、復元高85cm）
- 図版16 1 本調査北区北東部北トレンチ全景（東から）
2 北トレンチ旧河道66上層遺物出土状況（北西から）

- 3 旧河道66上層遺物出土状況近景（北から）
4 旧河道66上層遺物出土状況（北から）
5 本調査北区南東部旧河道66上層遺物出土状況（北西から）
- 図版17 1 旧河道66下層繩文土器（東から）
2 旧河道66下層石刀（南から）
3 旧河道66下層打製石劍（西から）
4 本調査北区北西部土坑100土層断面（北から）
5 本調査北区北西部柱建物2（南東から）
6 本調査北区南東部柱建物8（北西から、奥：柱建物9）
7 本調査北区南東部柱建物10（南西から）
8 本調査北区南東部柱建物13・14半截状況（北から）
9 柱建物13・14完掘状況（北から、人物位置：14）
- 図版18 1 本調査北区南東部井戸85枠内半截状況（東から）
2 井戸85枠内遺物出土状況（東から）
3 井戸85枠内遺物出土状況（東から）
4 井戸85枠内完掘状況（東から）
5 本調査中央区全景（東から）
- 図版19 1 本調査南区溝1008遺物出土状況（北西から）
2 溝1008遺物出土状況（北西から）
3 溝1008土層断面（北西から）
4 本調査南区土器埋納構造1063遺物出土状況（南から）
5 本調査南区井戸1014土層断面（北から）
6 本調査南区井戸1025遺物出土状況（北東から）
7 本調査南区柱穴1271・1270半截状況（北から）
8 本調査南区土坑1083遺物出土状況（南西から）
- 図版20 1 本調査南区柱建物群（北から）
2 本調査南区柱建物41（東から）
3 本調査南区柱建物45柱穴1127木製礎盤（南から）
4 本調査南区柱建物54（南から）
5 本調査南区柱建物55柱穴1181半截状況（北から）
- 図版21 1 第28トレンチ南壁土層断面（北から）
2 第29トレンチ全景（南東から）
3 第30トレンチ井戸1010半截状況（東から）
- 図版22 1 第31～34トレンチ・本調査北西区全景（南上空から）
- 図版23 1 第32トレンチ溝1601完掘状況（北西から）
2 第34トレンチ全景（西から、中央：旧河道1600）
3 本調査北西区旧河道1600遺物出土状況（北西から）
- 図版24 1 第36・37トレンチ全景（南上空から）
2 第36トレンチ全景（南から）

I 位置と環境

香芝市は奈良県北西部、地形的には奈良盆地西部に位置する。西側に隣接する大阪府からは、鉄道(JR線・近鉄線)・国道・高速道路などの交通網が延びて発達しており、大阪都市通勤圏のベッドタウンとして近年人口増加が著しい地域である(図1)。

下田東遺跡が所在する市の南西部は、標高60~80mのなだらかな馬見丘陵の南端部にあたり、その縁を北西に流れる大和川水系の葛下川が南側の標高52~54m程度の低平地との境界をなしている(図2)。この付近は10年程前まで、10~11世紀頃に奈良盆地一帯で施行したとされる条里制地割が明瞭に残される水田地帯であった。その地割南北軸に沿うように、東から熊谷川・山崎川・杉橋川・初田川・鳥居川といった小河川が北流して葛下川に注ぎ込んでいる(文献1、2)。

下田東遺跡は、1980年に山崎川・杉橋川河川改修に伴う縄文時代早期の高山寺式土器の採集によってその存在が知られるようになった。採集された他の土器などから縄文時代早期~晚期・弥生時代後期・古墳時代・中世の遺跡が、下田東3丁目および大字・狐井にかけての平地上に広がるを考えられてきた(文献3)。この発見以降今日まで、本格的な発掘調査は行う機会が訪れなかつた。

周辺の遺跡について概観する。旧石器時代の遺跡としては、市西部に国内でも有数のサヌカイト石器製作遺跡である二上山北麓遺跡群があり(文献4)、対して市南西部にはナイフ形石器が出土した鈴山遺跡(85、図2と対応。以下同じ。)がある(文献5)。縄文時代では、前期の北白川下層Ia式~大歳山式の土器、石器や獸骨が大量に出土した狐井遺跡(71)、ほかに下田遺跡(97)がある(文献6)。後期末の宮滝式~滋賀里I式の土器が旧河道から出土した瓦口森田遺跡(84)があるが、いずれにしても確実な遺構検出例はない(文献7)。弥生時代においても遺跡の存在は希薄であるが、法楽寺山遺跡(96)では後期の土器を伴った土坑が検出されている(文献8)。また近年の調査で、下田東1丁目に所在する下田味原遺跡から、後期の土器が出土する溝が検出されている(文献9)。

古墳時代に入ると市域内の土地利用は活発となるが、地盤安定がその要因と考えられる。護岸遺構などが検出された前期~中期の鎌田遺跡(文献10)、土坑や水路などが確認された中期~後期の藤ノ木丁遺跡(103)などの集落域も既往の発掘調査より判明している(文献11、12)。

また、古墳は馬見丘陵と平地上に存在する。馬見丘陵では、前期古墳として前方後円墳の土山古墳(77)、直徑10mの円墳と考えられる長谷山古墳(89)が注目される。後期古墳としては、御坊中第1号墳(86)・同第2号墳(87)・同第3号墳(88)、御坊山第1号墳(91)・同第2号墳(92)、勘平山第1号墳(93)・同第2号墳(94)が馬見丘陵の南側に延びる尾根上に築かれている。坊主山古墳(土山古墳の東方50m地点)、ケシキ山第3号墳(95)、真美ヶ丘59地点(90、瓦口古墳)などの10~25m程度の円墳が分布する。平地側では、中期後半の全長140mの前方後円墳である狐井城山古墳(69)や狐井稻荷古墳(70)が分布する。

これ以後の時代は、瓦城跡(83)、鈴山城跡(85)、下田城跡(102)、古墳を利用した狐井城跡(69)が市内各所に築かれ、良福寺環濠(73)、五位堂環濠(75)、瓦口環濠(76)など防衛的機能を備えた環濠集落が成立する(文献13・14)。

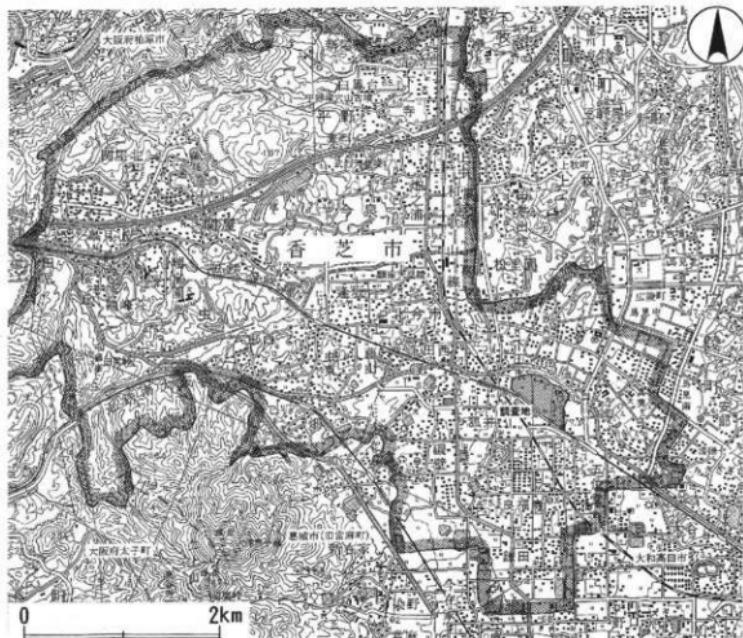
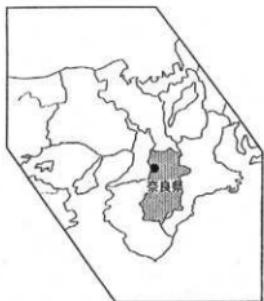


図1 香芝市と調査地位置図 (S = 1 : 50,000)



図2 下田東遺跡の範囲と周辺遺跡分布図 (S=1:12,500)

63 磯壁遺跡	85 鉢山城跡・鉢山遺跡	97 下田遺跡	109 北本市第1号墳
67 遺物散布地	86 御坊中第1号墳	98 下田東遺跡(周知範囲)	110 北本市第2号墳
68 遺物散布地	87 御坊中第2号墳	98-a 下田東遺跡(想定範囲)	111 北本市第3号墳
69 狐井城山古墳	88 御坊中第3号墳	98-b 下田東古墳(新規)	112 北本市第4号墳
70 狐井福荷古墳	89 長谷山古墳	99 遺物散布地	113 下田味原遺跡
71 狐井遺跡	90 真美ヶ丘59地点	100 遺物散布地	114 古墳状隆起(顯宗陵陪冢)
73 良福寺環塚	91 御坊山第1号墳	102 下田城跡	115 古墳状隆起(顯宗陵陪冢)
75 五位堂環塚	92 御坊山第2号墳	103 藤ノ木丁遺跡	116 古墳状隆起(顯宗陵陪冢)
76 瓦口環塚	93 勘平山第1号墳	104 今池遺跡	118 「顯宗陵」治定地
77 土山古墳	94 勘平山第2号墳	106 藤山遺跡	
83 瓦城跡	95 ケシキ山第3号墳	107 藤山第1号墳	
84 瓦口森田遺跡	96 法楽寺山遺跡	108 藤山第2号墳	

香芝市教育委員会編 2001『香芝市遺跡地図(平成13年度改訂版)』提

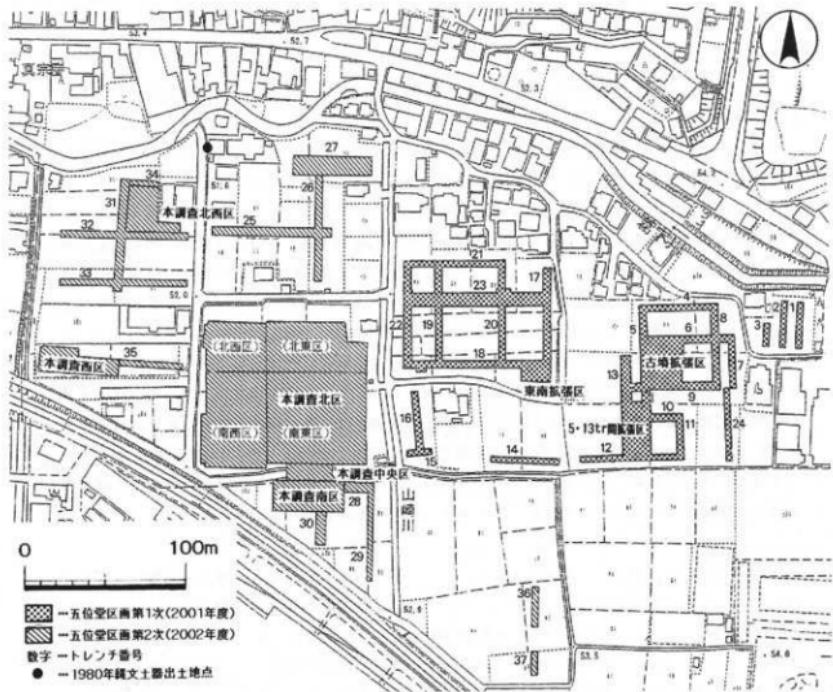
文献

- (1) 泉森 俊 1976 「古墳時代」『香芝町史』香芝町役場
- (2) 山川 均 1995 「条里制と村落」『歴史評論』538
- (3) 小泉俊夫・辻俊和・山下隆次 1980 「押型文土器を出土した香芝町下田東遺跡(一)・(二)」『青陵』46・47 奈良県立橿原考古学研究所
- (4) 松藤和人 1979 「二上山・桜ヶ丘遺跡—第一地点の発掘調査報告—」(奈良県史跡名勝天然記念物報告第38集) 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (5) 佐藤良二 1985 「鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所
- (6) 香芝市教育委員会編 1994 「狐井遺跡第7~9次」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会
- (7) 香芝町教育委員会編 1989 「瓦口森田遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会
- (8) 香芝市教育委員会編 1997 「法楽寺山遺跡第1次」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報8』香芝市教育委員会
- (9) 湯本 整 2002 「下田味原遺跡第1次」『奈良県遺跡調査概報2001年度』奈良県立橿原考古学研究所
- (10) 香芝市教育委員会編 1993 「鎌田遺跡」『平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- (11) 香芝町教育委員会編 1989 「藤ノ木丁遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会
- (12) 香芝市教育委員会編 1994 「藤ノ木丁遺跡第6~11次」『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』香芝市教育委員会
- (13) 奈良県教育委員会編 1998 「奈良県遺跡地図 第2分冊」
- (14) 香芝市教育委員会編 2001 「香芝市遺跡地図(平成13年度改訂版)」

II 調査の契機と経過

今回の「五位堂駅前北第二土地区画整理事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成13年3月22日づけ文化財保護法第57条の3第1項の規定(当時)に基づく埋蔵文化財発掘通知書が先山昭夫香芝市長から提出されたことに始まる。本開発事業は、香芝市を事業主体とする公共事業である。公共事業という性格上、開発担当部署の区画整理事務から香芝市教育委員会へ埋蔵文化財に関する取り扱いについて事前に打診があった。平成11年2月25日のことである。その後、平成12年6月22日には本区画整理事業の概要説明会が開催された。

これ以降は関係各課との個別協議が随時もたられ、埋蔵文化財に関しては①開発予定区域には「周知の埋蔵文化財包蔵地」が4カ所(下田東遺跡・瓦口森田遺跡・未命名の遺物散布地2カ所)含まれており、開発事業者からの「発掘通知書」の提出が必要であること。②開発予定面積が約17haという広域にわたり、調査池の設置など大規模な掘削を伴う工事箇所があることから、「奈良県における開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱い基準」(平成12年9月29日づけ教文第393号奈良県教育委員会教育長通知)の規定に照らし合わせれば発掘調査を実施する必要がある(奈良県教育委員会教育長指示)ことは必至であろうこと。③そのため双方で事前に入念な協議が必要であるので、できる限り早く「発掘通知書」を提出されたい旨を伝えた。



うこととなった。このようななかで、3月22日に開発部局から市長名で「発掘通知書」が提出されたのである。

平成13年度に入り、開発部局との協議内容が概ね合意に至った段階で、文化財保護法第58条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知書を平成13年7月24日づけで奈良県教育委員会教育長宛に提出した。重機掘削による現地調査は8月30日に開始したが、9月25日まではトレント調査が進み、绳文時代～中世にわたる遺構の検出や遺物の出土各所にみられ、開発予定区域全域に遺構が分布するかもしれないことが予測された。翌9月26日の開発部局との協議では、試掘・確認調査をこのまま維続し、本調査が必要となつた箇所については次年度以降本調査を実施することで合意を得た。この段階で古墳（下田東古墳）の存在は明らかになっていた。11月7日の協議では、平成13年度中に試掘・確認調査が終了できる範囲は西は山崎川まで、南は下田東3丁目と孤井との境界までであることを説明し、双方合意する。これを受けて、次年度以降の本調査範囲と試掘・確認調査トレントの設定を見直し（本調査は工事で埋蔵文化財が破壊される部分全域が対象になると予想し、そのうち実際に調査が可能な範囲とした）、調査計画と調査経費を再検討した。そして、香芝市と香芝市教育委員会は平成14年3月25日づけで「埋蔵文化財発掘調査事業実施に関する覚書」を締結し、事業地全域の発掘調査期間は平成19年3月31日までとなつた。

平成13年度の現地調査は、平成14年1月27日に一般を対象とした現地説明会を実施し、3月26日に終了した。現地説明会前の1月24日、マスコミへの公開の段階で遺跡名を「下田東遺跡」「下田東古墳」とした。それまでは本事業地内西半部に下田東遺跡、東半部に瓦口森田遺跡が周知されていた。しかし、瓦口森田遺跡は绳文時代後期の旧河道と中世とおぼしき素掘小溝群が主で、本地点の成果内容と趣きをやや異にするため、現熊谷川を境として東方を瓦口森田遺跡、西方を下田東遺跡とした。古墳については今後近隣で新発見があれば、「1号墳」「2号墳」…となるであろう。いずれ正式に訂正する予定である。

平成14年度の現地調査は、山崎川から初田川（本事業地西端）までの下田東3丁目地内の試掘・確認調査と小字「瓦ヶ田」における1号調整池設置箇所の本調査（2,310m²）および山崎川以西の孤井地内（小字「藤ノ木」）の2号調整池設置箇所の本調査（1,160m²）を実施することが前年度の合意事項であったが、4月10日におこなった協議段階で、突如、1号調整池の周囲を取り巻くように工事用道路が掘削を伴って敷設されることが、教育委員会へ申し伝えられた。これによって、ほぼ水田表反分を本調査せざるを得なかった。実際調査した面積は8,943m²で、優に当初の3倍以上となった。2号調整池は逆に3分の2程度に縮小となり、実際の調査面積は周囲の試掘・確認調査トレントを含め、1,290m²である。1・2号調整池工事範囲は5月～9月の5ヵ月間で調査を終了し、10月には開発部局へ引き渡す予定で計画していたが、まったく不可能となった（実際は、12月16日に引き渡すこととなる）。

現地調査は5月当初からは入れず、5月29日から本調査区設定作業をおこない、6月4日に作業員、重機を投入して調査を開始した。開発部局への引渡し日の1ヵ月前の11月15・16の両日には、本区画整理事業地内の土地所有者を対象とした現地説明会を開催した。12月15日で本調査区の調査を終了し、より北方および西方の試掘・確認調査へと移行していく。

III 平成13年度(五位堂区画第1次)調査概要

1 はじめに

平成13年度の発掘調査は初年度であるため、上記したように試掘・確認調査を計画、実施した。工事計画（工事用進入路の敷設）にあわせ、開発事業範囲の北東部から調査可能な場所に任意に幅4mのトレーンチを設定していった（図3）。そして、トレーンチ設定順に「第1」～「第24」までのトレーンチNo.を付していった。設定が任意であるため、第1～3と第4～第13・24、第14、第15・16、第17～23でトレーンチはそれぞれ設定方位が微妙に異なる。

トレーンチ設定は平成13年8月14日に開始し、第16トレーンチまで設定した同年8月30日に、第1トレーンチから重機掘削を始めた。トレーンチ設定はその後随時おこない、幅6mの区画道路部分にはトレーンチを重ねあわせて設定して、この部分の本調査は終了したものとした。第13トレーンチは幅6m、第22トレーンチは幅5m、第23トレーンチは幅8mである。開発事業者側との協議の結果、試掘・確認トレーンチを一部拡張した部分もあり、平成13年度調査の総面積は6,097m²である。また、今回の試掘・確認調査の対象範囲は、南は「下田東3丁目」と「狐井」を画する東西走向の水路まで、西は山崎川までである。なお、この範囲内でトレーンチを設定していない空白部分は、開発計画において「農地換地」などの場所である。

2 各トレーンチの調査概要

第1～3トレーンチ このトレーンチ群では、明瞭な遺構および遺物包含層の存在は認められなかつた。それぞれのトレーンチでは南端から北へ約5～7mのところで、現地表面下70～100cmに分布する黄褐色粘質土が急激に落ち込み、砂層の堆積がトレーンチ北端までみられた。現地表面下約1.9～2.2mで青灰色シルト層に達する。この砂層中には土師器、須恵器の小片が微量含まれるが、詳細な埋積時期は不詳である。現地形を鑑みれば、北に隣接する葛下川の旧河道（川幅）を示していると考えられる。流下方向は、西ないしは北西である。

第4トレーンチ 本トレーンチの調査に入った途端、現地表面下約70cmで黄褐色粘質土がひろがり、上面で縦横に素掘小溝群が検出された（図4）。それを被覆する薄い砂層の分布範囲には、各種の足跡と推定される凹部が多数みられた。偶蹄類および鳥と推察される足跡が一部確認された。人の足跡は不明である。現地表面下約1.9～2.0mで青灰色シルト層に達するが、その直上から繩文土器片とサヌカイト片が少量出土した。包含していたのは、層厚約40cmの灰黄色砂層である。本トレーンチの西端では、黄褐色粘質土上に層厚15cm前後の暗褐色粘質土を検出した。土師器・須恵器・布目瓦片などを含む遺物包含層である。

第5トレーンチ 上記の遺物包含層は本トレーンチ全域に分布しており、南へ向かって層厚を増す。この段階で遺構検出面までの基本層序を確立する（第1層：現水田耕土、第2層：現水田床土、第3層：黄灰色系砂質土～シルト質土、第4層：暗褐色粘質土=遺物包含層、第5層：黄褐色粘質土=遺構のベース層）。本トレーンチの北端から南へ約30～45m地点で、第4層中の遺物に円筒埴輪片が急激に増加した。この約15m間を精査したところ幅5m前後の溝の存在が判明し、L字状を呈していった。内側の屈曲角度は90°ではなく、やや鋭角を呈していたため、埴輪の存在と絡めて前方後円墳の前方部端と周濠を検出していると想定された。その後調査区を拡張して、この古

墳をほぼ完掘したので、その成果については後述する。

本トレンチの南部では第5層を削り込んだ旧河道が検出された。幅15m前後で南東から北西の方向に流下している。河道底の深度は遺構面（第5層上面）から約1.8mを測る。出土遺物には古墳時代に帰属するもの、縄文時代と推定されるサヌカイト片もみられるが、主要な遺物は飛鳥時代～平安時代前期にわたる7世紀～9・10世紀ごろの土師器、須恵器、瓦などである。最も新しい時期の遺物には黒色土器（10世紀後半）や土師質小皿の初期型式（10～11世紀）のものがある。この旧河道の埋没時期が想定されよう。

主要な遺物とした土師器、須恵器、瓦には完形品があり、しかも完形の丸瓦はほとんど水磨を受けていない。のことから、これらが河道に投棄されたあるいは混入した地点は比較的近隣ではないかと想定される。その他に、軒瓦、鷲尾、埴、凝灰岩切石なども出土し、近隣の地に古代寺院の存在が彷彿とされた。ここにおいて、にわかに本遺跡の重要性が増した。

第6トレンチ 第5トレンチに分布する遺物包含層（第4層）がトレンチ西端約6～7mの範囲にひろがり、須恵質を含めた円筒埴輪片が出土する。第5トレンチで埴輪片の集中出土をみた9月25日より以前の9月11日のことである。のちに、「水路1」の埋土上部であることが判明する。第4層はトレンチ東端から西へ約10～25mの範囲にも分布し、その上面および下面（第5層上面）で素掘小溝群および足跡群を検出する。

第7トレンチ 本トレンチには第4層は分布せず、第3層以深は砂質土～砂層が堆積する。遺物の出土量は少ない。

第8トレンチ 本トレンチは都市計画道路の敷設範囲内に位置する。後年の本調査に託すため、今回は第4層上面の素掘小溝群までしか調査していない。

第9トレンチ 東部に幅約4.5m、深度約30cmほどの南北走向の溝（遺物は少量）を、西部で第5トレンチからひろがる遺物包含層を検出した。のちに、後者は下位に古墳の周濠が存在することを確認する。

第10トレンチ 旧河道は第5トレンチとの交点部以西にひろがることを確認し、河道の北東肩部を検出す。東端部にも別の旧河道を検出するが、無遺物であった。なお、第5トレンチとの交点部で旧河道内に木枠を用いた現代の井戸（掘り方は現水田床土直下から掘り込む。井戸枠内からゴルフボール出土）を検出した。

第11トレンチ 中央部で幅約2～3m、深度約75cmの溝を検出する。走向は旧河道とほぼ平行する。埋土中には多量の土師器、須恵器が投棄されていた。そのなかに7世紀後半の軒丸瓦片が1点みられた。古代寺院に関係する区画溝の一部かとも考えたが、溝幅に統一性がなく、直線的でもないため、この考え方を断念した。トレンチ南部では旧河道の北東肩部を確認する。

第12トレンチ 東部は旧河道を、その肩部から西方では溝と少數の土坑、柱穴を検出した。本トレンチは葛下川付替部分に位置することから本調査に託すため、第13トレンチ交点部以西の33m分は第5層上面で遺構が分布することを確認しただけ留めた。

第13トレンチ 第9トレンチ交点部以南で旧河道を検出、調査し、以北では溝、土坑を少數検出する。12世紀後半～13世紀前半の瓦器碗を含む土坑がある。のちに、第5トレンチとの間、東西7m分も掘り下げて旧河道を調査した。遺物は河道底からの出土が多い。斎串、銅鏡（緑青

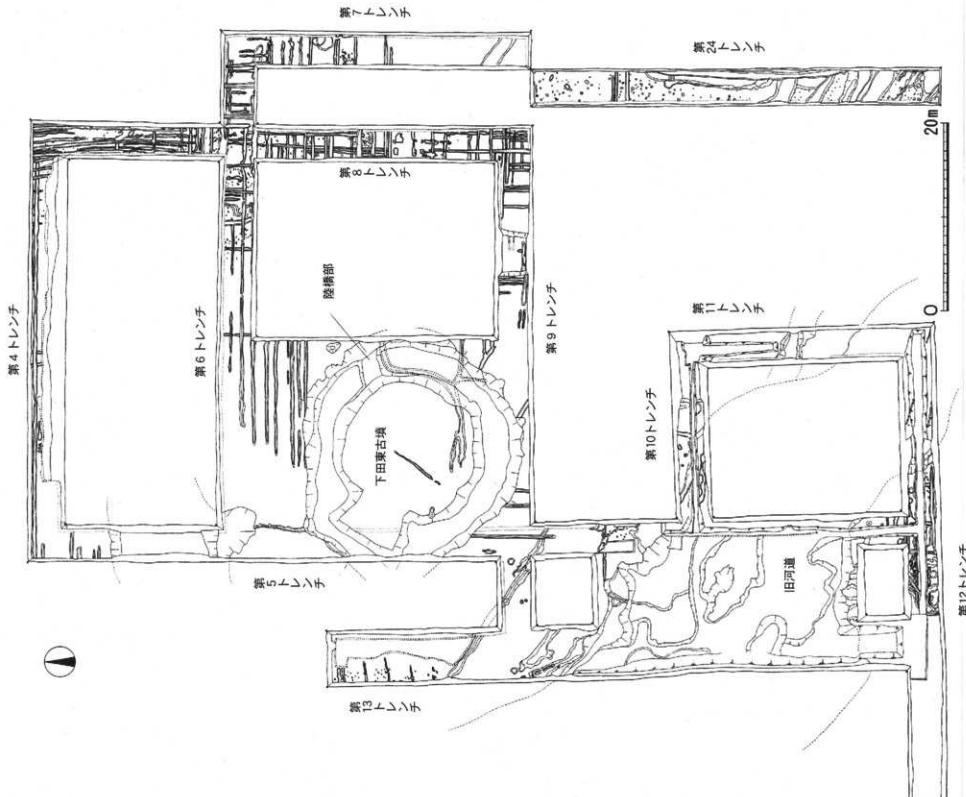


図4 第4~13・24トレンチおよび各拡張区適構配置図 ($S = 1:400$)

の錯のため文字の判読不能。径が小さいので平安時代に下る皇朝十二銭のひとつか？）なども出土した。

第14トレンチ 第12トレンチと同様、葛下川付替部分に位置するため第5層上面で遺構の存在を確認しただけに留めた。トレンチ中央部に柱穴が集中分布する。

第15・16トレンチ 同じく、第15トレンチと第16トレンチの南端は葛下川付替部分に位置するため、その部分は第4層上面における素掘小溝群の調査に留める。第16トレンチの南端から5m北方の地点以北は、第5層上面の遺構群を調査する。北半部には一辺約25~60cmの方形掘り方の柱穴が北東~南西の方向で多数分布する。南半部には土坑数基と井戸1基が検出された。井戸の掘り方は一辺約90cm、深さ約75cmを測り、幅20cm前後、厚さ7cm程度の板材を掘り方壁に合わせて設置した井戸枠を有する。なお、第5層を被覆する層厚約20~30cmの遺物包含層はこれまでの第4層とは異なり、黒褐色を呈して遺物の出土量がきわめて多い。出土した須恵器には6世紀代のものが多く見かける。

第17トレンチ 南端から北方10mあたりで旧河道の南西肩部を検出する（図5）。その南東延長部は第5・10~13トレンチで検出した旧河道と一致するため、同一の河道であろう。北東肩部は検出できず、トレンチ外に想定される。のちに、第23トレンチの調査で推定できたが、旧河道は第17トレンチ南端で向きを変えて北流しているようである。遺物は砂層下部~下底にかけて同時期幅の土師器、須恵器が多数出土した。

第18トレンチ 東部で幅10m近くの大溝を検出する。のちに南へ180m拡張して判明するが、幅約5~8mほどの溝が南東~北西の方向に検出され、「水路2」とした。水路2には、流れの方向にやや斜交して堰が設置されていた。水路2の深度は、調査区南東部において遺構検出面から約-1.3m、北西部では約-2.6mを測る。堆積土は砂層とシルト層の互層状態を示すが、最終的には暗褐色粘質土で埋積されている。水路底は堰の設置部から北方は急激に落ち込むが、その水路北半部が砂で埋積された段階で、径約3~12cm、現存長約0.8~1.7mほどの自然木（先端は尖るように加工）を多数合掌の形に打ち込んでいる。水路底が浅いところは青灰色シルト層まで打ち込まれているが、深い場所では杭の先端部は砂層中に留まっていた。堰は自然木を打ち込んだ後、枝状のものを横木として編み込んでいる。一部で網代の痕跡を確認しており、堰全体が網代で被覆されていたかもしれない。なお、粘土で堰が覆われていたか否かは不明である。堰は東側の岸部から約6m間築かれており、水路の西側は幅約2m空いており水の流下が続いている。そのため、調査区内の水路北西部は法面が抉り込まれており、水路底の深度も最深を測るのである。水路南東部の一角は、丁寧に水路底の検出を試みた。その結果、足跡が分布することを確認した。一部は偶蹄類と推定できる。

水路2からの出土遺物は、7世紀~8世紀の須恵器、土師器、瓦が目立つ。うち、円面鏡（8世紀）と杯蓋転用鏡（7世紀）が各1点みられる。その他、凝灰岩の切石1点、同不明品1点、そして、何点かの木製品が出土した。うち1点は馬鍔である。柄の部分と歯の一部が折損しているが、本体はほぼ完形である。長さ約124cm、幅約7~9cm、厚さ約6cmの角材に、先端を尖らせた歯を方形の穴に挿し込んで楔で留め、10本をセットしている。歯は21~23cm出ている。横木の両端、1本目と2本目の歯の間には径3cmほどの柄をつける穴が穿たれている。樹種は横木が

ヒノキ、歯がカシである。

また、本トレンチの西部、第19トレンチとの交点部において幅約8～9mの大溝が検出された。深度は20～45cm程度で浅く、埋土は暗褐色粘質土である。埋土中からは多量の土師器、須恵器が出土した。ほぼ完形品や1個体の土器がその場で破損した状態が多く見受けられたため、近隣から投棄されたものであろう。数ヵ所から馬齒も出土した。須恵器には杯、高杯、器台、甕などが、土師器には瓶など確認される。帰属時期は、5世紀末～6世紀前半と推定される。

その他、本トレンチ西部には掘立柱の柱穴が多数分布する。うち1棟(3間×3間以上)を推定復元することができた(SB-03)。SB-03の掘り方は、一辺約35～50cmを測る。また、SB-03の内部からは、矩形の掘り方で板材を組み合せて枠とした井戸が1基検出された。掘り方は約1.6×1.8m、最深部の深度1.5mを測る。井戸枠底からさらに掘りくぼめて、底部に土師器の片口鉢が設置してあった。SB-03とこの井戸は、方向が一致していないため有機的関係はないと思われる。

第19トレンチ 南部は、第18トレンチで検出した大溝が続き、北北東へ向かう。北部は、第5層の黄褐色粘質土の分布がなく、第4層の直下は砂層～砂質土が堆積している。これまで、第11・12トレンチから第5・10・13・17・23トレンチへ続く旧河道内から多数のサヌカイト片が出土していることから、本事業地内において縄文時代に遡る旧河道がひろがっていることが予想されたため、第23トレンチとの交点から南へ18mの間を、青灰色シルト層まで掘り下げた。砂層は1～1.3mほど堆積しており、その下部を中心に縄文土器片とサヌカイト片が出土した。土器片は早期～晩期までのものが混在している。ここでは、弥生時代以降の遺物は確認できなかった。

第20トレンチ 第5層はひろがるが、柱穴などの遺構の分布は少ない。かわって、幅20～70m程度、深度約15～20cmの南東～北西走向の溝が数条検出された。

第21トレンチ 東部10～15mの間に第5層が分布し、柱穴などが検出されるが、その他は砂層～砂質土がひろがり、素掘小溝群が分布するのみである。

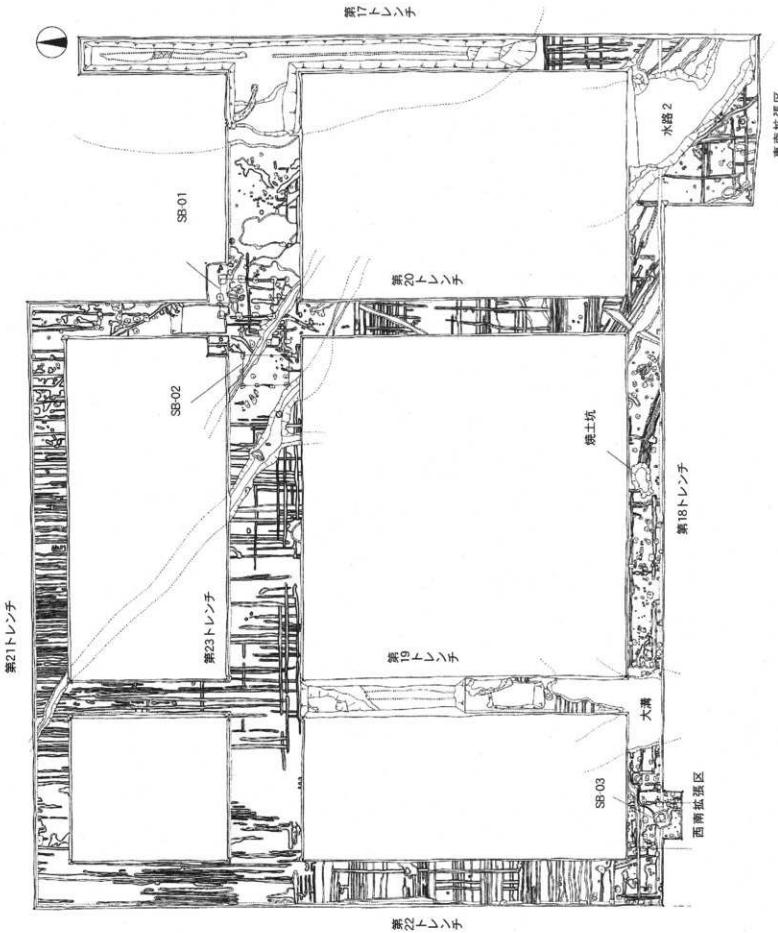
第22トレンチ 幅5mのトレンチで、南部15mほどまでは第5層が分布し、柱穴などの遺構が検出されるが、北部は第19・21トレンチと同様砂層～砂質土がひろがり、その上面で素掘小溝群がみられるのみである。

第23トレンチ 幅8mのトレンチで、西部20～25mほどは砂層～砂質土上面に素掘小溝群がひろがるのみであるが、より東方には第5層が分布し、溝や柱穴などが検出された。第20トレンチの交点付近では2棟の掘立柱建物が確認され、3m前後の間隔をおき、両者とも南北に方向が一致している。SB-01は一辺約50～100cmの柱穴掘り方で、東西2間×南北3間である。南西隅の柱穴には柱材が遺存しており、腐食部を加味すると径20cm程度の柱と推定される。柱穴の1つから平安時代の土師器皿が出土したことから、本遺跡における南北方向の建物跡は、おおむね平安時代であろうと予想される。SB-02は一辺約30～50cm程度の掘り方で、東西2間×南北3間の建物跡である。この両建物跡の柱穴と重複して、先行する南東～北西走向の溝が検出された。幅50～130cm程度、深度約15～40cmで、出土遺物から古墳時代の溝と思われる。

本トレンチ東端の約7.5～8m間は、第17トレンチから続く旧河道で、その西岸は南北走向である。よって、旧河道は第17トレンチ南端から流下走向を北へ向けたことがわかる。

以上、第17～23トレンチの範囲において、第21トレンチ東部と第22トレンチ南部を結ぶ斜めの

図5 第17～23トレンチおよび各拡張区遺構配置図 ($S = 1:400$)



線分から北西方向には、古墳時代～平安時代にわたる遺構の分布密度は粗いと予想される。ただし、より下層にひろがるであろう縄文時代の河道は存在するかもしれない。

第24トレンチ 第7・8トレンチの間に設けた、南へ続くトレンチである。第5層上面では、南部で南東～北西走向の溝(幅1～2m程度、深度約15～30cm)が検出された。出土遺物は少ない。トレンチ東壁に沿って検出された南北走向の溝(幅約50～90cm、深度約20～35cm)は、平安時代の土器を多数含む。トレンチ中央部で、この溝と重複する後出の土坑(径約60cm、深度約40cm)からは輪の羽口が出土した。

3 下田東古墳の概要

下田東古墳は、第5トレンチで前方部端を検出した後、第6・9トレンチに囲まれる範囲を500m²拡張し、古墳のほぼ全形を確認した。ただし、周濠の後円部側と前方部側の一端で調査区外であるために未調査部分がある。開発部局との協議結果にしたがって、古墳の規模と形状を確認し、一部周濠内を調査して帰属時期と墳丘基底部の確定をおこなった。よって、後円部側の周濠を3カ所幅2mで、前方部側の周濠を扇状に調査した。古墳を全掘しないという当初予定であったため、この部分での遺物の出土状況実測作業はおこなわず、層位ごとに一括して取り上げた。ところが、その後の協議によって調査方針の転換がはかられ、全掘することとなつたため、以降の周濠内遺物は出土状態を記録した。

本古墳は、後世の開墾などによって大規模に削平され、墳丘の盛土や埋葬施設(主体部)その他は完全に失われており、辛うじて第5層を削り出した墳丘基底部および周濠の下半部が遺存しているにすぎなかった。墳丘が削平された時期は、後円部の墳丘部上で検出された幅15～90cm、深度10～40cmの溝から9世紀ごろの完形の土師器の皿、椀が複数出土したことから、平安時代前期に大きく削平を受けたとみられる。ただし、この溝は後円部うしろの周濠上に延長し、渡り堤(後述)付近で調査区外へ抜ける。あたかも、後円部に沿って形成されているように見えることから、この溝がつくられた時期にはなお未だに墳丘の盛土が一部残っていたことも想像される。古墳の北側には東西走向の、南側には南北走向の素掘小溝群が分布しており、南側の1条の小溝から糸切り底の完形の縁輪陶器が出土したことは、古墳の破壊と周辺の土地の地割形成時期を考えうえで1つの示唆を与えるであろう。

下田東古墳の基底部での規模は、後円部径約16m、前方部幅約10m、前方部長約5mで、墳丘全長約21mを測る。前方部長が後円部径の半分以下であるため、帆立貝型の前方後円墳と称している。墳丘の周囲には幅3.5～5mほどの濠がめぐり、周濠を形成している。現存深度は60～80cmを測る。埋土は概略3大別でき、上部は暗褐色粘質土、中部はにぶい黄褐色砂粒混じりシルト質土、下部は褐灰色シルト層で、下部を中心に自然木や枝葉、実などの植物遺体が多量に出土した。上部から中部にかけては埴輪片や須恵器が多数含まれていた。後世に墳丘が破壊された時を中心に、崩落、埋没したのである。埋土中部から出土する埴輪は破片の大きさが大きく、なかにはその場で押し潰されたような破損状況を示す円筒埴輪もみられた。上部に含まれるそれは小さく破損した状態であった。周濠内の後円部北東には、基盤層の削り出しによる幅約1.7～2.0mの渡り堤(陸橋部)がつくられている。濠底からの高さは25～40cmほどで、埋土の中段上面で検

出できた。この渡り堤付近、周濠の外側から長径約150cm、短径約100cm、深度約15cmの土坑が検出され、土師器の長胴甕が横位に埋設されていた。土器は土坑底部側の片半部のみ遺存する。ところで、周濠埋土から葺石と思われる様の出土はなく、墳丘の外表に本来葺石は施されていなかったと考えられる。また、埋葬施設を想わせるものの出土もなかった。一辺約10cm、厚さ約3cmの凝灰岩切石破片が1点みられたが、後世の混入品である可能性が高い。近年出土例が増加し、注目されている墳丘に樹立されていたであろう木製品は、1点の出土もみなかった。

さて、前方部側の周濠北端には幅15~40cm、深度5~15cmの溝が付設されている。約5m北側で「水路1」とした規格の大きな溝に接続する。水路1の幅は約9.9mを測るが、その南外側に緩傾斜の法面が形成されている(法面の上場からの水路幅は約11.7m)。この部分から古墳と同じ円筒埴輪片が複数出土したため、古墳と一連の施設と推定した。水路1の埋土は上部が褐色シルト質土、中部は褐色砂粒混じり粘質土、下部は黒褐色シルト混じり粘土層で、とくに下部から自然木が多数出土した。中部以深に遺物はほとんど含まれていない。古墳周濠の水がオーバーフローする場合に水路1へ流れるようにしたものであろうか。古墳周濠内を一時水が流れたであろう痕跡に、前方部側において埋土上部の下位に砂層の堆積がみられた。

なお、本古墳の所在地は香芝市下田東3丁目9番地ほかで、小字は「川辺ノ町」と称する。奈良盆地の西部に位置する馬見丘陵の南西端に近接した盆地低地部に立地する。標高は現地表面で約52.2mを測る。近辺には、東方の馬見丘陵上にいくつか古墳が分布している。そのうち最も近隣に位置するのが、北東約300mの馬見丘陵上に立地する勘平山第1・2号墳(直径13~15mの円墳、基底部の標高は約70~67m)である。過去の発掘調査(註1)の結果、木棺直葬墳であることが判明し、出土した須恵器から5世紀後半と推定されている。また、南西約800mには狐井丘陵と称される低い高台上に、墳丘全長約140m、前方部幅約110m、後円部径約90mの狐井城山古墳(現状では外堤と周濠を有する)が築かれている。東側外堤裾部の標高は約59m前後を測る。墳丘部の発掘調査は未だ実施されていないが、墳丘形態や周濠の調査で出土した円筒埴輪などから5世紀末~6世紀前半の築造時期が考えられている。

近年、奈良盆地の各地で、墳丘が削平されて現水面下に埋もれてしまった古墳が見つかりだしている。本古墳もその一つで、奈良盆地の古墳の分布を考えるうえで重要な資料である。

註

- (1) 白石太一郎・前園実知男 1974『馬見丘陵における古墳の調査(奈良県史跡名勝天然記念物 第29冊)』
奈良県教育委員会

4 出土遺物

調査区各所で多くの遺物が出土し、コンテナ246箱分になった。その種類は、サヌカイト(剥片・未成品・製品)、縄文土器、弥生土器、土師器、製塙土器、須恵器、円面鏡、埴輪(円筒・朝顔・蓋・盾・家・馬・鶏・人物)、人面墨書き土器、墨書き土器、瓦器、瓦質土器、瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦)、陶器、磁器、土馬、木製品(馬歛・畜串)、鉄製品(刀子)、石製品(石劍・磨石・叩石・砥石)、種子(ドングリ・クルミ)、錢貨(乾元大寶、治平元寶、寛永通寶)、馬齒である。

以下、主要遺構ごとに出土遺物の内容を述べる。

(1) 下田東古墳(図6~14)

下田東古墳は、先述したように墳丘が削平されて埋葬主体のほか外表施設がすでに失われておらず、築造当初の遺物は、削平を免れて埋没した古墳周濠下部と周濠に接続する水路1から出土している。また、墳丘破壊時期を知る手がかりと成り得る墳丘削平面上の素掘小溝からも遺物が出土している。

・古墳周濠の遺物

古墳周濠出土遺物には、土師器、須恵器、埴輪、金属製品がある。調査時には周濠を4分割して遺物を取り上げている。すなわち、I区(西側)、II区(南側)、III区(東側)、IV区(北側)である。

埴輪は、円筒形・朝顔形・盾形・蓋形・家形・鶴形・馬形・人物形と多くの器種があり、周濠全域から出土している。

円筒形埴輪 川西宏幸編年V期に属するもので、底部調整、凸帯貼付けにおける断続ナデ技法の存在、須恵質埴輪の存在から奈良県・菅原東遺跡の埴輪窯で作られた可能性が指摘できよう。

1は周濠II区で出土した。基底部を欠く2条3段分であるが3条4段に復元される。口径26.3cm、残存高25.0cm、底径不明、器壁最大厚1.4cmを測る。2段目と3段目に対向する位置で円形透かし孔が穿たれている。透かし孔は直径6.0cm。粘土紐を輪積み成形し、口縁部はラッパ状に開く。器面調整は外面が横方向気味で右下がりの粗いナナメハケを施しているが、所々にヘラケズリが散見できる。その後、外面には基部~4段目幅が4.5cm・7.0cm・7.5cmとなるように、幅は1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯断面は低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。4段目に×状の線刻記号が存する。内面はナナメ方向のナデである。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好。

2は周濠IV区で出土した。基底部を欠く2条3段分であるが3条4段に復元される。口径28.5cm、残存高21.0cm、器壁最大厚1.2cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味にラッパ状に開く。器面調整は外面が右下がりの粗いナナメハケを施しているが、所々にヘラケズリが散見できる。内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部~4段目幅が0.5cm以上・7.0cm・9.0cmとなるように、幅1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目に対向する位置で直径6.5cmの円形透かし孔が穿たれている。4段目に波状の線刻記号が施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

3は周濠I区で出土した。基底部を欠いて2条3段分が残存するが、3条4段に復元される。口径26.3cm、残存高35.3cm、器壁最大厚1.4cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味にラッパ状に開く。器面調整は、外面が右下がりの粗いナナメハケを施しているが、内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部~4段目幅が8.3cm以上・9.5cm・12.5cmとなるように、幅1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目に対向する位置で直径6.9cmの円形透かし孔が穿たれている。4段目に半月状の線刻記号が施される。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

4は周濠II区で出土した。基底部を欠いて2条3段分が残存するが、3条4段に復元される。

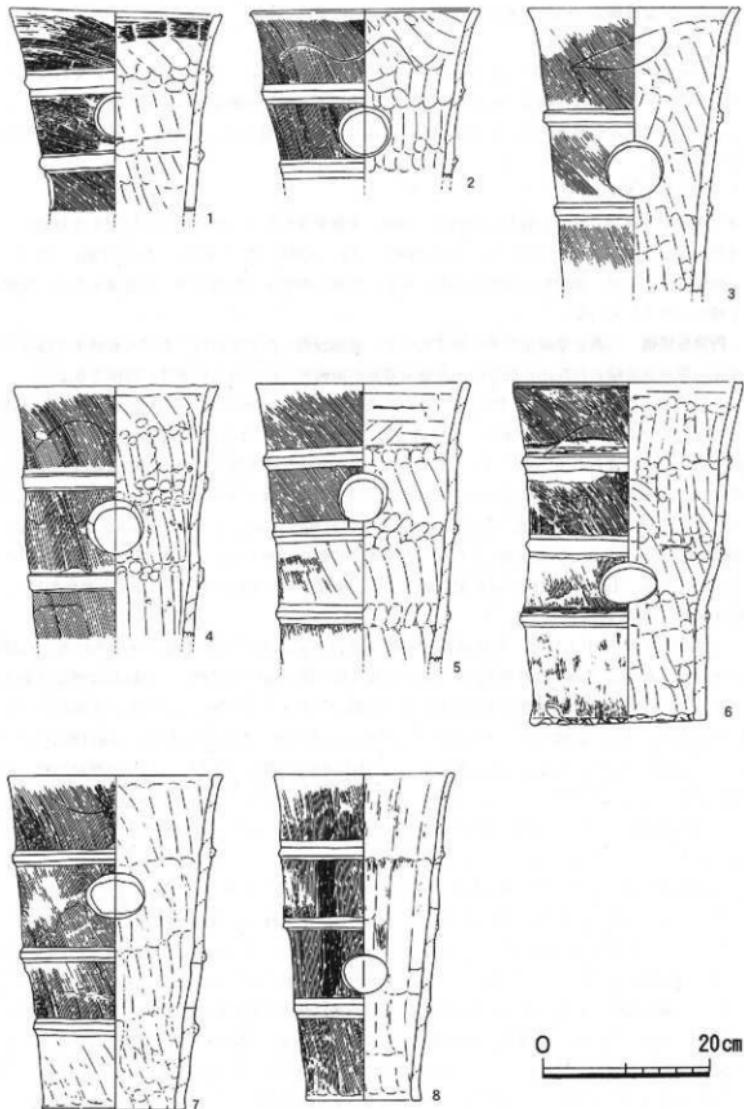


図6 下田東古墳出土 円筒形埴輪実測図 ($S=1:6$)

口径25.3cm、残存高31.0cm、器壁最大厚1.2cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部はラッパ状に開く。器面調整は外面が右下がりの粗いナナメハケを施し、内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部～4段目幅が5.5cm以上・10.0cm・11.0cmとなるように、幅1.5cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面は平坦である。3段目に対向する位置で直径7.2cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

5は周濠I区で出土した。3条4段で、基底部を欠いて2段目以上が残存する。口径26.5cm、残存高34.0cm、器壁最大厚1.4cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味にラッパ状に開く。器面調整は外面が右下がりの粗いナナメハケを施しているが、基部と2段目ではハケがナデ消されている。内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部～4段目幅が5.0cm以上・8.5cm・6.3cm・8.0cmとなるように、幅1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。3段目に対向する位置で直径6.0cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

6は周濠I区で出土した。3条4段で完存する。口径28.2cm、器高42.0cm、底径21.7cm、器壁最大厚1.4cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部はラッパ状に開く。器面調整は外面が右下がりの粗いナナメハケを施しているが、基部～2段目は所々ナデ消している。内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部～4段目幅が12.0cm・7.0cm・8.0cm・9.0cmとなるように、幅1.5cm、高さ0.4cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面はナデによってやや内湾している。2段目と3段目では対向する位置で最大径6.9cmの円形透かし孔が穿たれている。4段目に波形の線刻記号が施される。胎土は密で明褐色を呈し、焼成は良好である。

7は周濠IV区で出土した。3条4段で完存する。口径26.5cm、残存高41.3cm、底径17.7cm、器壁最大厚1.5cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味にラッパ状に開く。器面調整は外面が右下がりの粗いナナメハケを施しているが、基部はナデ消されている。内面はナナメ方向のナデである。その後、外面には基部～4段目が9.2cm・7.0cm・9.0cm・9.0cmとなるように、幅1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面は平坦ながらやや高さを保っている。2段目と3段目に対向する位置で直径6.9cmの円形透かし孔が穿たれている。4段目に弧状の線刻記号が施される。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

8は周濠III区で出土した。3条4段で完存する。口径22.3cm、残存高40.2cm、底径14.3cm、器壁最大厚1.3cmを測る。粘土紐を輪積み成形し、口縁部は窄まり気味にラッパ状に開く。器面調整は外面が全体にタテハケを施し、内面はタテ方向のナデである。その後、外面には各段が10.0cm・8.3cm・7.0cm・8.0cmとなるように、幅1.0cm、高さ0.6cmの凸帯が付される。凸帯は断面が低い台形を呈し、上面はナデによって内湾している。2段目と3段目に対向する位置で直径5.7cmの円形透かし孔が穿たれている。胎土は密で橙色を呈し、焼成は良好である。

盾形埴輪 9は周濠III区で出土した。幅7.0cm、高さ2.0cm、厚さ1.1cmを測る。盾面上端部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

10は周濠IV区で出土した。幅12.0cm、高さ7.5cm、最大厚1.3cmを測る。盾面上端部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。

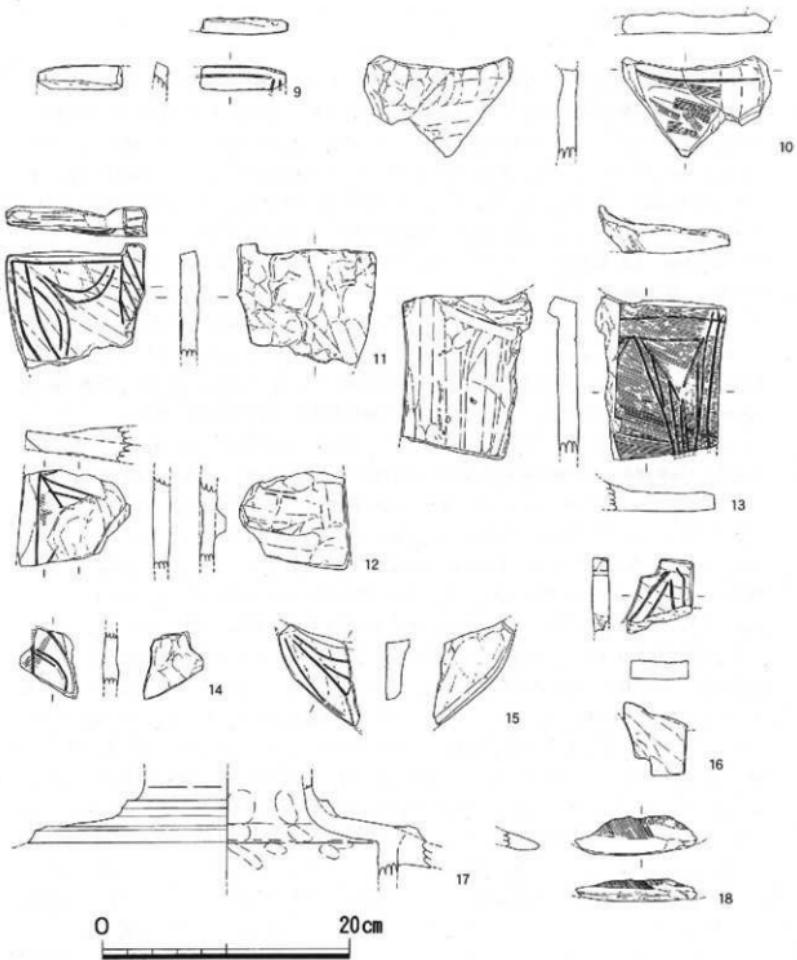


図7 下田東古墳出土 器財形埴輪実測図 ($S = 1:4$)

胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

11は周濠Ⅲ区で出土した。幅11.3cm、高さ10.2cm、最大厚1.5cmを測る。盾面上端部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

12は周濠Ⅱ区で出土した。幅9.0cm、高さ8.0cm、最大厚1.4cmを測る。盾面中央部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

13は周濠Ⅲ区で出土した。幅10.2cm、高さ13.6cm、最大厚1.5cmを測る。盾面上端部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

蓋形埴輪 14は周濠Ⅱ区で出土した。幅5.0cm、高さ5.5cm、最大厚1.2cmを測る。飾り部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

15は周濠Ⅳ区で出土した。幅6.6cm、高さ8.5cm、最大厚1.8cmを測る。飾り部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

16は周濠Ⅲ区で出土した。幅5.3cm、高さ6.2cm、最大厚1.4cmを測る。飾り部分の破片で、縁に沿って線刻が1条施される。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

17は、周濠Ⅰ区で出土した。笠部残存復元径32.5cm、高さ8.2cm、厚さ1.6cmを測る。粘土板による成形で、器面調整は外面・内面ともにナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

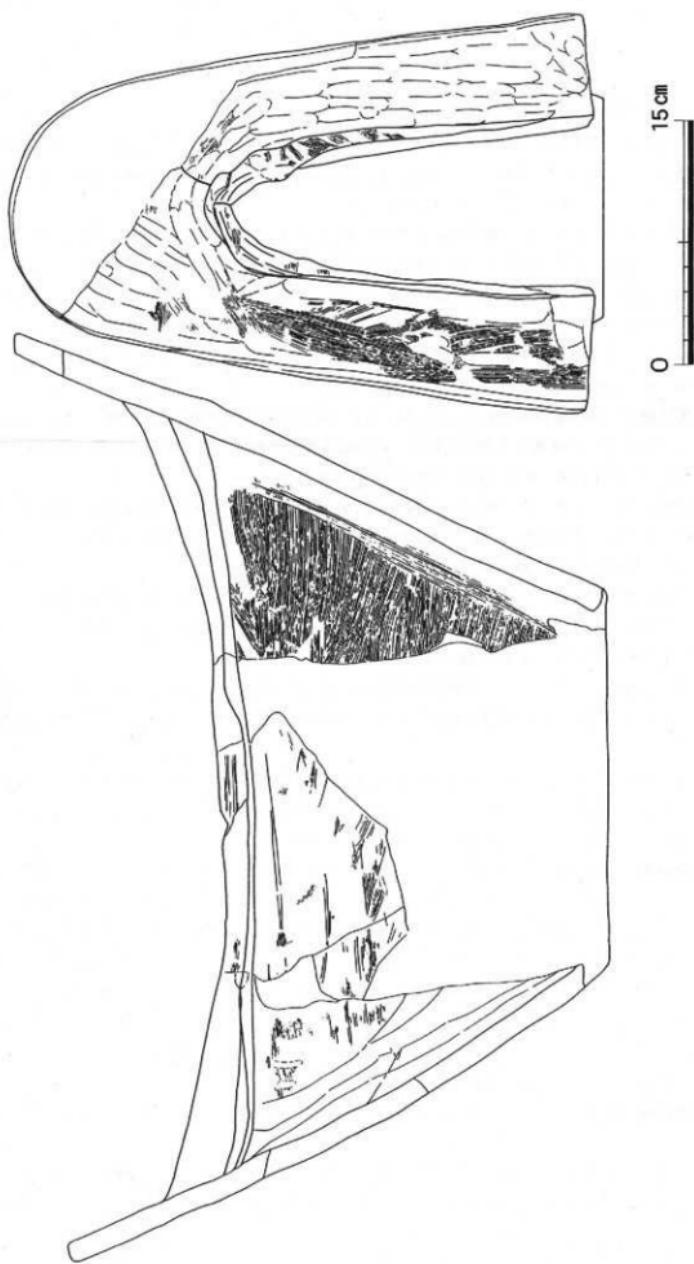
18は、周濠Ⅰ区で出土した。残存長辺10.0cm、残存短辺3.0cm、厚さ1.5cmを測る。笠部縁の破片である。器面調整は外面がハケ後、端部を一定方向ナデを行っている。内面もナデである。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

家形埴輪 19は周濠Ⅱ区とⅢ区で出土した。入母屋造りの切妻屋根部分である。屋根部分高さ33.0cm、上端幅57.0cm、下端幅30.0cm、奥行き17.0cm。破風部分高さ49.0cm、厚さ2.0cm、下端幅33.0cmを測る。破風のついた屋根両端と中央部分の破片を確認している。屋根部分、破風部分ともに粘土板成形であり、屋根部分の両端で破風部分が接合している。外面調整は屋根部分がナデをおこなった後、ヨコハケをしている。茅葺の方向を示していると思われる。内面はナデ調整である。破風部分は逆U字形の形状に沿ってナデを行い、同様の方向で一部ハケによる2次調整が見られる。屋根部分はヨコハケに粗密の差が大きく、2個体である可能性が高い。胎土は密で褐色を呈し、焼成は良好である。

鶏形埴輪 雌雄一対があつて体部・基底部も存在するが、それぞれ頭部のみの図化とし、報告する。

20は雄の鶏形埴輪で、周濠Ⅱ区で出土した。頭部の核となる粘土球を2方向から粘土板で挟み込んでナデ成形している。粘土板の縁端部はヘラ状工具で鋸歯形に切り込みを入れて鶏冠を

図8 下田東古墳出土 家形埴輪実測図 ($S = 1 : 3$)



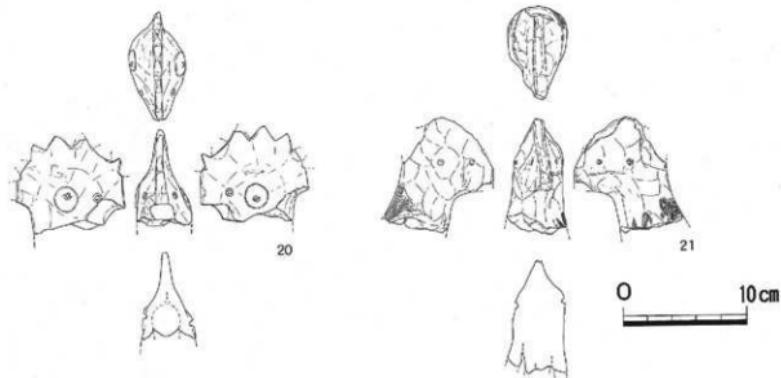


図9 下田東古墳出土 鶴形埴輪実測図 ($S=1:2$)

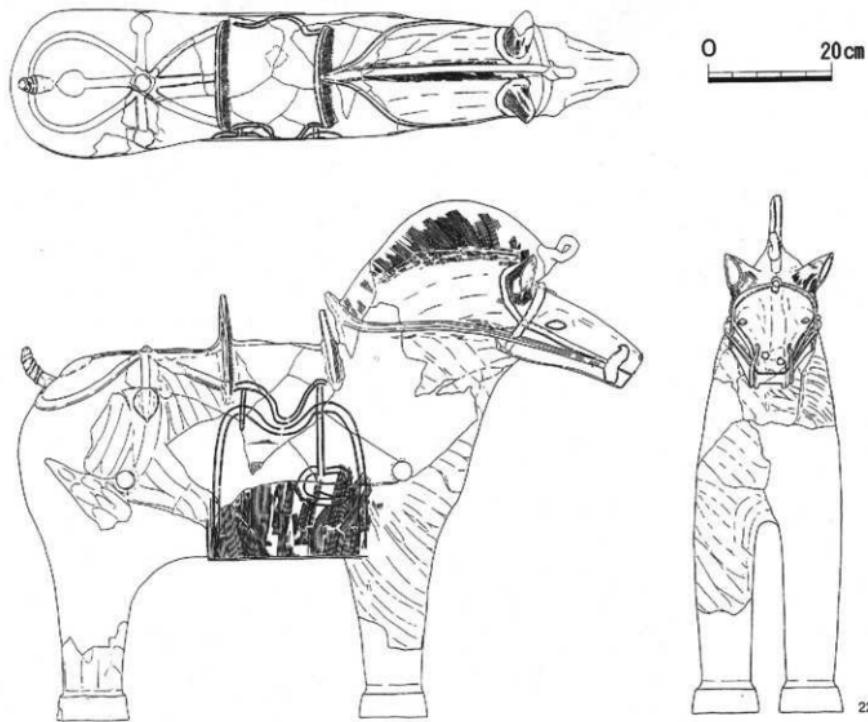
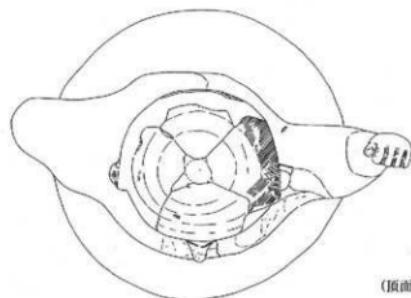
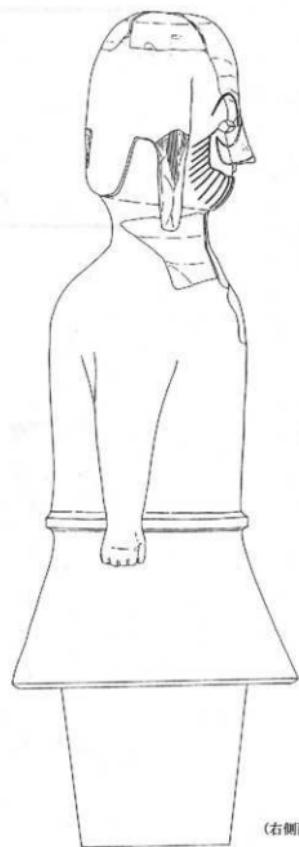


図10 下田東古墳出土 馬形埴輪実測図 ($S=1:80$)



(頂面)

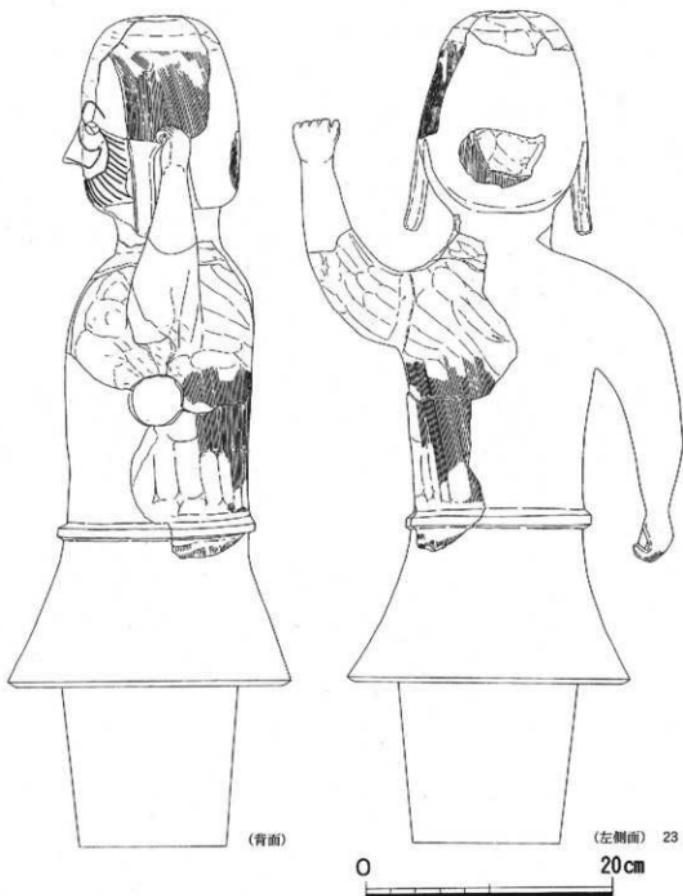


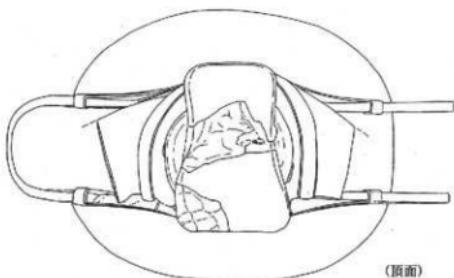
(右側面)



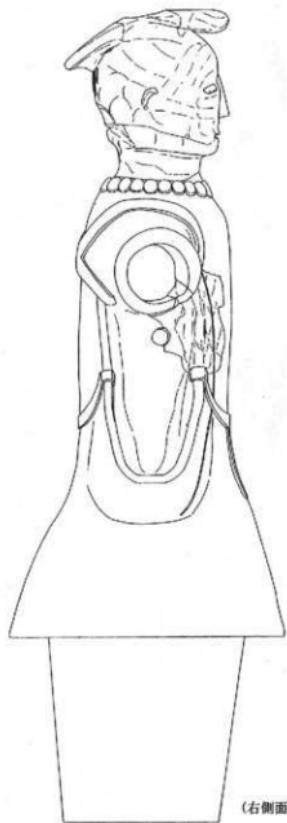
(正面)

図11 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図1 ($S=1:4$)

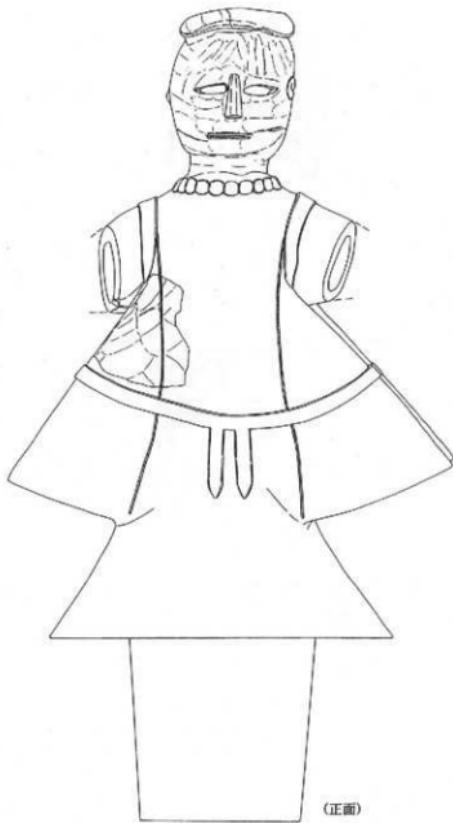




(正面)



(右侧面)

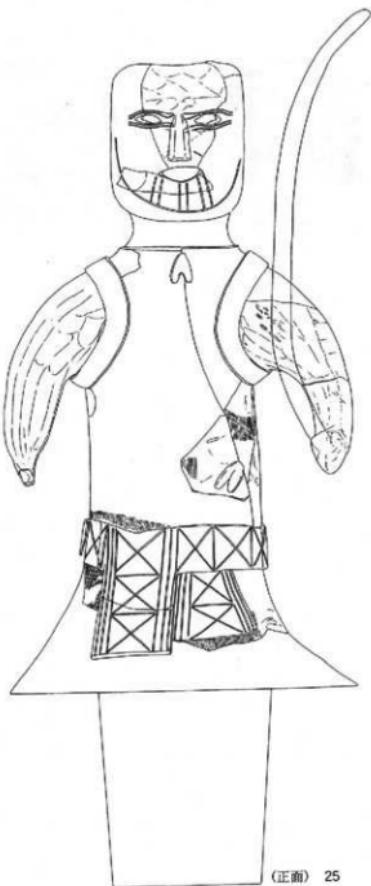


(正面)

図12 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図2 (S=1:4)



(左侧面) 24



(正面) 25

0 20cm

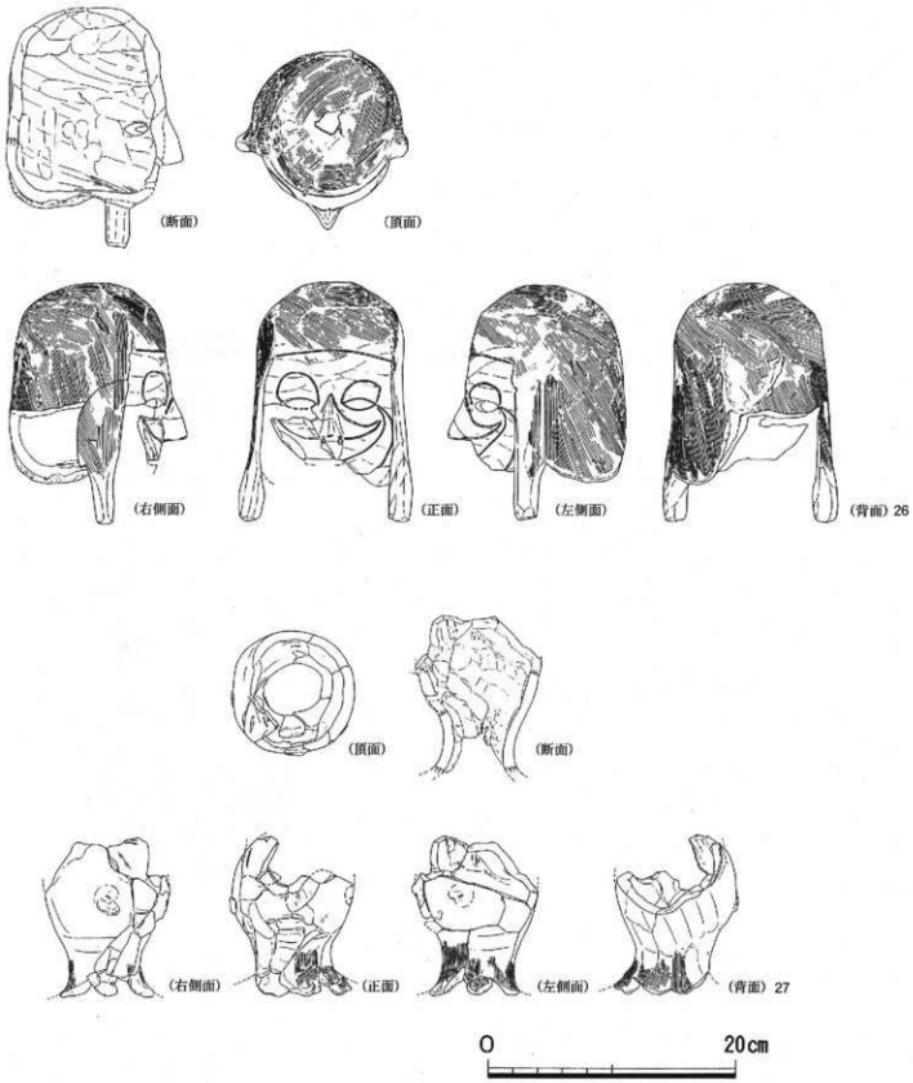


図13 下田東古墳出土 人物形埴輪実測図3 (S=1:4)

表現している。耳朶は小さな粘土紐で環状にして側頭部に貼り付けて表現している。目は円形に工具で刺突して表現している。鼻先から嘴にかけては欠損しているため不明である。

残存値は、頭部が高さ5.0cm、幅6.0cm、厚さ4.0cmを測る。鷄冠は高さ、幅ともに1.0cmである。耳朶は2cmほどの径を測る。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好である。

21は雄の鷄形埴輪で、周濠Ⅱ区で出土した。頭部の核となる粘土球を2方向から粘土板で挟み込んでナデ成形している。粘土板の縁端部はナデで、頭頂から鼻先まで一連の表現をしている。鼻先は欠失している。耳と目は円形に工具で刺突して表現している。後背頭部はハケ調整が認められる。頭部以下は欠損しているため不明である。

残存値は、頭部が高さ8.0cm、幅6.0cm、厚さ5.0cmを測る。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好。

馬形埴輪 22は周濠Ⅰ区で出土した。右側胸繫と右後脚、左側胸繫から左前後脚、尻繫を失うが、ほぼ全体がわかる。円筒状の粘土板成形した脚部に体部となる粘土板を貼り付け、粘土板成形の鞍校、障泥、円筒状の頭部・鬚を付け足し、さらに別に作成された円筒脇の頭部を組ぎ足して成形されている。前後両脚、尻繫には直径3.0cmの円孔が穿たれている。外面は全体が一定方向のナデ調整で成形されている。その後、各所に馬具などの装飾部を粘土紐で貼り付けて表現している。頭部では目・口部のヘラ切による穿孔、刺突による鼻孔穿孔の後、引き手、手綱、f字形鏡板が貼り付けられている。顔つきは優美である。左側は手綱が剥離してしまっている。鬚では先端に粘土紐を折り合わせて燃りをかけて結蓋があったと考えられる。鬚はタテハケによって美しい毛並みが表現されている。体部にある鞍校では前輪・後輪が三日月状の粘土板を体部に接続してナデ成形された後、一定方向のハケ調整がなされる。居木は平行する2条の線刻によって表現されている。そこから下垂する輪鉛、障泥も同様の線刻表現で障泥はタテハケの2次調整が施されている。鞍校背後から尻繫にかけては革紐が上から見ると「米」字形に垂れ下がり交点となる部分に雲珠が表現される。側体部にはハート型杏葉が垂下する。尻繫は欠損しているが最大径3.0cmの太い粘土紐に1.0cm弱の細い粘土紐を螺旋状に巻きつけた尻尾が残存している。全長103.0cm、高さ84.0cm。頭部長さ20.0cm、眼孔位置での幅20.0cm、鼻先での10.0cm。左右眼孔幅5.0cm、高さ1.5cm。鼻孔径0.5cm。口幅6.0cm、幅0.2cm。引手長さ30.0cm、幅1.0cm。手綱長さ50.0cm、幅1.0cm。f字形鏡板長さ5.0cm、幅3.0cm。鬚長さ30.0cm、高さ10.0cm。鞍校前輪・後輪幅20.0cm、高さ10.0cm、厚さ1.0cm。居木長さ・幅とともに20.0cm。輪鉛長さ20.0cm、幅8.0cm×5.0cm。障泥高さ30.0cm、幅20.0cm。尻尾長さ8.0cm。「米」字形革紐長さ40.0cm×30.0cm、幅2.0cm。上端幅57.0cm、下端幅30.0cm。奥行き17.0cm。破風部分高さ49.0cm、厚さ2.0cm。下端幅33.0cm。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好である。

人物形埴輪 男子像3体分、女子像2体分を確認している。服飾部分の破片が出土しているものもあり、それ以上の個体数になる可能性はある。

23は馬子形埴輪で、頭部と腕から肩にかけて胴体部が周濠Ⅱ区から出土した。頭部は側頭部で美豆良を結い、一定方向のハケメで調整されていることから、頭髪を表していると考えられる。眉、鬚はヘラによる線刻でを行い、目と鼻孔と口は穿孔により表現している。鼻は尖るようにして高い。馬の手綱を引く左手は肩と腕の一部がある。外面調整はナデであり、肩から脇にかけては剥離痕跡がある。首から胸にかけてはヨコナデで調整されている。丁寧なハケメ調整や穢やかな

表情をしている点は、馬形埴輪に通じており、作者は同一であると考えられる。このことは、馬形埴輪と馬子形埴輪が一对のものとして捉えられると言えよう。復元高68.0cm、頸部長16.4cm、眼孔位置での頭部幅13.8cm、鼻先での奥行18.0cm。頭部美豆良長13.0cm、幅2.4cm、最大厚1.4cm、左右眼孔高1.0cm、幅3.0cm。鼻長4.0cm、鼻高1.8cm。鼻孔径0.5cm。口長3.0cm、幅0.4cm。左腕最大径6.0cm、復元長20cm。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好。復元にあたっては、奈良県・笛鉾山1号墳例を参考にした。

24は巫女神埴輪で、頭部と衣装である意須比の一部が周濠I区とIV区から出土した。頭部は目と口を穿孔しており、耳と鼻は粘土紐を貼り付けている。全高66.4cm、頸部長20.0cm、眼孔位置での頭部幅10.4cm、鼻先での奥行10.4cm。頭部古代島田齋復元長14.0cm、幅9.4cm、最大厚1.6cm、左右眼孔高0.9cm、幅2.6cm。鼻復元長6.5cm、鼻復元高1.0cm。口幅3.8cm、幅0.5cm。意須比復元最大幅36.4cm、下端幅28cm、奥行き22.5cmである。褐色を呈し、胎土は密。焼成は良好。類例は大阪府・蕃上山古墳、奈良県・勢谷茶臼山古墳、鳥土塚古墳で出土している。これらには、頸部以下は頭部に連珠首飾りがあり、胸部は意須比を纏い胸部上半には襟をかけている。全体復元にあたっては上記類例を参考にした。胎土は赤褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

25は武人形埴輪で、弓を持ち鞍を背負っている。周濠II区から出土した。頭部と両腕部から胴体と衣装の一部を確認した。頭部は板ナデ調整であるが額に鉢巻をしたような剥離痕跡があり、冠もしくは胄のような被り物が存在したと考えられる。目と口は穿孔で表現されている。両目の上下は先刻で縁取られているが、駄と考えられる。鼻は孔に近いような線刻で表現されている。口唇部は上下が分離しており正確な開き具合は分からぬが、少し大きく口を開けている。胎土

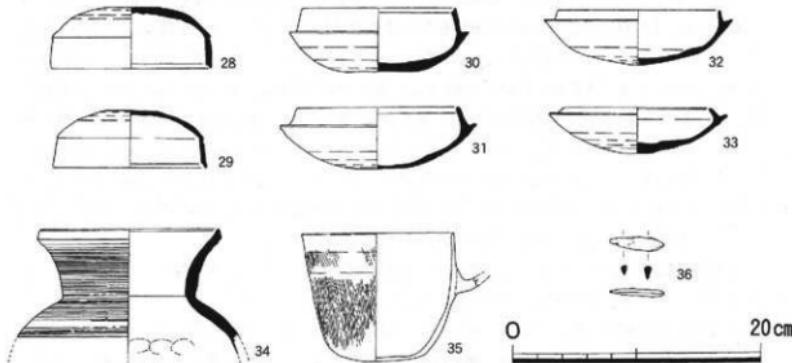


図14 下田東古墳出土 土器・金属製品実測図 (S = 1:4)

は橙褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

26は武人形埴輪で、顎面をもつ頭部のみの出土である。周濠II区から出土した。頭髪は美豆良を結い、目と鼻孔と口は穿孔により、眉、鼻から口元や頬にかけての三日月の跡はヘラによる線刻で表現している。この線描の類例は奈良県・石見遺跡、四条古墳でも出土している。胎土は橙褐色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

27は巫女神形埴輪で、頭部から肩にかけて周濠IV区から出土した。頭部はナデ調整によって表現される。臉から頭頂部にかけては欠損しているため、結髪などの頭髪の様子は不明である。目と口は穿孔されており、目の下部が残されているため、表情の復元が可能である。鼻は鼻孔を2箇所の刺突文で表現されている。耳と鼻は粘土紐の貼り付けで行う。首左側を中心にタテハケ調整が看取できる。胎土は黄味がかった灰白色を呈し、白色砂粒を含んでいる。

須恵器 28・29は杯蓋である。いずれも外面調整が体部上半を回転ケズリ、下半は回転ナデにより稜を成している。内面は回転ナデを行う。灰色を呈する。28は周濠I区埋土中層から出土した。口径13.2cm、器高5.0cm、最大厚0.7cm。29は周濠IV区埋土上層から出土した。口径12.6cm、器高4.7cm、最大厚0.4cm。口頸部はやや外反する。器壁は28に比べるとやや薄い。30~33は杯身である。いずれも外面調整が体部上半を回転ケズリ、下半は回転ナデにより稜を成している。内面は回転ナデを行っており、灰色を呈する。30は周濠III区埋土中層から出土した。口径12.5cm、器高5.2cm、最大厚0.8cm。受部立ち上がりはやや内傾し、器壁は厚い。31~33は体部上半の回転ケズリが頂部付近にとどまり、受部立ち上がりも次第に高さが低くなる。31は北側周濠埋土中層から出土した。口径13.2cm、器高5.2cm、最大厚0.4cm。32は周濠IV区埋土上層から出土した。口径13.3cm、器高4.5cm、最大厚0.5cm。33は周濠III区埋土中層から出土した。口径12.2cm、器高3.7cm、最大厚0.9cm。

34は短頸壺で、口径14.5cm、器高10.2cm以上、口頸部長6.0cm、最大厚1.0cmを測る。外面調整はカキメで、内面調整はナデと指頭圧が胴部に残る。

土師器 35は把手付椀で、口径12.3cm、器高10.5cm、最大厚0.5cmを測る。

金属製品 36は鉄製刀子である。全長4.5cm以上、幅1.0cm、最大厚0.5cmである。

(2) 旧河道 (図15・16)

旧河道からは、土師器、須恵器、人面墨書き土器、黒色土器、瓦、埠、土製品、木製品が出土している。

土師器 37・38は杯である。37は口径17.7cm、器高5.0cm、最大厚0.6cmを測る。38は口径17.8cm、器高4.8cm、最大厚0.4cmを測る。39は壺で、口径13.2cm、器高5.1cm、最大厚0.7cmである。40は長胴甕で、口径18.3cm、器高10.4cm、最大厚0.8cmである。43は羽釜で、口径24.5cm、器高11.7cm、最大厚1.1cm、鉢部径35.3cm、同最大厚1.2cmを計測する。外面調整はイタナデ、内面調整は胴部が押圧工具痕である。44は長胴甕で、外反する口縁と鉢部分が接して作られている。口径25.6cm、器高6.9cm、最大厚1.3cm、鉢部径37.2cm、同最大厚1.3cmを測る。49~51は土師質土器小皿である。49は口径8.7cm、器高1.3cm、最大厚0.4cmを測る。50は口径10.3cm、器高1.5cm、最大厚0.5cmを測る。51は口径14.9cm、器高2.6cm、最大厚0.5cmを測る。



図15 旧河道出土 土器・土製品・木製品実測図 (S = 1:4)

人面墨書き土器 41は口径13.2cm、器高11.2cm、最大厚0.7cmを測る。人面は土師器裏の胸部上方に2方向描かれる。1方向は顔全体が描かれ、もう1方向は顔全体のうち左目以外が遺存する。42は口径13.0cm、器高9.0cm、最大厚0.7cmである。土師器裏の胸部上方に1方向にあり、眉・目の表現が確認できる。

須恵器 45は杯蓋で、口径15.2cm、器高1.7cmである。直径1.5cm、高さ0.8cmのつまみが付く。46は杯身で、口径10.4cm、器高2.6cm、最大厚0.7cmである。47は杯蓋で、口径21.4cm、器高2.7cmである。直径2.3cm、高さ1.1cm程のつまみが付く。48は杯身で、口径18.2cm、器高4.2cm、最大厚0.7cm、高台径12.7cm、高台高0.7cmを測る。

黒色土器 52は両黒で、口径14.9cm、器高4.5cm、最大厚0.8cm、高台径6.6cm、高台高1.3cmを測る。外面調整のヘラミガキの間隔が疎らで、内面調整も同様である。内面見込みには、一方向のヘラミガキが施される。53・54は内黒で、53が口径15.5cm、器高4.5cm、最大厚0.9cm、高台径9.1cm、高台高0.7cmを測る。外面調整は指頭圧後ナデ、内面調整は密なヘラミガキである。54が口径15.5cm、器高4.0cm、最大厚0.3cm、高台径8.5cm、高台高0.5cmを測る。外面調整はナデ、内面調整は疎らなヘラミガキである。

土製品 55は土馬で、後左足と考えられる。残存長10.1cm、最大径4.4cm、下端面径3.5cmを計測する。

木製品 56・57は簀串である。56は完存。全長12.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmを測る。57は片側が欠損。残存長21.9cm、幅2.5cm、最大厚0.5cmである。

瓦 58は複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、1+6+10の蓮子を配す。瓦当は直径16.6cm、内区は直径12.6cm、中房は直径5.1cmを測る。外区には線鋸齒文を施す。瓦当側面の一部に、約1.0cmの範のかぶりが確認でき、さらに、丸瓦接合段階で入れたと考えられる丸瓦凸面部に斜めの切り込みの痕跡が確認できる。この瓦は、奈良県・尼寺北庵寺、大阪府・妙見寺と同范である。

59は単弁十六弁蓮華紋軒丸瓦で、9トレンチ溝埋土から出土した。1+8の蓮子を配す。瓦当裏面は横方向のヘラケズリの後、ナデ調整を行い、下半周縁を斜めに面取りする。放光寺(王寺町)と同范の可能性がある。このほか、玉縁丸瓦、行基丸瓦が出土している。

60は四重弧紋軒丸瓦で、瓦当厚3.2cm、頸の長さ8.2cmを測る。調整は凸面側が横方向のヘラケズリを行っているが、その痕跡が顯著に残る粗雑な作りである。また、瓦当端部は深く面取りを行う。これらの形状から、川原寺式軒平瓦C種であると考えられる。

61は均整唐草紋軒平瓦で、瓦当面の右側破片が残る。平城宮式6721型式に該当する。

62は凸面布目平瓦である。ほかに23点の出土を確認している。狭端幅22.0cm、広端幅はやや湾曲するが27.5cm、長さは平瓦中央部で41.0cmを測る。凹面はヨコナデを行った後、縦方向にもナデを行う非常に丁寧な調整である。このほか、繩叩き平瓦、横繩叩き平瓦、斜格子叩き平瓦、陰陽の逆転した斜格子叩き平瓦が出土している。

磚 数点が出土しており、被熱したものも含まれる。63はで、長辺17.7cm、短辺15.3cm、最大厚4.5cmを測る。外面調整はケズリである。

鶴尾 2点が出土している。64はその形状から、頂部付近の破片であると考えられる。削り出しによって、内郭に幅2.8~4.0cmの正段型を、外郭には直径4.5~4.8cmの連珠文を配す。縦帶の

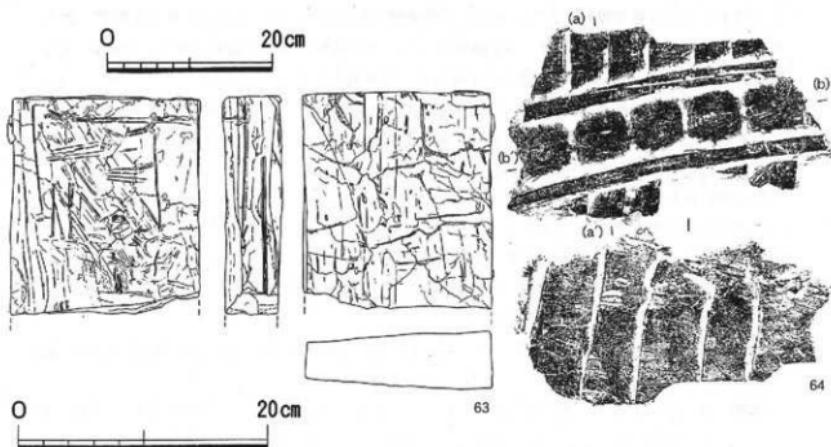
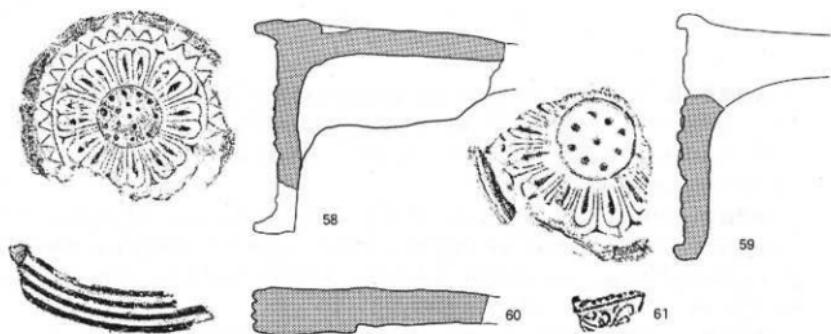


図16 旧河道出土 瓦・塼・鷺尾実測図 ($S = 1:4, 1:6$)

幅は1.0～1.5cm、最大厚は4.5cmを測る。鳥坂寺(大阪府柏原市)出土の鶴尾の形状に類似する。

(3) 水路2(図17)

水路2からは、土師器、須恵器、人面墨書土器、黒色土器、瓦、埴、土製品、木製品、凝灰岩切石等が出土している。

土師器 65は長胴甕で、口径21.2cm、器高28.0cm、最大厚0.9cmである。外面調整は口頸部がナデ、肩～胴部はタテハケ後底部付近にヨコハケを施す。内面調整は口頸部が細かいヨコハケのほかはナデまたは指頭圧である。66は甕で、外面調整は口頸部がナデ、肩～胴部はタテハケ後ヨコハケを施し、内面調整は指頭圧である。口径13.7cm、器高13.0cm、最大厚0.8cmである。67は杯で、口径12.0cm、器高3.3cm、最大厚0.6cmである。外面調整は指頭圧後口縁部がヨコナデ。内面調整はナデであるが、ヘラによる刻線が平行線状に全面施された後、直交する中心線が刻まれる。68は杯で、口径25.0cm、器高3.0cm、最大厚0.7cmである。全体の半分が残存し、外面調整は指頭圧後ヘラケズリ。底面中央に「〇に井十一」のような刻線が施されている。

須恵器 70は杯蓋で、口径10.6cm、器高1.8cmである。直径1.4cm、高さ0.7cmのつまみが付く。71は杯蓋で、口径11.6cm、器高3.7cm、最大厚0.8cmを測る。72は杯身で、口径9.3cm、器高2.5cm、最大厚0.7cmを測る。73は杯Gで、口径10.8cm、器高4.0cm、最大厚0.8cmを測る。74は甕である。口径16.5cm、器高19.7cm、最大厚1.0cmを測る。口頸部は窄まって口縁端部は強く外反し、端面には段が認められる。肩部は広く、胴部にかけて大きく広がる。外面調整はカキメのちタタキ、内面調整は同心円状の押圧工具痕が残る。75は円面窯で、全体の2分の1が残存し、器形は海部を明確に有しない点が特徴である。窯面は摩滅して中央が窪み、使用痕が認められる。脚部には長方形の透かし窓があり、復元すれば7箇所にヘラ切りによる穿孔窓が配されたと考えられる。

木製品 76は馬鍼で、柄部全長124.0cm、同断面5.0cm×9.0cmは長方形である。刃部全長29.5cm、断面六角形2.5cm×3.5cmを測る。柄部の幅狭面に断面正方形の刃部10ヵ所が等間隔に挿入されており、幅広面に牛馬に引かせる轍が挿入される。轍は2ヵ所で一辺4.0cmの断面正方形である。柄部は欠失している。

(4) 第18トレンチ大溝(図18)

第18トレンチ大溝からは、土師器、須恵器、製塙土器、鋳造関係遺物、石器、石製品が出土している。

土師器 77・78は土師器の甕である。77は完存し、口径14.6cm、器高12.3cmを測る。外面は肩部から体部にかけてタテハケ後ナナメハケが看取できる。内面は下部で指頭圧が見られ、他はナデ調整である。78は底部以外が残存し、口径13.3cm、残存高9.5cmである。外面は肩部から体部にかけてタテハケ後ナナメハケであり、内面はナデ後一部ナナメハケが看取できる。

79は土師器の瓶である。口径24.8cm、底径11.5cm、器高20.8cm、把手長さ6.0cm、同径2.0cmを測る。粘土紐輪積み成形後、外面では細かいタテハケが施され、内面ではヨコナデ後ナナメナデを底部から行なっている。橙色を呈する。底部外面は一定方向ケズリが成された後、中央に直径3cmの円孔を配し、外縁3方向に半月状孔をヘラ切で穿っている。

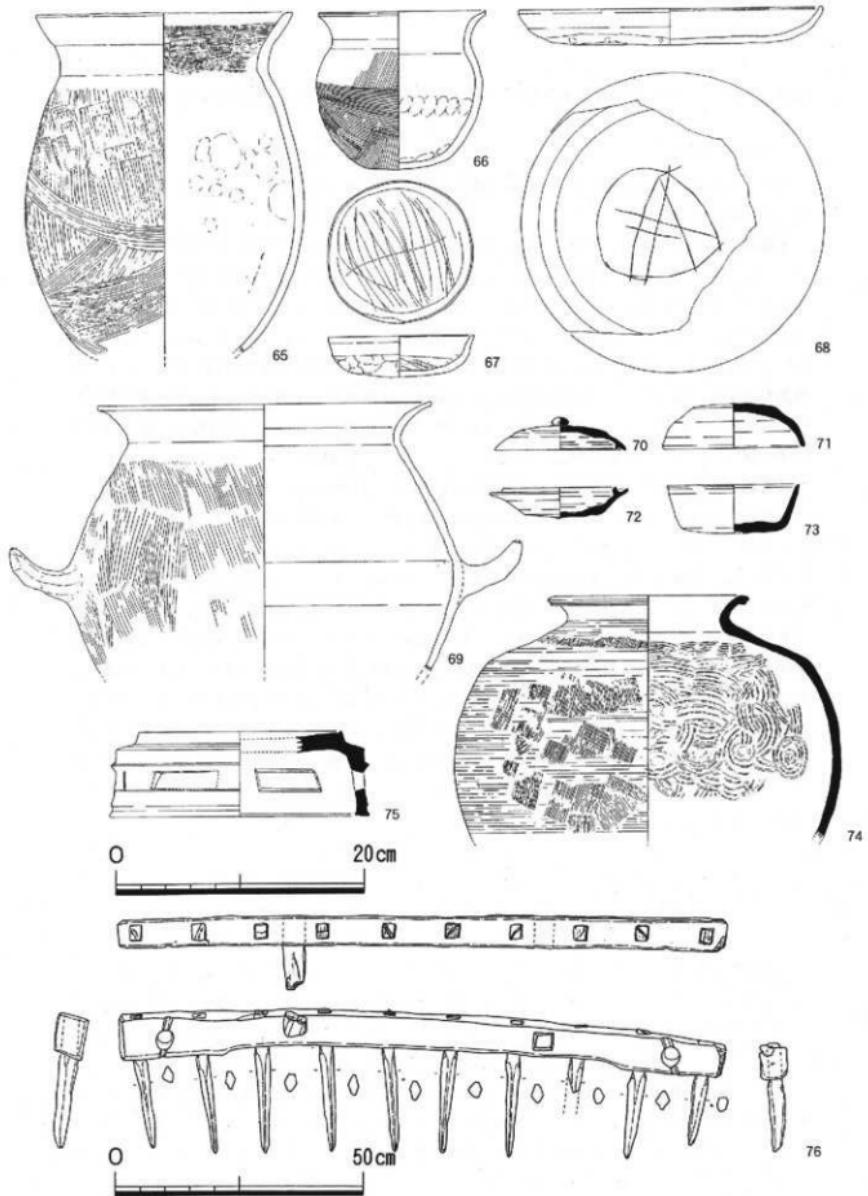


図17 水路2出土 土器・木製品実測図 (S = 1:4、 1:10)

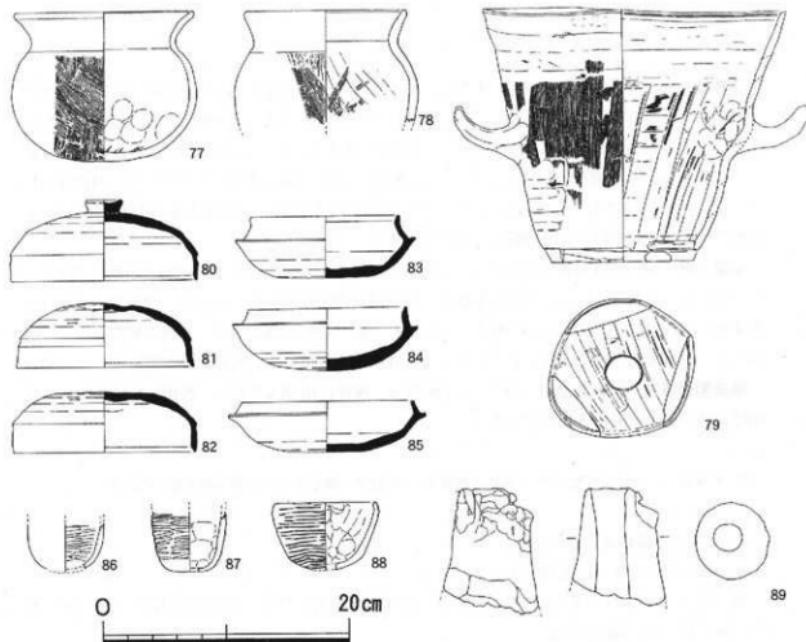


図18 第18トレンチ大溝出土 土器・鋳造関係遺物実測図 ($S = 1:4$)

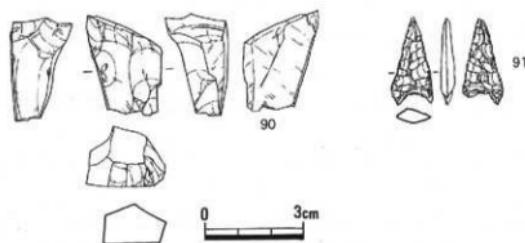


図19 第16トレンチ他出土 石器実測図 ($S = 2:3$)

須恵器 80は有蓋高杯蓋である。口径15.3cm、器高6.7cmである。直径3.0cm、高さ1.0cmのつまみが付く。81・82は杯蓋である。外面は天井部が回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで、それ以外はヨコナデを行なっている。口縁端部には明瞭な段を有する。81は口径14.4cm、器高5.3cm。82は口径14.8cm、器高5.0cmである。83～85は杯身である。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデで、それ以外はヨコナデを行なっている。83は口径12.2cm、器高5.0cm。84は口径13.0cm、器高5.0cm。85は口径14.2cm、器高4.0cmを計測する。

製塙土器 86～88は製塙土器である。器壁最大厚が2～3mmで、出土時は殆どが細片で出土した。86はコップ型(註1)で、外面は指頭圧、内面は貝殻条痕である。87はコップ型で、外面は貝殻条痕、内面はナデである。88は椀形で、口径8.3cm、器高5.5cmを測る。丸底の底部から立ち上がって、口縁端部を直立させて丸くおさめる。外面は貝殻条痕で、内面はナデである。

鉄造関係遺物 89は縫羽口である。口径6.0cm、残存長10.2cmである。吹出入口は炉内への送風時の被熱によって一部崩れている。

註

(1) 木本誠二 2003「製塙土器」『南郷遺跡群Ⅲ』(奈良県立橿原考古学研究所調査報告第74冊)

(5) その他の遺構(図19・20)

他の調査区でも多くの遺物が出土している。

90はチャート製の凹基式石築で、水路の南西肩より出土した。現存最大長26.4mm、最大幅12.2mm、最大厚4.5mmを測る。

91は緑色凝灰岩製の管瓦未成品で、16トレンチ柱穴内から出土した。最大長31.1mm、最大幅26.8mm、最大厚19.6mmを測る。図中右側の面には研磨によるとみられる擦痕がわずかに観察できる。

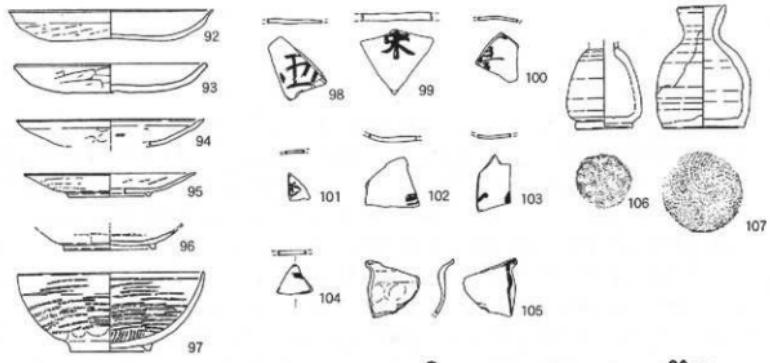
92～94は土師器杯である。92・93は外面にヘラケズリが施され、94は外面に指頭圧痕が見られる。

95は黒色土器の台付皿である。ナデ成形後、ヘラミガキが観察できる。見込みに円孔が穿たれている。

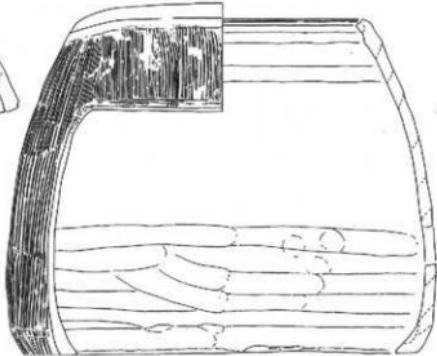
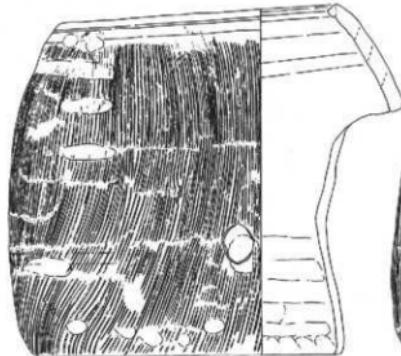
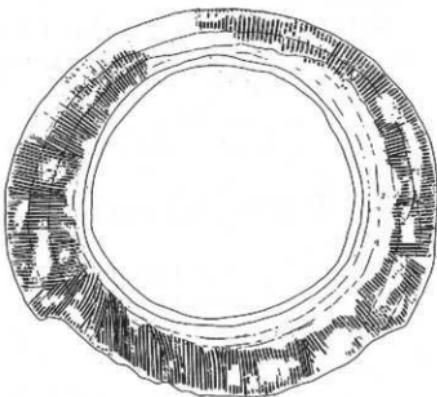
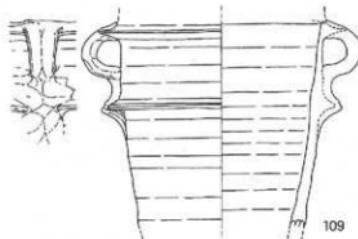
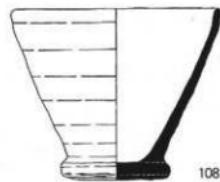
96・97は瓦器の椀で、9トレンチ西部の素掘小溝から出土した。96は高台付近の体部が残存する。

97は口径15.2cm、器高6.4cm、高台径6.6cm、高台高0.7cmである。体部は半球形状で口縁部は内湾する。高台は外面がやや内側に傾き、逆台形である。焼成がやや不良なうえ、摩滅によって残り具合はあまり良くない。調整については、外面は胴部下部から高台にかけて指頭圧痕を残し、胴部にやや粗いミガキを、口縁端部にヨコナデを施す。近江俊秀編年のI～2期(11世紀後半)に属するものと思われる。

98～104は墨書き器で、11トレンチで出土した。いずれも土師器の杯の底部外面に墨書きされた部分の2～3cm角の破片であり、断片的に判読できる。98は「西」。99は「東」。100は2文字あり、そのうち1字は「量」の可能性がある。101は則天文字の一部であろうか。102～104は一部分であり、判読できない。105は土師器の甕で、11トレンチで出土した。口縁から炭化物質が流



0 20 cm



110

図20 第1・9~11・13トレンチ出土 遺物実測図 (S=1:4)

出した痕跡と考えられる。

106は縁軸陶器の小瓶で、9トレンチ西部の素掘小溝から出土した。残存高6.8cm、底径4.8cmである。口縁部は欠損している。高台は平高台で削り出しによるものと思われる。外面には縁軸が施されているが、摩滅しているため残り具合はよくない。調整については、外面は回転ヘラケズリを施すが、内面は口径が小さいため観察不能である。底部は糸切痕が明瞭に残る。近江産か、洛北・栗柄野13号窯産か。9世紀前半の所産である。

107は須恵系陶器の小瓶で、9トレンチ西部の素掘小溝から出土した。口径3.8cm、底径6.5cm、器高9.8cmである。調整については、口縁端部はやや肥厚し、丸くおさめる。外面は回転ヘラケズリ・ナデを施す。内面は口径が小さいため観察不能である。底部には糸切痕が明瞭に残る。なお、外面胴部下半には煤が付着し、さらに底部には黒い煤が付着する。

108は須恵器の擂鉢である。完存する。口径17.2cm、底径9.0cm、器高14.0cmを測る。古墳時代中期の所産である。

109は須恵器の双耳壺である。上部、下部とも欠損する。上端径17.0cm、下端径13.5cm、残存高17.0cmを測る。平安時代初頭の播磨産の可能性が考えられる。

110は土師器の移動式竈である。ほぼ完存する。口径23.0cm、底径32.0cm、器高は前部29.0cm、後部27.5cmであり、10~11条を単位とした粗いタテハケを反時計回りに施している。焚き口窓部は幅29.0cm、高さ20cmで、底は付かない。

IV 平成14年度(五位堂区画第2次)調査概要

1 はじめに

平成14(2002)年度の第2次調査(註1)は、先述したように事業地西側区域を調査対象地とした。すなわち、香芝市下田東3丁目および大字狐井地内の山崎川から事業地西端の初田川までの間の約4.5haである。

対象地内での工事計画は、その中央の小字「瓦ヶ田」地区に1号調整池が、南隣の小字「藤ノ木」地区に2号調整池が設置され、その間を葛下川河川改修が東西走向で付け替えられる予定である。いずれも深度掘削は現地表下5mを超える。この他、全域で地下埋設溝を伴った街区道路が造成されることが開発部局側から提示されていた。

これに対して、調査区は基本的にこれら開発箇所に設定し、調整池設置箇所では本調査を、街区道路箇所では試掘・確認調査を実施することが前年度に本教育委員会との事前協議で合意された。しかし、今年度が始まった直後の4月10日に1号調整池周囲に深度掘削を伴った工事用進入路の敷設計画が突如として伝えられた。この部分は遺構の全壊が免ないと判明したため、急遽、調査区を追加することとなった。

現地調査は5月29日から本調査北区の設定作業を行い、6月4日に重機と作業員による掘削を開始した。本調査北区・南区は11月30日まで調査した。この時点で、柱建物などの遺構が存在することが確実となっていた両調査区に挟まれた市道部分は、河川改修予定地でありながら調査対象外とされていた。このため、開発部局との調整を経て先行工事区域を本調査中央区として追加し、12月15日まで本調査を行った。

他の調査区は随時設定することとした。街区道路箇所では幅員6mをそのままトレンチ幅とし、計画路線上で各トレンチ長を調節した。本調査北区の北隣の小字「一中田」地区では、第25~27トレンチを設定して12月~1月に調査した。小字「藤ノ木」地区では、第28~30トレンチを設定して本調査南区と同時に調査した。その西側の小字「向井町」地区には、第31~35トレンチ・本調査北西区・本調査西区を設定し、1月~3月に調査した。このうち、第35~37トレンチと本調査西区は遺構検出までの作業を実施した。翌年度に発掘調査事務所の移転先である小字「会式田」地区では、事前に第36・37トレンチを設定して2月に調査した。

現地調査は3月8日に終了し、最終的に3月29日で完了した。実働200日を要した。なお、11月15日・16日には、事業地内の土地所有者を対象とした現地説明会を開催し、初日には32名の参加があった。また、市内他所で開始された発掘調査に赴くために12月28日に調査担当の佐藤が現場を離れ、1月4日より湯本が引き継いだ。

註

(1) 調査名については、本事業に伴う調査では「五位堂区画」を冠した。例えば、第1次調査は「五位堂区画第1次」となる。これは従前の下田東遺跡地内での調査次数と混同しないためであり、今後の周知遺跡範囲の修正とともに既往調査次数の整理作業が進行する中で、正式採用もしくは変更されることを念頭においての措置である。なお、本文中においては、「五位堂区画」を省略して報告している。

2 各調査区の調査概要

第2次調査の総面積は14,622m²で、本調査北区・北西部で実施した上層調査1,642m²を含めると、延べ面積は16,264m²である。調査成果は以下の通りである。

第25トレンチ 第25~27トレンチは、本調査北区の北隣の小字「一中田」地区に計画されている街区道路造成箇所の調査である(図21)。第25トレンチは6m×75mの東西調査区で、標高51.1~51.2mである。現地表下0.5mでオリーブ褐色粘質土の基盤層に到達する。このトレンチ東側から第26トレンチにかけては、東西・南北走向の素掘小溝群や小石を使用した暗渠施設1506・1507以外に顯著な遺構は存在しない。トレンチ西側では素掘りで円形の井戸1512、本調査北区で検出した旧河道66下層に河道の延長部分を検出した。

第26トレンチ 4m×66mの南北調査区で、標高51.1~51.2mである。基盤層は、第25トレンチと同一水田上の調査であるため、オリーブ褐色粘質土の維続部分を確認した。トレンチ南側16m分では灰色シルトに変化する。東西・南北走向の素掘小溝群以外の顯著な遺構は存在しない。

第27トレンチ 12m×50mの東西調査区である。ここでは、にぶい黄褐色粘土で標高50.9mと下がる。これは河川に近づくことや水田開削によると考えられる。これら基盤層上に遺構が築かれている。第27トレンチでは素掘小溝群は確認できない。

・溝1500 最大幅3.5m、深さ1.1mの溝で、長さ6.5m分を検出した。井戸1501を破壊していた。
・井戸1501 直径1.0m、深さ1.2mの円形井戸。掘形底部に縦板が方形に組まれた井戸枠材が残存し、須恵器甕が1点出土した。井戸枠材上部は抜き取られたようである。7世紀代のものであ

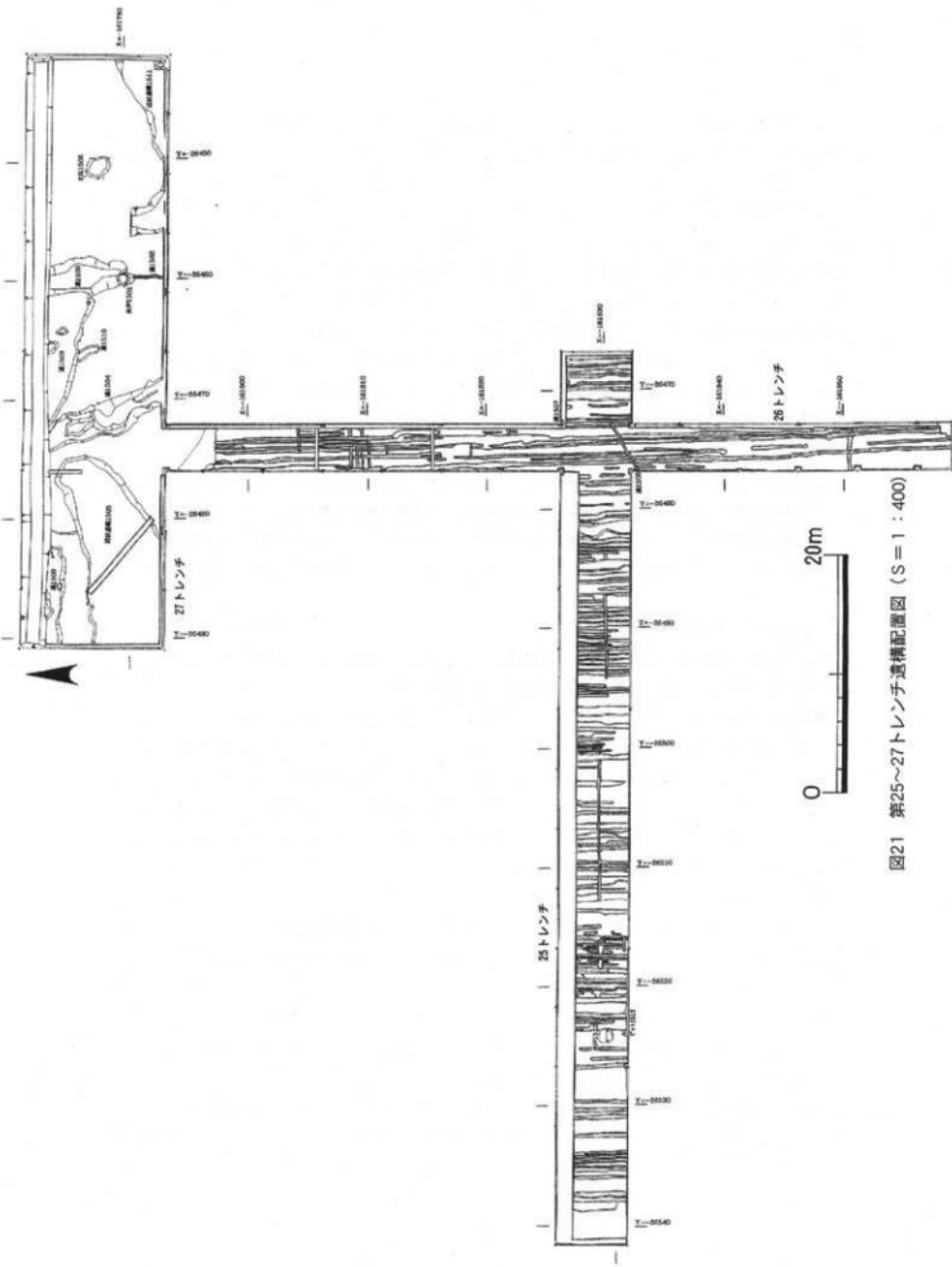


図21 第25～27トレンチ遺構配図 ($S=1 : 400$)

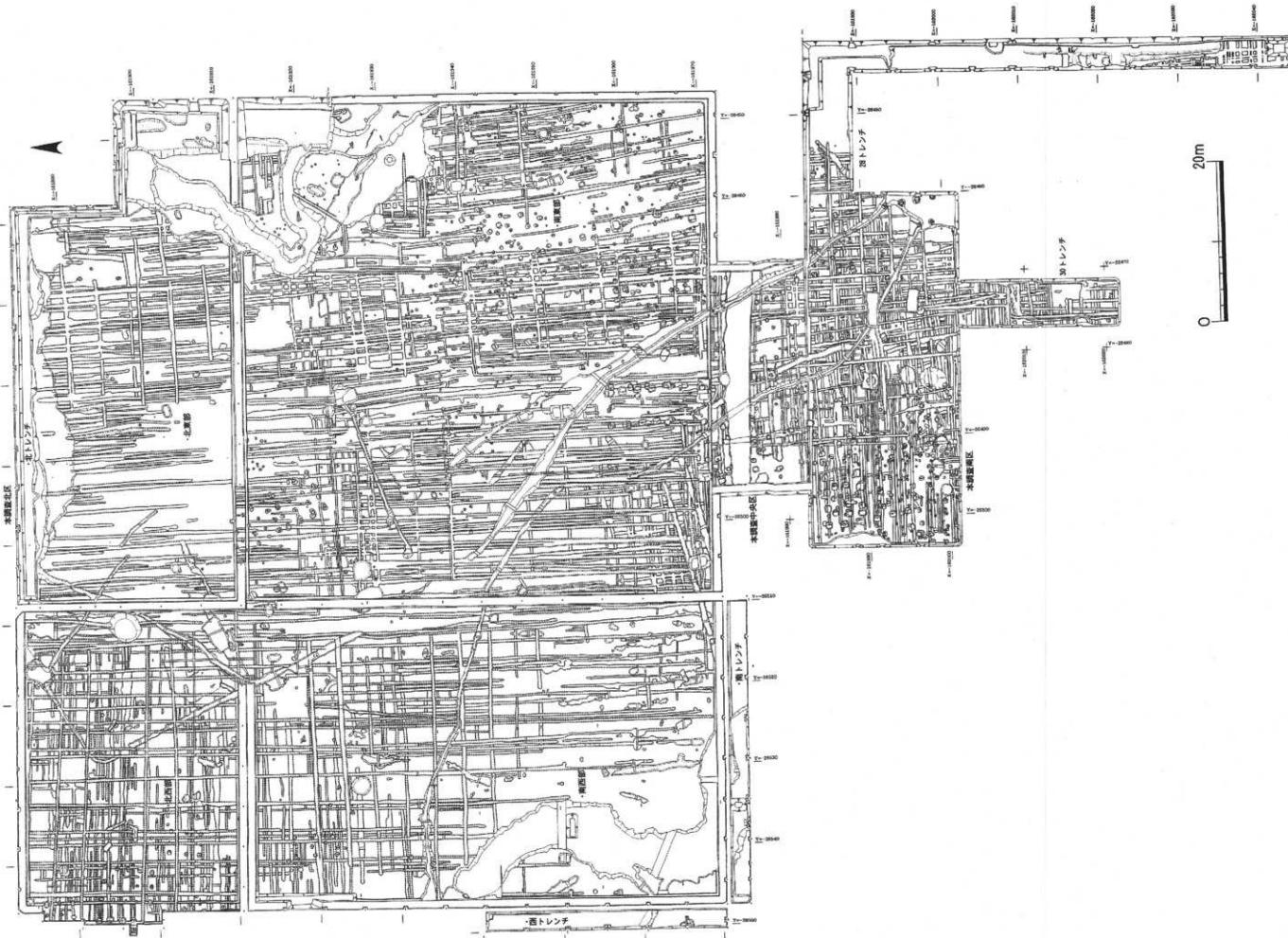


図22 第28~30トレンチおよび木津川北・中央・南区 遺構配置図 (S = 1 : 400)

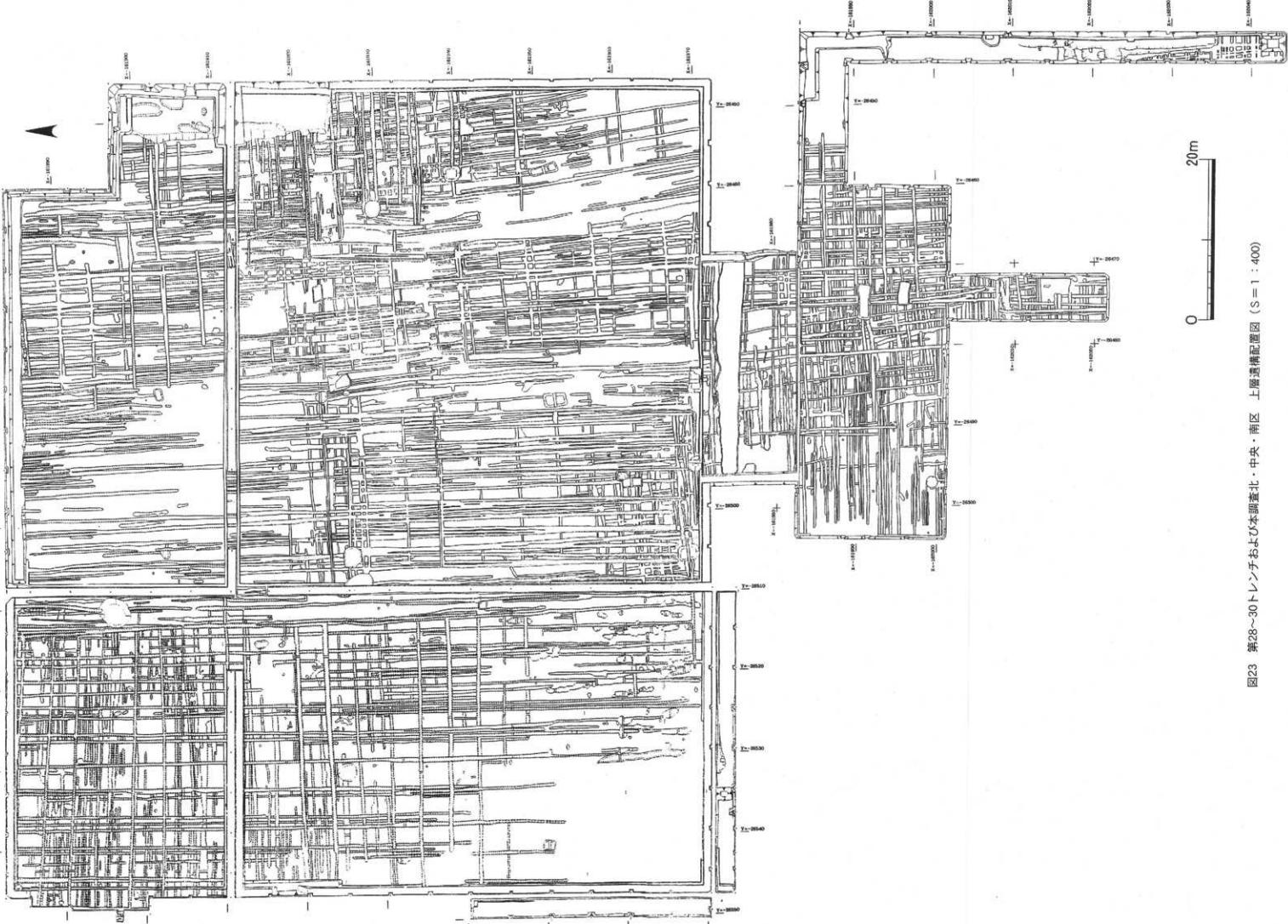


図23 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 上層遺構配置図 (S = 1 : 400)

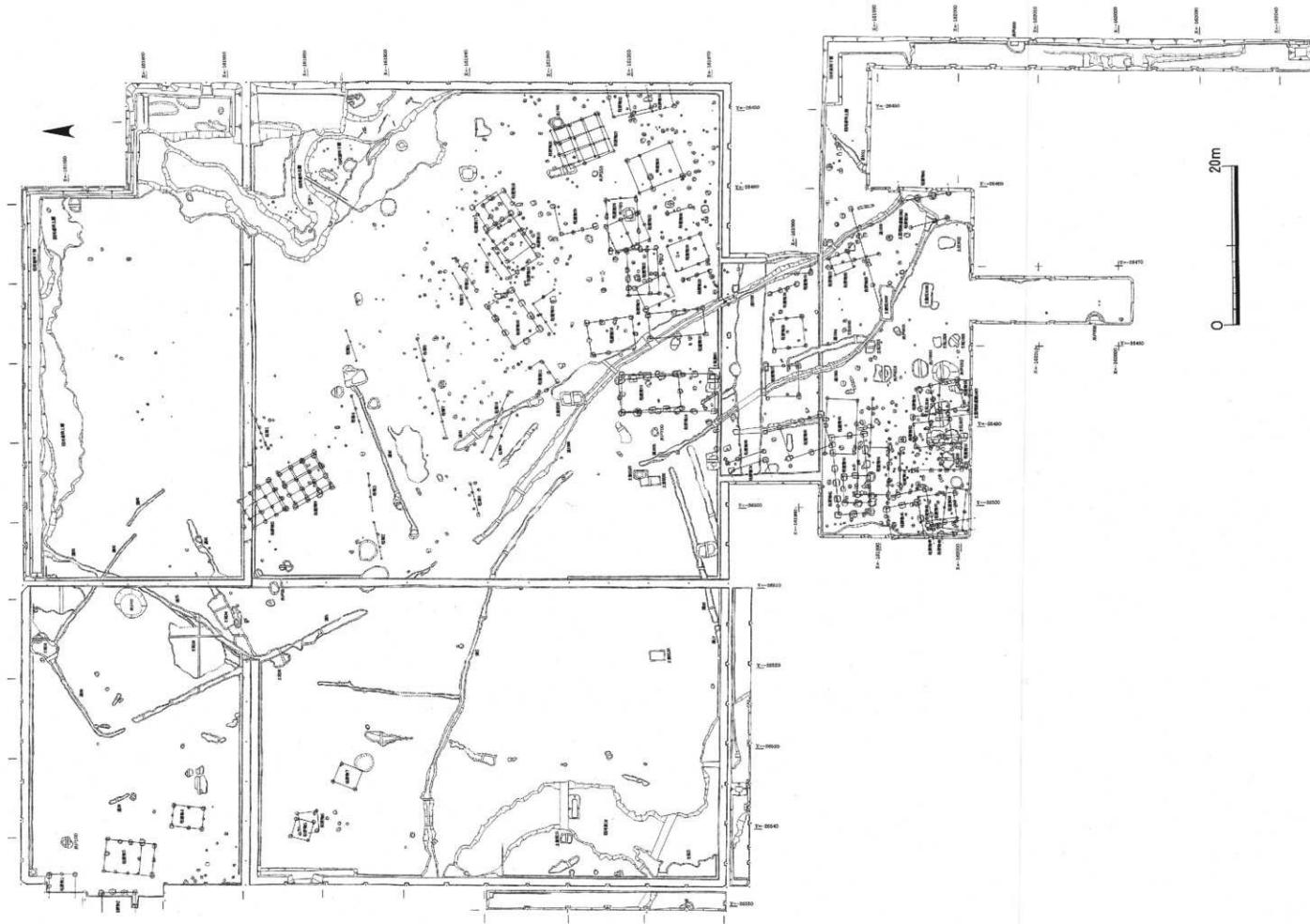


図24 第28～30トレンチおよび本調査北・中央・南区下層遺構配置図 ($S=1 : 400$)

ろう。

- ・溝1502 幅0.25m、深さ0.2mの溝。井戸1501に取り付き、関連性があると考えられる。
- ・溝1503 溝1500より以前の溝と考えられる。
- ・溝1504 幅3.0m、深さ1.0mの溝。長さ11.0m分を検出した。砂層の埋土より布留式期の土師器壺1点が出土した。
- ・沼状構造1505・1511 旧河道の埋没過程で最終的に残された浅い落ち込みと考えられる。

本調査北区 本調査北区は、事業地中央西寄りに計画された1号調整池設置箇所の調査である(図22~24)。先述したように、調整池本体(2,310m²)と同様に掘削深度が10mに達する付帯工事用進入路箇所を合わせて調査区とした。調査面積はほぼ水田一町分の8,943m²と広大であるため、ほぼ正方形の調査区を調整池箇所の「南東部」を最大にして4分割した。「南西部」では南トレンチ(南東部南拡張区)と西トレンチ(南東部西拡張区)を、「北東部」では北トレンチ(7・8グリッド間トレンチ)を設定した。また「北西部」では、3面を調査した。

基本層序は、第1層が褐色砂質土層(層厚約20cm)の現水田耕土、第2層は明褐色砂質土層(層厚約5cm)で現水田底土、第3層灰オリーブ砂質土層(層厚約5cm)、第4層は黄灰色砂質土層(層厚約10cm)で、いずれも古墳時代~近世の遺物包含層、第5層は黄褐色粘質土層(層厚約20~40cm)で、古墳時代~中世の遺構基盤層となっている。以下、第5層上面で検出した遺構について、概要を述べる。

古墳時代後期~平安時代の集落跡及び鎌倉時代の耕作遺構を検出した。遺構は微高地である北区北西~南東側・南区を中心として全域に分布している。主な遺構は自然河道2・3・溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑、素掘小溝などである(図25~27)。

- ・旧河道9 本調査北区南西側および南区西端で検出した。砂層を埋土としている。
- ・土坑10 弥生時代終末~古墳時代初頭の庄内式土器の転用甕棺が出土している。
- ・旧河道66 本調査北区北東部・南東部および南区東側で検出した。上層(古墳流路)・下層(縄文砂層)に分かれる。

旧河道66上層(古墳流路) 暗褐色粘質土を埋土とする幅5~10m、深さ0.2~0.4mの古墳時代の蛇行流路である。大量の須恵器、土師器などが出土した。これらは5世紀後半から6世紀中頃のもので、古墳時代後期の集落の南東から北を画す流路に大量投棄されたものと考えられる。

旧河道66下層(縄文砂層) 砂層と礫層を埋土とする幅3~5m、深さ約0.2~0.5mの縄文時代から弥生時代にかけても流路である。石劍などの石製品、縄文土器、弥生土器の細片が含まれていた。

- ・区画溝 本調査北区では15条を検出した。これらの溝は、出土遺物からみていずれも5世紀後半~7世紀中頃のものであり、流路とほぼ同じ時期である。配置状況が矩形を呈することから、時期差を伴いながらも古墳時代後期~飛鳥時代の建物を区画していたと考えられる。
- ・掘立柱建物群 柱穴群を本調査北区北西~南東側、南区を中心に多数検出した。そのうち、現段階で建物と確認されたものは壠を含めて、北区北西部で4棟、南西区で3棟、南東区で27棟、北東区は0棟である。計34棟である。建物の方向は斜め方向のものと正方位を意識したものがあり、建物の軸心方向から、6タイプに分けられる。

I類…建物の軸心方向は、北より西へ約30° 振れて建つ。地形の制約を受ける。

II類…建物の軸心方向は、北より西へ約20° 振れて建つ。地形の制約を受ける。

III類…建物の軸心方向は、北より西へ約10° 振れて建つ。地形の制約を受ける。

IV類…建物の軸心方向は、北より東へ約5° 振れて建つ。方位を意識する。

V類…建物の軸心方向は、北より西へ約5° 振れて建つ。方位を意識する。

VI類…建物の軸心方向は、真北に建つ。方位に合わせる。

出土遺物の年代観から、I類が古墳時代中期末～後期、II類が古墳時代後期、III類・IV類が飛鳥時代、V類が奈良時代、VI類が平安時代初頭と、建物のおおよその造営時期が推定できよう。建物が機能した時期は、その配列関係から後段階まで継続して併存したことが考えられる。

・柱建物1 北西区にある、梁行2間、桁行2間以上の東西方向の建物。VI類。

・柱建物2 北西区にある、梁行2間以上、桁行3間の南北方向の建物。梁行、桁行ともに3間の総柱建物と想定される。IV類に属す。柱穴は方形掘形。

・柱建物3 北西区にある、梁行2間、桁行4間の南北方向の建物。間仕切りが存在する。IV類。

・柱建物4 北西区にある、梁行2間、桁行2間の南北方向の建物。IV類。柱穴は方形掘形を含む。

・柱建物5～7 南西区にある梁行1間、桁行1間の南北方向の小型建物。5・7はIV類、6はV類。

・柱建物8 南東区にある、梁行3間、桁行3間の総柱建物。I類。南辺柱列のみ建て替えの痕跡があるが、平行して隣接する柱建物9の火災が飛び火したことによるのであろう。

・柱建物9 南東区にある、梁行3間、桁行3間の総柱建物。I類。建て替えの痕跡がある。柱穴埋土に焼土が混じっているため、小規模な火災が原因と考えられる。

・柱建物10 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。I類。柱穴は方形掘形。

・柱建物11 南東区にある、梁行2間、桁行1間以上の建物。I類。

・柱建物12 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。I類。隠し塀の可能性が考えられる。

・柱建物13 南東区にある、梁行2間、桁行4間の南北方向の建物。V類に属す。柱穴は方形掘形。一辺1.2mが最大。

・柱建物14 南東区にある、梁行2間、桁行5間の南北方向の建物。VI類に属す。柱建物13の建て替え建物。柱穴は方形掘形。

・柱建物15 南東区にある、梁行2間、桁行2間の建物。I類に属す。

・柱建物16 南東区にある、梁行2間分、桁行3間分の建物。I類に属す。

・柱建物17 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。I類に属す。柱穴は方形掘形。

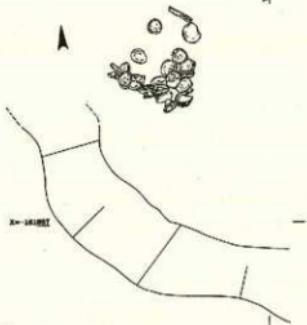
・柱建物18 南東区にある、梁行2間、桁行2間の建物。I類に属す。

・柱建物19 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。IV類に属す。柱穴は方形掘形。

・柱建物20 南東区にある、梁行1間、桁行2間の南北方向の建物。VI類に属す。柱穴は方形掘形。

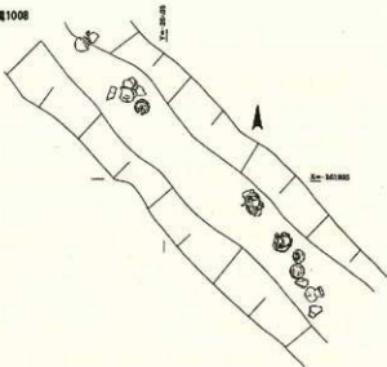
・柱建物21 南東区にある、梁行2間、桁行2間の建物。II類に属す。

旧河道 66 上層

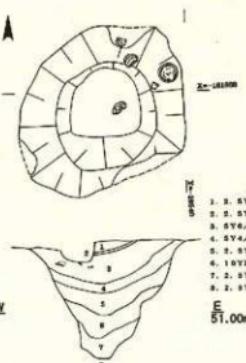


N

溝1008

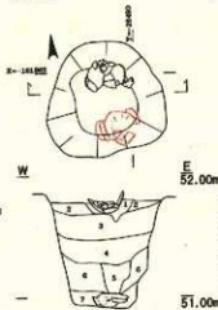


井戸100



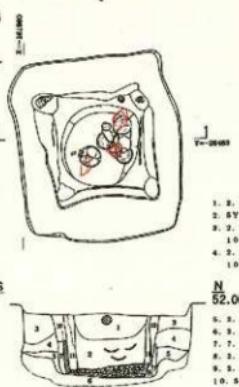
1. 2. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
2. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
3. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
4. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
5. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
6. 1 SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
7. 2 SY4/2 硫酸鉄水系シート
8. 2 SY4/4 オリーブ緑色粘土質土

井戸700



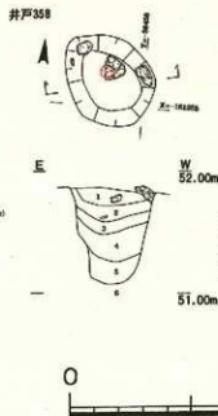
1. 1 SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
2. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
3. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
4. SY4/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
5. 1 SY4/1 黄褐色粘土シート (細砂を含む)
6. 7. SY4/1 黄褐色粘土シート (細砂を含む)
7. SY4/1 黄褐色粘土シート (細砂を含む)
8. 2 SY4/4 オリーブ緑色粘土質土

井戸85



1. 2. SY4/2 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
2. SY4/2 オリーブ緑色粘土質土 (細砂を含む)
3. 2. SY4/2 オリーブ緑色粘土質土
4. 1 SY4/2 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
5. 2 SY4/2 オリーブ緑色粘土質土
6. 1 SY4/2 黄褐色粘土質土
7. SY4/2 黄褐色粘土シート
8. 2 SY4/2 黄褐色粘土シート
9. 2 SY4/2 黄褐色粘土シート
10. SY4/1 黄褐色粘土質土
11. SY4/1 黄褐色粘土質土

井戸358



1. SY3/3 オリーブ緑色粘土質土 (細砂を含む)
2. T. SY3/3 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
3. 1 SY3/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
4. 1 SY3/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
5. 2. SY3/1 黄褐色粘土質土 (細砂を含む)
6. 2. SY4/4 オリーブ緑色粘土質土

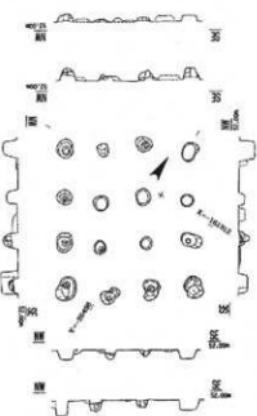
図25 本調査北区 溝・土坑・井戸 平面図・断面図 (S = 1:40)

- ・柱建物22 南東区にある、梁行2間、桁行3間の東西方向の総柱建物。VI類。柱穴は方形掘形。
- ・柱建物23 南東区にある、梁行2間、桁行2間の建物。II類。
- ・柱建物24 南東区にある、梁行2間、桁行3間の東西方向の総柱建物。VI類。井戸85の覆屋と考えられる。柱穴は方形掘形。
- ・柱建物25 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。III類に属し、塀の可能性が高い。
- ・柱建物26 南東区にある、梁行2間、桁行3間の総柱建物。III類に属す。柱建物27の建て替え建物。
- ・柱建物27 南東区にある、梁行3間、桁行3間の総柱建物。II類に属す。
- ・柱建物28 南東区にある、南北2間分。隠し塀の可能性が考えられる。II類に属す。
- ・柱建物29 南東区にある、梁行2間、桁行3間の建物。II類に属す。
- ・柱建物30 南東区にある、南北2間分。隠し塀の可能性が考えられる。III類に属す。
- ・柱建物31 南東区にある、梁行1間、桁行2間の建物。II類に属し、間仕切りをもつ。
- ・柱建物32 南東区にある、梁行2間、桁行1間以上の建物。III類に属する。
- ・柱建物33 南東区にある、梁行2間、桁行1間以上の建物。III類に属する。
- ・柱塀1~12 南東区にある、3間を1単位とした小さな塀。柱塀1~5は柱建物8・9の南塀をなしており、溝97とも関連している。柱塀6~8は、その南側の東西塀をなしている。柱塀9・10は、溝97の埋没後に築かれている。柱塀11~13は柱建物10周辺の北塀をなしている。
- ・井戸 本調査北区北西区で2基、南東部で6基を確認し、北東部、南西部では確認できなかつた。
- ・井戸85 北区南東側にある縦板組隅柱留め井戸枠を有する。完形の10世紀中頃の黒色土器を内蔵していた。集落が存続する時期確定の資料として注目される。

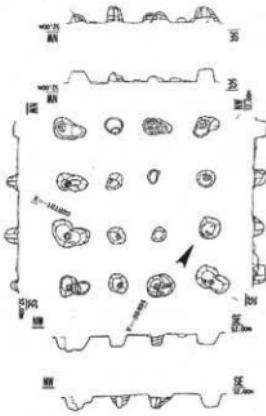
本調査中央区 本調査北区と本調査南区とを分け隔てた市道部分の調査区である。市道は条里制地割の葛下郡二十一条三里内の坪界にあたり、近世には下田村と狐井村、現在では下田東3丁目と大字狐井との境界として継承されている。両区間の道構連続部分を明らかにするとともに条里関連遺構の確認が期待された。

- ・区画溝 本調査中央区では、北区から延びてくるもの以外に3条を検出した。これらの溝は、出土遺物からみていればも5世紀後半~6世紀中頃のものである。古墳時代後期の建物を区画していたと考えられる。
- ・掘立柱建物群 柱穴群は、多数検出された本調査北区と南区に挟まれているため、ここでも検出した。現段階で建物と確認されたものは塀を含めて、7棟である。本調査北区と同様に、建物の軸心方向の6タイプに分けて報告する。
- ・柱建物34 梁行1間以上、桁行1間以上の南北方向の建物。柱穴は方形掘形を呈し、II類に属す。
- ・柱建物35 南北3間?分。柱穴は方形掘形を呈す。柱建物34の庇か、塀の可能性がある。II類。
- ・柱建物36 梁行1間、桁行2間の建物。柱穴は方形掘形を呈し、III類に属す。

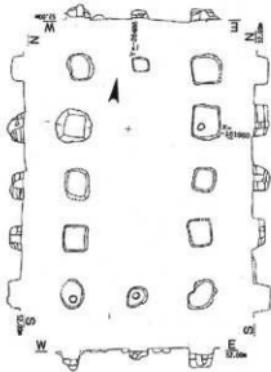
柱建物8



柱建物9



柱建物13



柱建物14

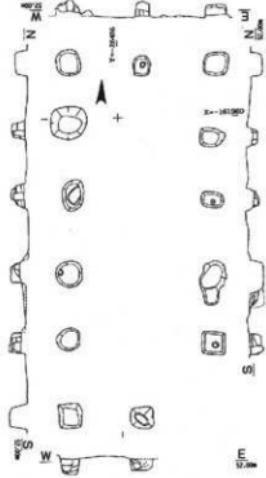


図26 本調査北区南東部 柱建物 平面図・断面図 (S = 1 : 50)

- ・柱建物37 梁行1間、桁行2間の南北方向の建物。柱穴は方形掘形を呈し、VI類に属す。
- ・柱建物38 梁行2間、桁行3間の南北方向の建物。柱穴は方形掘形を呈し、V類に属す。
- ・柱建物39 南北3間分。柱穴は方形掘形を含み、塀の可能性がある。II類に属す。
- ・柱建物40 梁行1間以上、桁行2間以上の建物。柱穴は方形掘形を含み、VI類に属す。
- ・井戸 1基検出した。近世のものである。

本調査南区 本調査南区は、本調査北区と道路を隔てた南隣接地の公園予定地840m²の調査区である。公園地下に埋設される2号調整池(1,160m³)と、周囲の試掘・確認調査第28~30トレンチを含めた調査面積は1,290m²である。

- ・区画溝 本調査南区では北区・中央区から延びてくるもの以外に1条(溝1011)を検出した。出土遺物からみていずれも5世紀後半~6世紀中頃のものであり、流路とほぼ同じ時期である。配置状況から、古墳時代後期の建物を区画していたと考えられる。
- ・掘立柱建物群 柱穴群は、本調査北区から引き続いて多数検出した。そのうち、現段階で建物と確認されたものは、塀を含めて20棟分である。本調査北区と同様に、建物の軸心方向の6タイプに分けて報告する。
- ・柱建物41 梁行2間、桁行5間の東西方向の大型建物。V類。柱穴は方形掘形で、一辺1.2mが最大。
- ・柱建物42 梁行2間、桁行3間の南北方向の総柱建物。VI類。柱穴は方形掘形で、一辺1.0mが最大。
- ・柱建物43 梁行1間、桁行2間の東西方向の建物で、IV類に属する。
- ・柱建物44 梁行2間、桁行3間の東西方向の建物で、IV類に属する。
- ・柱建物45 梁行2間、桁行2間の建物で、V類に属する。
- ・柱建物46 梁行2間、桁行3間の建物で、V類に属する。柱建物45に附属する庇か、隠し塀であろう。
- ・柱建物47 梁行2間、桁行2間の建物で、V類に属する。
- ・柱建物48 梁行1間以上、桁行3間以上の建物。V類に属す。柱建物49に附属する可能性がある。
- ・柱建物49 南北2間分を確認。IV類に属す。建物の一部であろう。
- ・柱建物50 梁行1間、桁行2間の東西方向の建物で、IV類に属する。
- ・柱建物51 北辺2間、中央辺4間の丁字形建物で、VI類に属する。
- ・柱建物52 梁行1間、桁行2間の南北方向の建物で、V類に属する。
- ・柱建物53 梁行1間、桁行2間の南北方向の建物で、VI類に属する。塀の可能性がある。
- ・柱建物54 梁行1間、桁行2間の建物で、V類に属する。間仕切りがつく。
- ・柱建物55 梁行2間、桁行2間の建物で、IV類に属する。
- ・柱建物56 梁行1間、桁行2間の建物で、II類に属する。
- ・柱建物57 南北2間分を確認した。III類に属する塀であろう。
- ・柱建物58 東西4間分を確認した。III類に属する塀であろう。

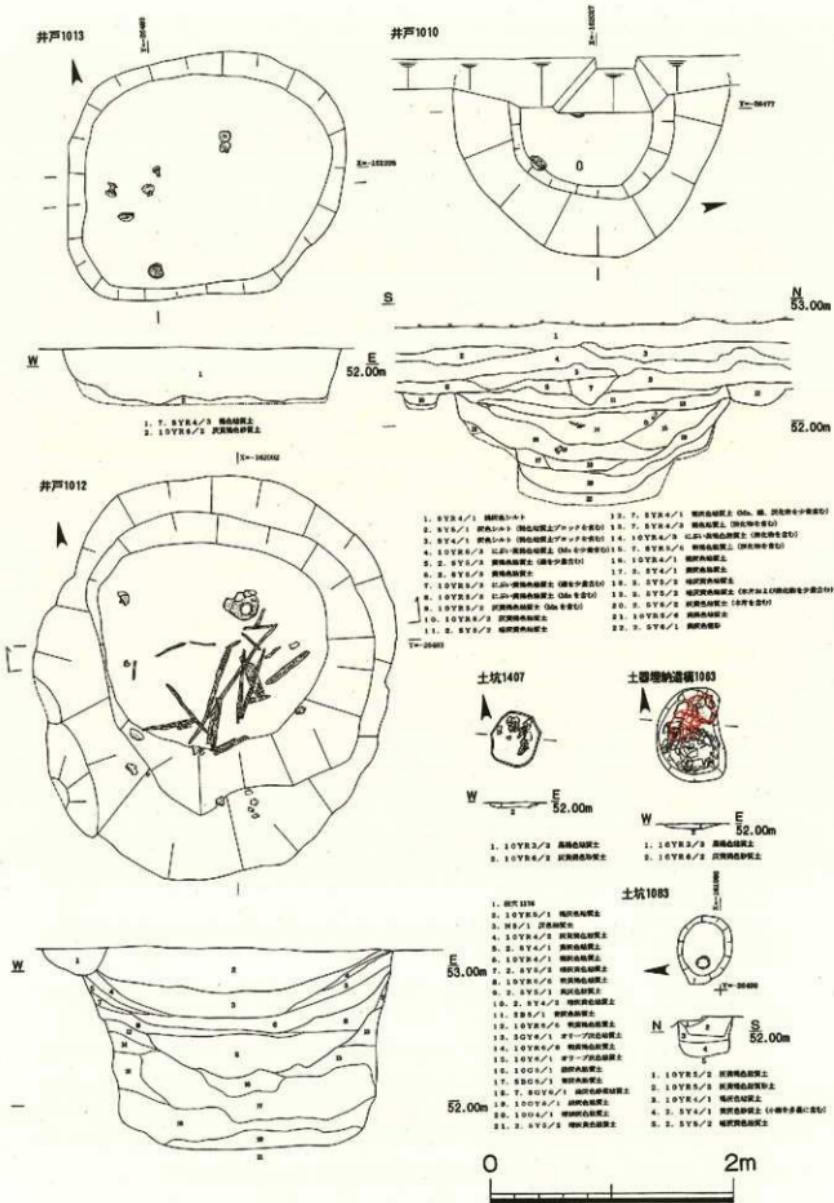


図27 本調査南区 土坑・井戸 平面図・断面図 ($S = 1 : 40$)

- ・柱建物59 南北2間分を確認した。V類に属する。
- ・柱建物60 梁行1間以上、桁行3間の南北建物であろう。V類に属する。
- ・井戸 4基検出した。井戸1012、1013、1014、1010である。何れも古墳時代後期のものである。
- ・素掘小溝は、調査区全域にわたって東西・南北走向に溝が開削されていた。第3～5層上面で確認しているが、第3・4層中にもさらに複数の素掘小溝開削面が存在する。いずれも正方位を指向しており、条里地割を意識しているものと思われる。第5層上面に穿たれているものは規模が大きい。本調査北区北西～南東側・南区には、東西溝が南北溝との複雑な切り合いを呈して密集している。13世紀頃に形成されたと考えられる。

条里界に関わる遺構の検出は、後世の用水路改作により搅乱されており、確認されなかった。

第28トレンチ 第28～第30トレンチは、2号調整池(本調査南区)に接続する街区道路造成箇所と試掘・確認調査を目的として設定された調査区である。28トレンチは6m×19mの東西調査区。ここでは、溝・柱穴を確認した。トレンチ東側で流路66の延長部を確認し、須恵器・高杯がまとまって出土した。

第29トレンチ 28トレンチ東端で接続する南北方向の4m×55mの南北調査区。ここでも、トレンチ北端で流路66の延長部を確認した。古墳時代の遺物を含む黒褐色粘質土の下層には縄文土器を含む砂層が存在する。前期のものが多く含まれる。トレンチ中央の東半は現在の山崎川に向かって落ち込みを確認し、盛り土による成形していることが確認できた。

第30トレンチ 本調査南区の南中央から南側へ延伸した6m×20mの南北調査区で、井戸1基を確認した。トレンチ中央で流路66の西端の一部を確認した。

第31トレンチ 第31～第34トレンチは、本調査北区の北西隣接地に計画されている街区道路建設部分の調査で、計画道路用地上に第31トレンチと周辺の試掘・確認調査を目的として第32～第34トレンチを設定した(図28)。各トレンチで東西・南北調査区で、東西・南北走向の素掘小溝群を確認した以外、顕著な遺構は存在しない。遺構を確認した第32・第34トレンチの北東側636m²を本調査北西区と称して、本調査を実施した。

第32トレンチ 4m×60mの東西調査区。基盤層上に素掘小溝を東西方向に10条、南北方向に15条を検出した。

第33トレンチ 4m×60mの東西調査区。基盤層上に素掘小溝を東西方向に10条、南北方向に30条を検出した。

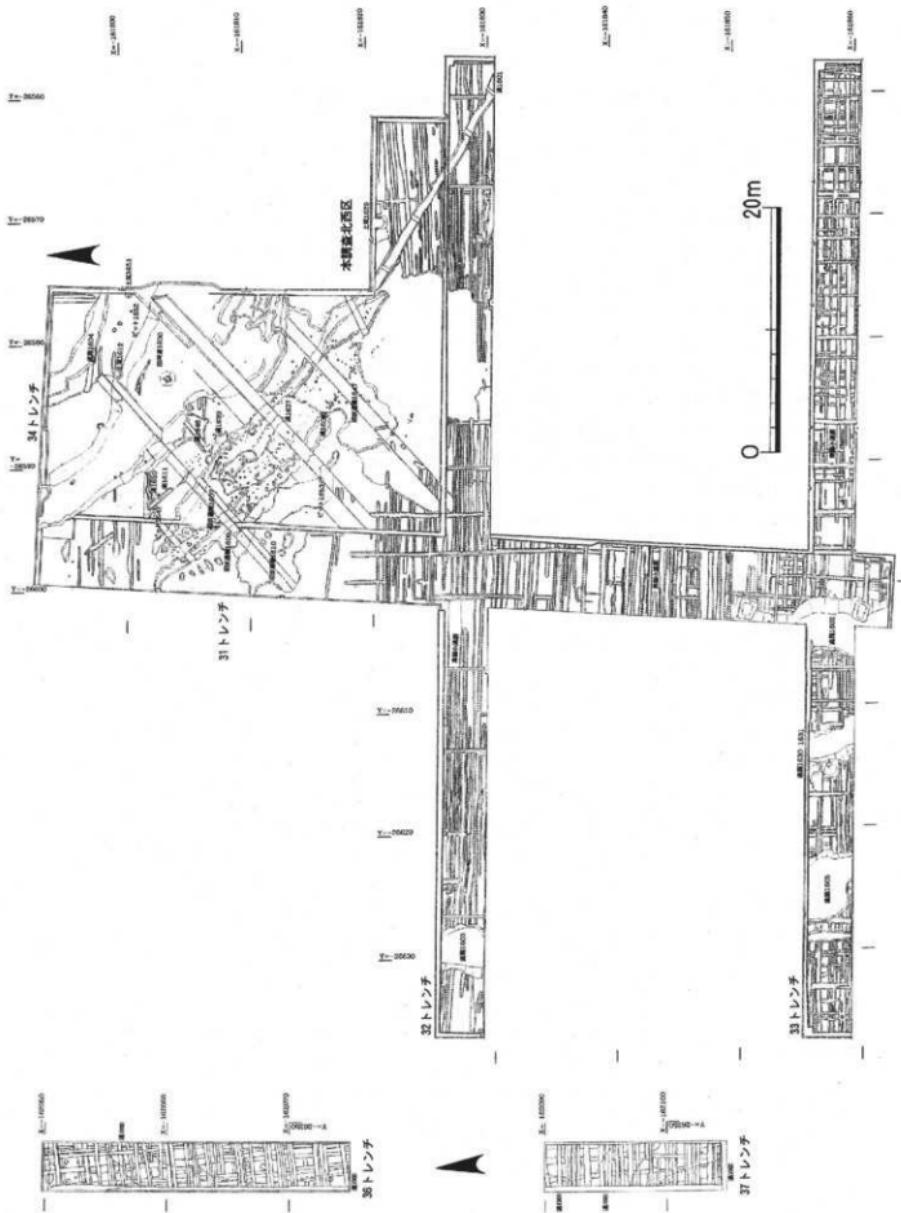
第34トレンチ 6m×60mの東西調査区。基盤層上に素掘小溝を東西方向に60条、南北方向に6条を検出した。

本調査北西区 32トレンチでは南東～北西方向の幅1mの溝を確認し、第34トレンチ北東隅の落ち込みで須恵器・杯の出土を確認した。周辺の調査区で確認している自然河道2の下流部分と想定されたため、両トレンチ間を拡張して本調査を実施した。

この結果、落ち込みは流路跡であり、古墳時代前期の古式土師器・甕を含む流路、後期の須恵器・杯を含む流路、下層には縄文土器を含む流路跡が存在することを確認した。

第35トレンチ 本調査北区の西隣接地にあたる2,112m²を対象地として、試掘調査区として設

図28 第31～34・36・37トレンチおよび本調査北西区 遺構配置図 (S = 1 : 400)



定した。4m×35mの東西調査区で、表土より0.7m下で黄橙色粘土の地盤が存在する。トレチ東端では自然河道が検出され、サヌカイト剥片が僅少量出土した。トレチ西側では標高がやや上がって東西走向の素掘小溝、ピットが検出された。引き続く本調査西区は一部調査に着手し、次年度に調査した。

第36トレチ 発掘調査事務所が事業地中央南寄りに移設するため、第36・37トレチを設定し、事前に試掘調査した。第36トレチは、幅4m×長さは25mの南北調査区である。

基本層序は、第1層が耕作土(表土)で厚さ20cm、第2層は床土で10cm、第3層が部分的に存在するが15cm、第4層が20cm、基盤層までは地表から50cm下にある。第5層を基盤層として東西・南北走向の素掘小溝群を検出した。素掘小溝群は、幅30~70cm、深さ10~30cmで、36トレチでは東西43条、南北6条を検出した。規模ごとにまとめると施行単位が把握できそうである。

基盤層上には黒褐色粘質土を埋土とする数基のピットなどの古代の遺構の存在を確認している。

・溝1900 トレチ中央、幅2.6m、長さ12.5mの溝1条を確認している。西から北東方向へ流下し、古墳時代~平安時代に機能していたと考えられる。事務所仮設作業は地下遺構に影響がないため、検出作業のみに留めた。

第37トレチ 4m×15mの南北調査区である。基本層序は第36トレチと同じ。素掘小溝群は幅30~70cm、深さ10~30cmで、東西28条、南北4条を検出した。基盤層上の黒褐色粘質土を埋土とする古代の遺構は、36トレチで確認した溝1900が南東から北西方向に蛇行しているのを確認した。

・溝1901 幅2.8m、長さ4.5m分を検出した。

3 出土遺物

(1) 旧河道66下層(縄文砂層)

石器・石製品

縄文砂層において、多量の石器が出土した。その時期は、縄文時代を中心に若干弥生時代のものと思われる遺物が中心である。また、本遺跡において初めて、後期旧石器時代の遺物も出土している。その代表的な遺物は図29・30に掲載し、表1に観察表としてまとめた。打製石器の石材はすべてサヌカイトである。

石錐(111, 112) 大きくわけて、2つのパターンが見られ、つまみを有すものと、つまみを有さず、細長い形態をするものに分けることができる。(111)は背面に他の面よりも若干風化がすすみ、灰色を呈する面が見られる。この石錐の時期を特定することは困難であるが、それより以前に剥離されたサヌカイトから素材を剥離し、用いたと考えられる。

石鏃(113~119) 本遺跡においてtoolと認定できるもののうち最も多く認めることができる。その多くは縄文時代のものと考えられる(113~117)が、弥生時代のものとみられるもの(118~119)も認めることができる。これらは、基部に抉りを有し、縁辺が鋸歯線状のもの(113)、縁辺に肩を有し、五角形鏃とよばれるもの(115)や、飛行機鏃とよばれるもの(116)もみられる。118は、有茎の石鏃で、他のそれよりも、肉厚で、長さも大きい。近畿地方において弥生時代中期中葉以降に出現する石鏃(註1)と類似する。119は、古墳時代の包含層から出土した「大形石鏃」

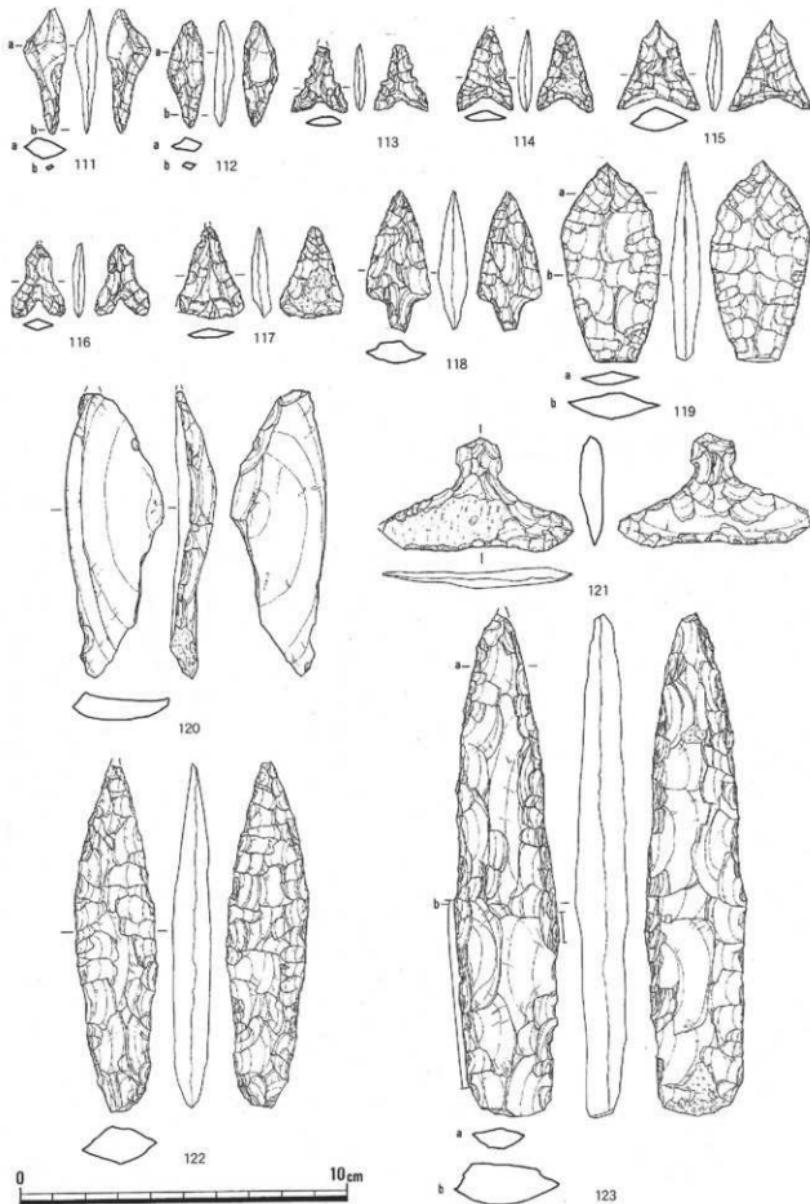
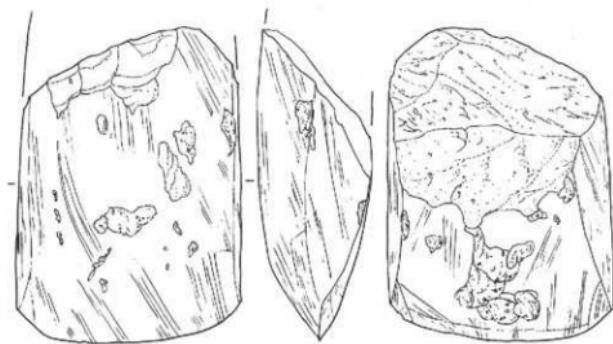
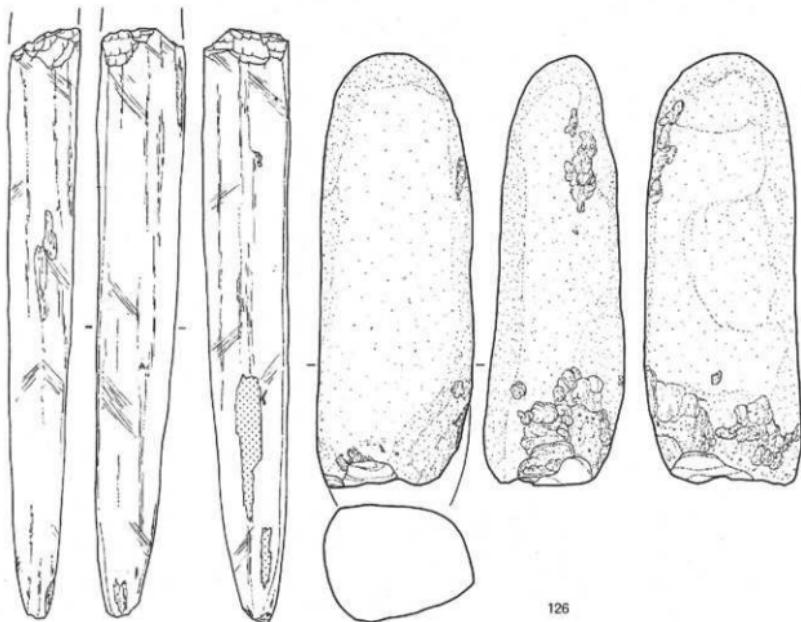
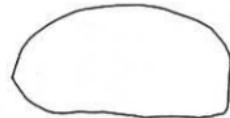


図29 旧河道66下層（縄文砂層）出土 石器実測図1 ($S = 2 : 3$)



124



126



125



図30 旧河道66下層（縄文砂層）出土 石器実測図2 (S = 2 : 3)

表1 遺物観察表

No.	地区	遺構	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	
111	北区北東部	T 8	縄文砂層	石錐	サヌカイト	37.9	13.0	6.6
112	北区南東部	T 9	縄文砂層	石錐	サヌカイト	32.1	11.0	5.9
113	北区南東部	S 11	縄文砂層	石錐	サヌカイト	(18.3)	16.9	3.1
114	北区南東部	S 11	縄文砂層	石錐	サヌカイト	(24.4)	17.1	4.3
115	北区北東部	T 8	縄文砂層	石錐	サヌカイト	26.8	25.2	5.1
116	北区北東部	T 7	縄文砂層	石錐	サヌカイト	(21.9)	16.9	3.4
117	北区南東部	T 9	縄文砂層	石錐	サヌカイト	(27.5)	19.7	4.1
118	北区南東部	S 10	縄文砂層	石錐	サヌカイト	42.3	19.2	8.4
119	北区北西部	素掘小溝WE19-1	石錐	サヌカイト	(60.9)	30.4	8.1	
120	北区北東部	T 8	縄文砂層	翼状剥片	サヌカイト	30.3	(86.1)	8.2
121	北区南東部	J 9	5層上面	石匙	サヌカイト	33.2	(58.3)	6.6
122	北区南東部	T 11	縄文砂層	打製石剣	サヌカイト	(105.3)	24.7	9.7
123	北区南東部	V 13	古墳包含層	打製石剣	サヌカイト	(153.1)	30.7	15.3
124	北区南東部	T 9・10	縄文砂層	磨製石斧		(88.7)	66.6	(35.3)
125	北区北東部	T 6	縄文砂層	石劍		(181.9)	27.0	21.7
126	北区北東部	T 8	縄文砂層	敲石	砂岩	(130.9)	46.1	40.0

※単位はmm。

※括弧つき数値は、現存値をしめす。

である。細かな調整によって器面が整えられている。先端部は薄手に仕上げられるが、基部に近くなるほど厚みを有する。120は翼状剥片である。図上端は新しい風化面によって構成されており、転磨によって、稜線はシャープさを失い、器面にわずかにがら衝撃痕が認められるため、2次的な堆積によって本遺跡に流れ込んだものと考えられる。本遺跡において後期旧石器時代の資料が出土したのは初めてで、二上山のサヌカイト原産地から少し離れた場所での旧石器時代の遺跡形成を考えるうえで、今後の調査に期待できよう。121は石匙で、打面と背面の一部に縦面を有し、腹面にも一部剥片素材の剥離の際に得られた面をとどめている。123は弥生時代の打製石剣であるが、基部に近い縁辺は、「つぶれ」たような状態をみせる。また、このつぶれの部分に、縁辺に直交する方向での擦痕が認められる。124は片刃の磨製石斧で石材は片麻岩である。125は図上端を欠くためその形態は明らかにできないが、縄文時代の石劍であると考えられる。石材は緑色凝灰岩で、研磨によって、刃部と背部がつくられている。126は敲石で石材は砂岩である。礫の一端と側面に敲打痕が観察できる。

註

(1) 平井勝 1991『弥生時代の石器』 ニューサイエンス社。

縄文土器 本調査北区の旧河道66下層(縄文砂層)から、コンテナ26箱分の多くの縄文土器が出土した。著しい摩滅のため文様を確認することができない個体も存在するが、確認できるものは、前期の北白川下層IIb式から晩期の長原式までが出土している。特に後期と晩期後葉の土器の出土数が多いが、遺物としては、中期中葉を欠く(図31)。

以下、出土した縄文土器を時期別に示し、土偶1点と弥生土器を併せて報告する。

前期: 127は北白川IIb式である。半裁竹管による爪形文を施す。128は北白川下層IIc式で数条の

凸帯を貼り付ける。129は口唇部にΣ状工具の押し挽きによる文様を施した大歳山式に属す。

中期：130は爪形文を施し、把手を有する特異な形状を呈する船元I式である。131は中期末の北白川C式である。いずれも胎土が粗い。北白川追分町遺跡に類例がある。

後期：132は文様のうち区画内だけを磨り消した福田KII式と考えられる。133は堀之内I式、134は堀之内II式である。朝顔形を呈する。胎土は他の繩文土器とことなり赤褐色を呈する。135は後期後葉の元住吉山I式である。136は後期末の宮窓式～滋賀里I式である。扇状圧痕文が確認できるものも存在する。近隣に所在する瓦口森田遺跡において宮窓式・滋賀里I式が出土している。

晚期：137は滋賀里II式と考えられる浅鉢である。いわゆる権原式文様を施し、一部に赤色顔料が付着する。

土偶 146は台式土偶である。残存幅4.3cm、残存高5.7cm、最大厚1.0cmを測る。胴部片で左側の乳房と正中線を確認することができる。台式土偶の出土分布は河内平野に集中し、大阪府・長原遺跡例に似ている。

弥生土器 本調査区では弥生土器は細片で少量出土する。147は弥生時代前期の蓋底部と考えられる。特に148は焼成後に底部穿孔を行なっている可能性が高い。また、底部内面に朱らしい痕跡も確認できる。

(2) 旧河道66上層(古墳流路)(図32)

土師器 149は高杯である。杯部が残存する。150・151は鉢である。150は口縁端部が強く外反屈曲して面を形成し、外面底部にケズリが施される。151は口縁端部に面を形成するものの、屈曲は小さく直立気味である。152は壺である。口縁部は段を形成し、吉備系と考えられる。

須恵器 153は直口壺。154は、はそう。155・156は杯蓋。157是有蓋高杯の蓋。158・159は杯身。160は高杯。

(3) 区画溝(図33)

土師器 161はミニチュア土器の壺である。162は高杯で、杯部が残存する。163・164は甕である。167は台付甕で、いわゆる宇田型甕である。溝35から出土した。168は鉢である。

須恵器 杯蓋は165が溝35から、169・170が溝1008から出土した。杯身は166が溝35から、171・172が溝1008から出土した。173は把手付鉢で、溝1008から出土した。

(4) 柱建物

柱建物からは、柱穴掘形から遺物が出土している。しかし、遺物そのものは完形ではなく、破片で出土することから、破碎されたものが掘形に混入した可能性が高い。よって、遺物は柱建物の築造された時期を示すものではなく、前代の遺物と考えたほうが適切である。

今回、固化し得る遺物はなかったものの、飛鳥時代の杯身が出土している。

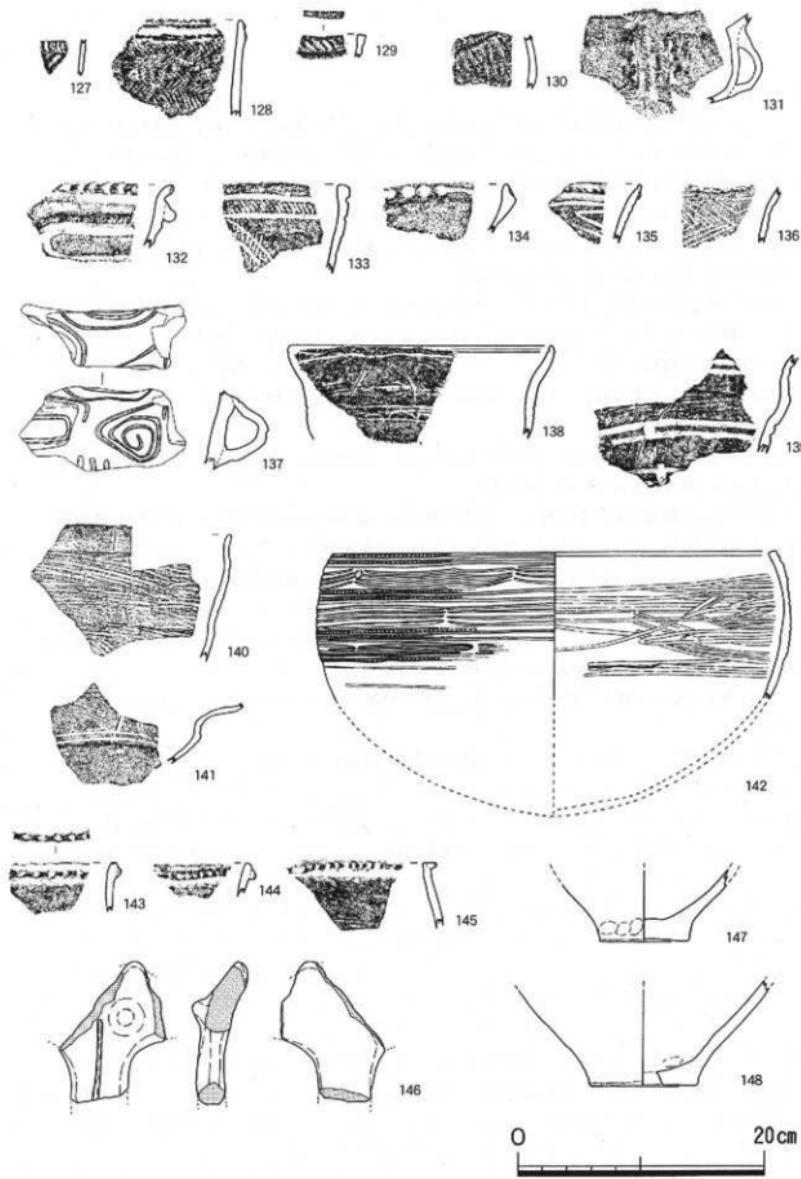


図31 旧河道66下層（縄文砂層）出土 縄文土器実測図 ($S = 1 : 4$)

(5) 土坑・井戸(図34)

174は、土師器・庄内式土器の大甕で、土坑10から出土した。復元高85.0cm、復元口径65.0cm。器壁最大厚2.0cmを測る。外面は板ナデ、内面はナデである。転用壺棺として使用されたため、口縁部は削り取られて殆ど残されていなかったが、口端部には刻み目が施されている。

175～177は須恵器で、土坑100から出土した。175は杯蓋で、口径14.5cm、器高4.5cm、最大厚1.0cmである。176は杯身で、口径12.3cm、器高3.8cm、最大厚0.8cmである。177は高杯の杯部で、口径13.3cm、器高4.1cm、最大厚0.7cmを測る。

178は土師器の杯AIIで、井戸85の井戸枠内から出土した。口径17.7cm、3.5cm、最大厚0.5cmを測る。調整については、口縁端部外面から内面にかけてヨコナデを施し、軽く外反させ、上方へやや屈曲させて跳ね上げ状に成形している。外面は胴部から底部にかけて指頭圧のナデである。底部は指頭圧により若干窪んでいる。内面はナデで調整される。三好美徳編年の南都Ⅲ期一古段階に属するものと思われる。

179は須恵器・杯蓋転用碗で、井戸88から出土した。口径9.0cm、器高2.2cm、最大厚0.7cmで、宝珠つまみは、直径2.2cm、高さ0.7cmである。

180・181は土師器の小型甕である。180は口径6.9cm、器高8.2cm、最大厚0.7cmを測る。外面調整は上半がタテケズリ、下半がヨコケズリである。内面調整は下半にヨコケズリが見られる。181は胴部下半が残る。最大厚1.5cm。182～184は土師器・高杯の脚部である。182は底径10.2cm、器高5.7cm以上、最大厚0.5cmである。183は底径10.5cm、器高6.3cm以上、最大厚0.6cmである。184は底径10.7cm、器高6.0cm以上、最大厚1.0cmである。杯部も僅かに残る。185は土師器の甕である。口径15.3cm、器高9.3cm以上、最大厚0.7cmを測る。

186は布留式後半の甕で、井戸700から出土した。口径16.8cm、器高27.0cm、最大厚0.5cmを測る。

外面調整はタテハケ後ヨコハケ、内面調整は口頸部がヨコハケの他はケズリである。

187は須恵器・有蓋高杯の蓋で、口径11.8cm、器高5.2cm、最大厚0.7cm、つまみは直径3.6cm、高さ0.8cmである。188は須恵器の杯身で、口径11.3cm、器高5.0cm、最大厚0.7cmを測る。

189・190は土師質土器の皿で、本調査北区北東部EW3から出土している。189は口径9.8cm、器高2.05cm、最大厚0.5cm、190は口径9.8cm、器高2.2cm、最大厚0.5cmを測る。口径の規模のわりには幅広く立ち上がった口縁部を持つ。調整については、外面は口縁端部を強いヨコナデによって上方へ屈曲させて跳ね上げ状に成形している。胴部から底部にかけては指頭圧により全面が幅広く窪んだ上げ底状を呈している。内面はナデである。奈良県・十六面薬王寺遺跡の型式編年によると、中型土師器E、山ノ内大溝期(14世紀中葉から15世紀初め)に属するものと思われる。

191は瓦器の皿で、井戸358下層から出土している。口径10.2cm、器高2.2cmである。調整については、外面は指頭圧痕を残した丸底状の底部に、外反状に立ち上がったヨコナデ仕上げの口縁部を持つ。内面はナデ後、見込み部全面に渦巻き状暗文が薄く密に入り、その上からも34条程の平行線状暗文がはっきりと施され、その後口縁部にミガキを施す。奈良県・十六面薬王寺遺跡の型式編年によると、井戸-39上層期(11世紀後葉)に属するものと思われる。

192は瓦器の椀で、井戸358上層から出土している。底部のみの残存で、残存高1.9cm、高台径

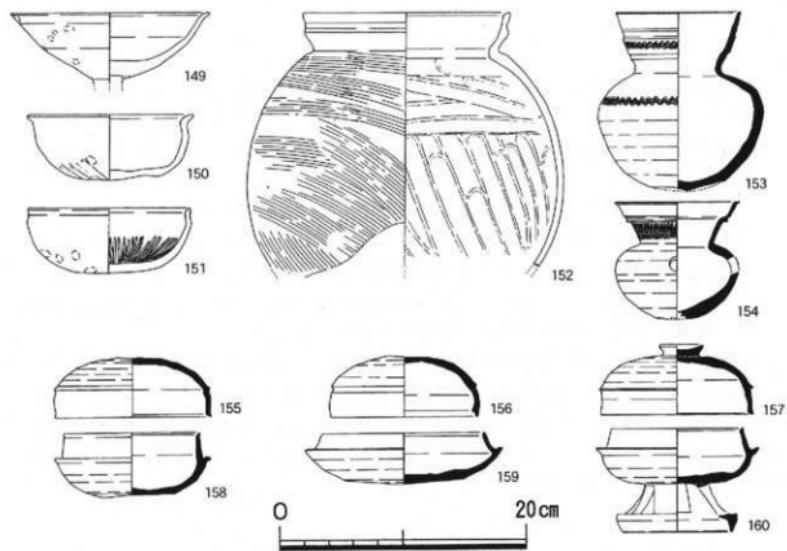


図32 旧河道66上層（古墳流路）出土 土器実測図 ($S = 1 : 4$)

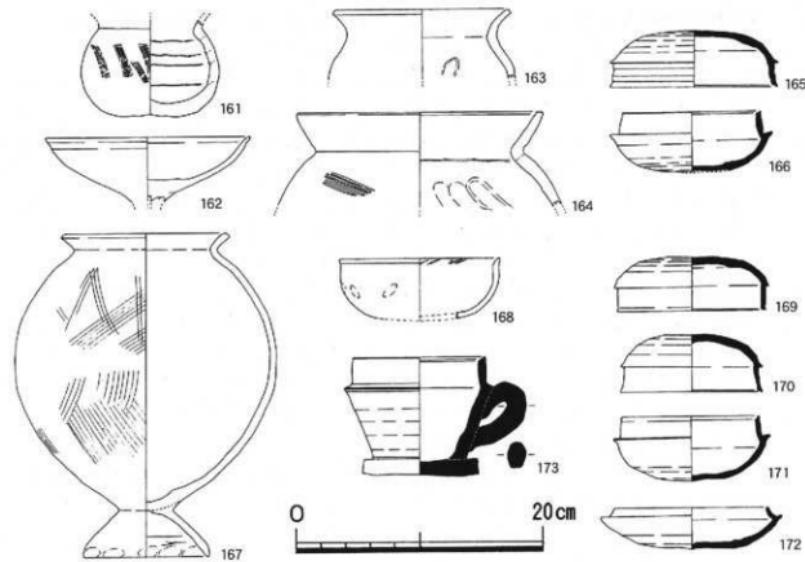


図33 区画溝出土 土器実測図 ($S = 1 : 4$)

5.5cm、高台高0.7cmである。なお、高台の円形はやや崩れている。高台については、外側は垂直に落ちており、内側に傾きを持ち、逆三角形状を呈す。調整については、外面はナデ後ミガキ、内面は見込み部の暗文は5回転桿の連続輪状文を施し、胸部はミガキである。近江俊秀編年I-4期(12世紀前半～中葉)に属するものと思われる。

このほかに図示できなかったが、黒色土器A類の杯Bで、井戸85の井戸枠内から1点が出土している。口径16.1cm、器高5.3cm、高台径7.5cm、高台高0.3cmである。口径の規模のわりに、器高・高台は低い。調整については、外面は口縁端部に1条の沈線を巡らしている。見込み部にミガキを施した後、側面のミガキを行っている。全体的にミガキは密である。三好美穂編年の中都II期～新段階、森下啓介編年II期第2段階に属するものと思われる。

土師器の土釜で、井戸85の井戸枠内から1点出土している。口径21.6cm、残存高7.5cmである。口縁を外反状に成形し、口縁端部を内側に折り返す。肩部上方に水平の鉤を巡らしており、口頸部はやや短い。調整については、外面は口頸部より下はナデで、口頸部に強いナデを施し、口縁部から内面口頸部にかけてナデを施している。内面は、口頸部より下は指頭圧後ナデである。菅原正明編年の大和B1型に属する。

Vまとめ

第1次調査では、当該地で広範囲に初めての発掘調査が行われたが、予想以上の成果を収めることができた。これまで全城が河川の氾濫原で水害が頻発する不安定な土地に、周濠を有し、多種多様な埴輪を有する帆立貝式古墳を確認できた。近年、馬見丘陵周縁部では東側や南側で古墳の存在が明らかにされてきたが、南北側では初めての確認例となった。5世紀末の築造と考えられるため、該期には土地利用が進んでいたと考えられる。また、古墳南側の旧河道では、古墳時代から平安時代にかけての遺物を豊富に内蔵しており、7世紀後半の軒丸瓦、軒平瓦、鷲尾、切石材、須恵器圓面鏡、土師器墨書き土器・人面墨書き土器、土馬、馬齒、斎串が出土していることから、古代寺院や官衙的施設の存在が推定できるようになった。

第2次調査では、下田東古墳の南西側では、微高地上に古墳時代から平安時代にかけての高床式建物や平地式建物などの柱建物群が存在することが判明した。微高地は南東から北西方向の旧河道2条に挟まれているが、両側の河道はともに古墳時代には安定していたことが要因と考えられる。南側の旧河道9では、最終埋没段階の最上層に築造されたと考えられる土坑10において、庄内式土器の転用壺が出土しており、早くから土砂堆積が進み、古墳時代前期頃に埋没したと考えられる。また、北側の旧河道66上層は、含まれる遺物から古墳時代後期まで機能したと考えられる。建物群を囲い込む区画溝としての機能を果たして付近に集落が営まれたと考えられる。また、下田東古墳造営時期の土師器・須恵器を多数含んでおり、古墳祭祀と関わりも存在した。

奈良時代～平安時代には大型掘立柱建物が造営された。2間×5間という規模、正方位を意識してL字状に配置されているという規格性、付近で出土した石帶などの遺物から官衙的性格を持った建物である可能性が極めて高い。葛下郡衙を含めて近い将来検討を迫られる必要が生じてくると思われる。

このように、5世紀末(古墳時代中期末)から形成された建物群は、9～10世紀頃(平安時代)ま

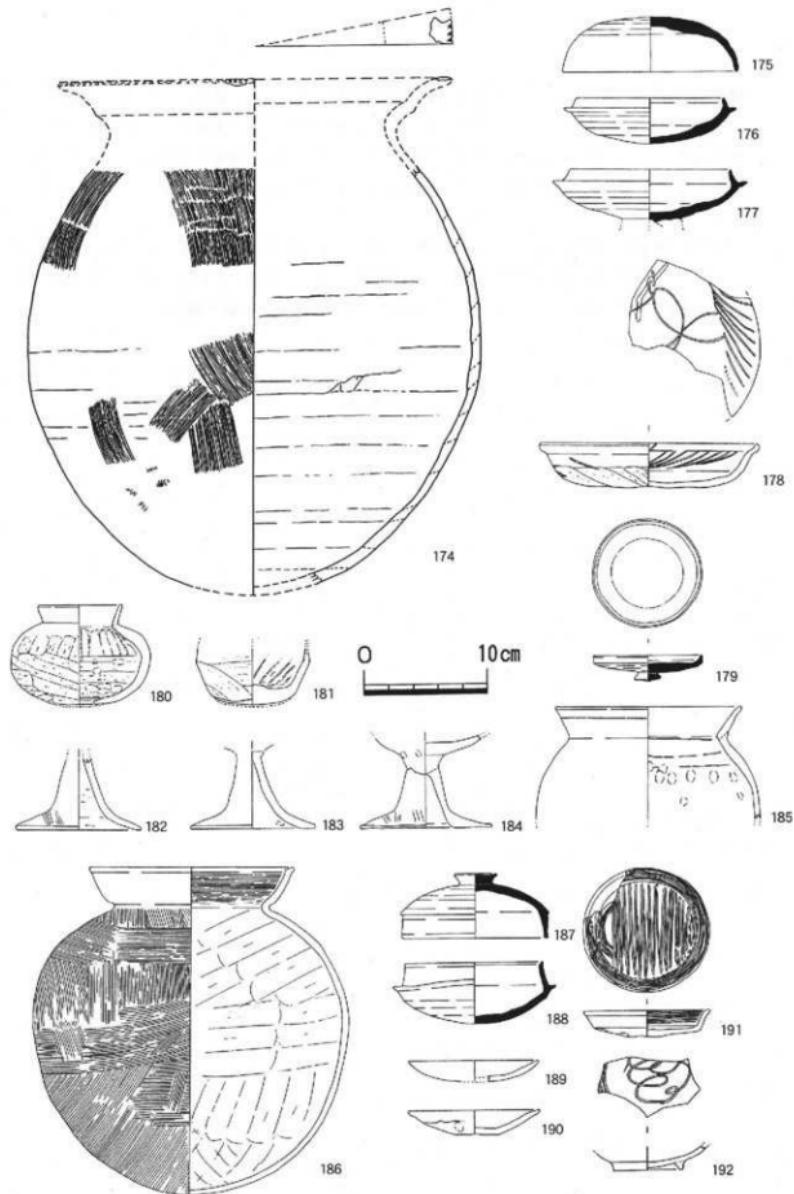


図34 土坑・井戸およびその他の遺構出土 (S = 1 : 4)

で機能していたと考えられる。その変遷は図35・36に掲げているので参照していただきたい。

その後、付近の土坑から出土した黒色土器や瓦器の椀などから、11世紀後半には集落が廃絶して近在に移り、その後、13世紀頃に素掘小溝が形成されて、全面が耕地化されていったと考えられる。当地域では集約的土地区画整理のための集落と耕地の二元化がこの時期に進んでいったと考えられる。

このほか旧河道66下層では、縄文時代前期から晩期、弥生時代前期の土器・石器等が豊富に出土している。河道自体は縄文時代に機能して弥生時代の河道が埋没している。周辺ではほかに遺構として生活痕跡が確認できず、上流の狐井遺跡付近に当該期の生活空間が求められるだろう。今後継続される調査に期待される。

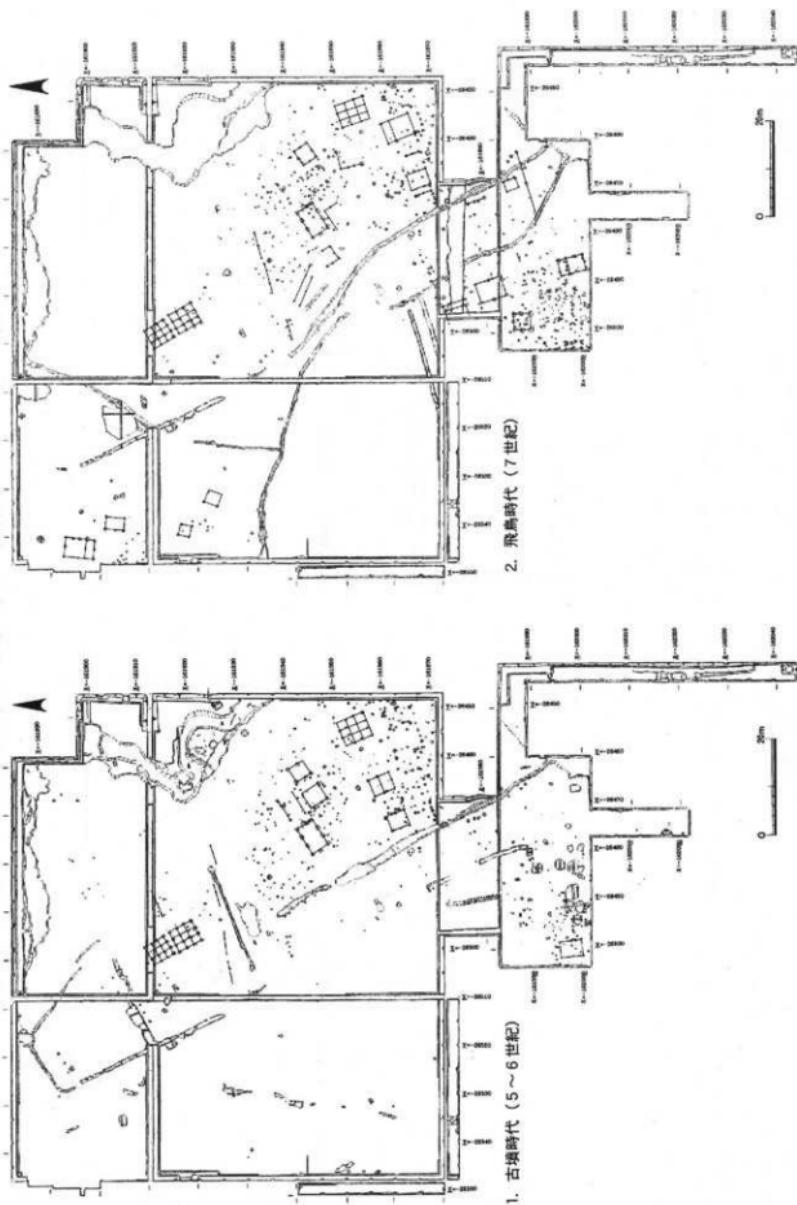
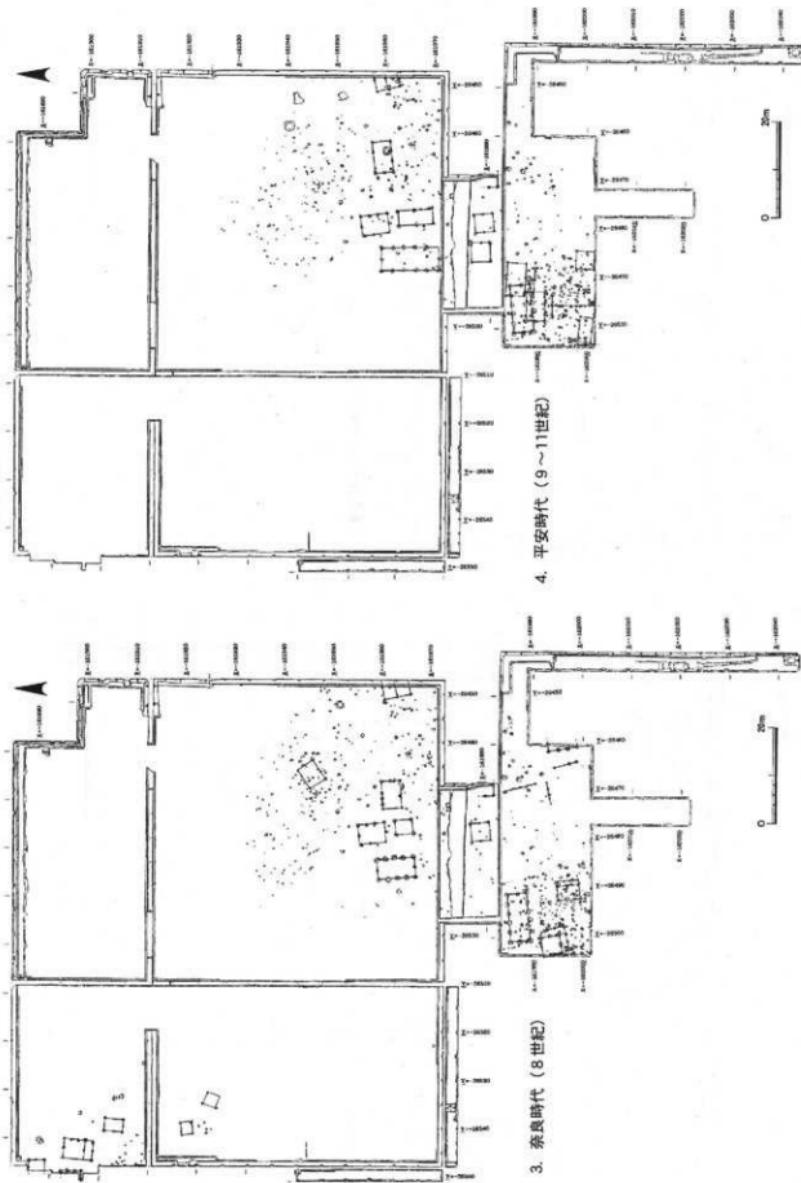


図35 第28～30トレンチおよび本調査北・中央・南区 遺構変遷図1 ($S = 1 : 1,600$)

図36 第28~30トレンチおよび本調査北・中央・南区 遺構変遷図2 (S = 1 : 1,600)



図版1 下田東遺跡 五位堂区画第1次（1）

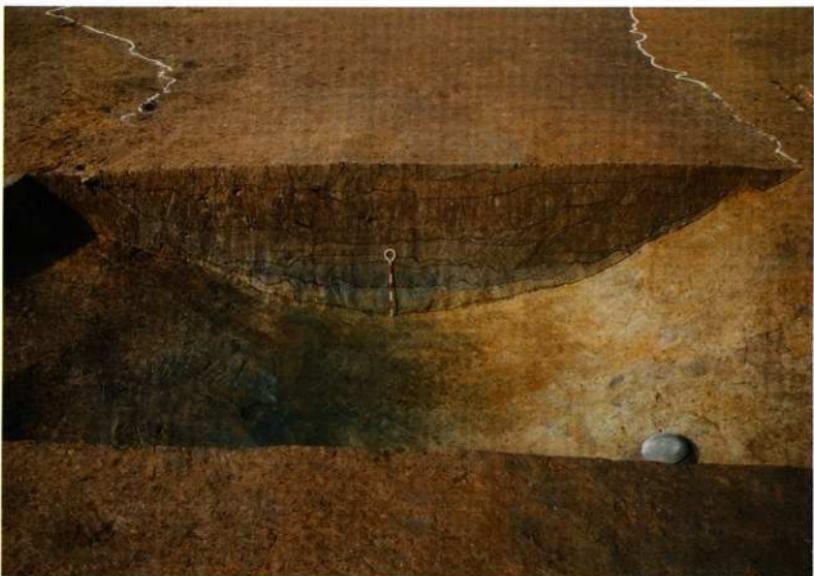


1 試掘・確認調査地景観（東上空から）



2 下田東古墳検出状況（北西から）

図版2 下田東遺跡 五位堂区画第1次（2）



1 下田東古墳北側（後円部側）周濠断面（東から）

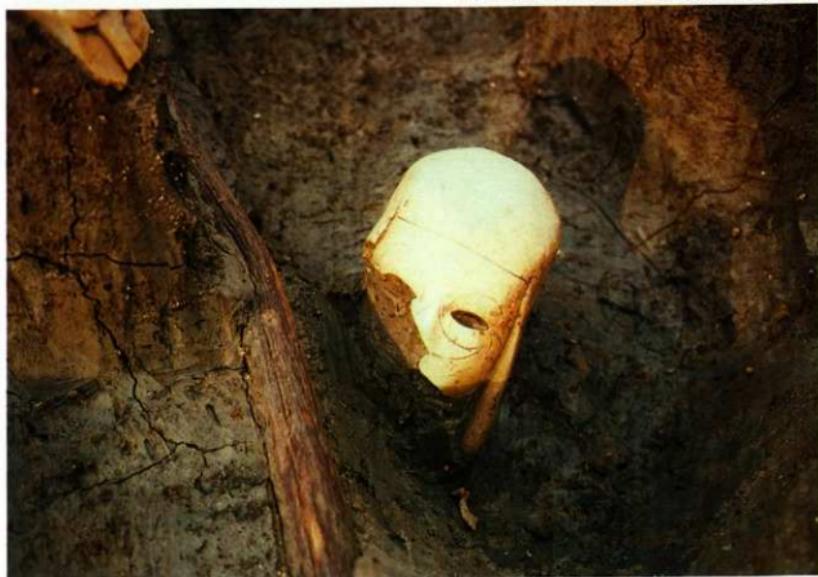


2 下田東古墳南側（後円部側）周濠内遺物出土状況（西から）

図版3 下田東遺跡 五位堂区画第1次（3）



1 下田東古墳周濠内馬形埴輪出土状況（北東から）

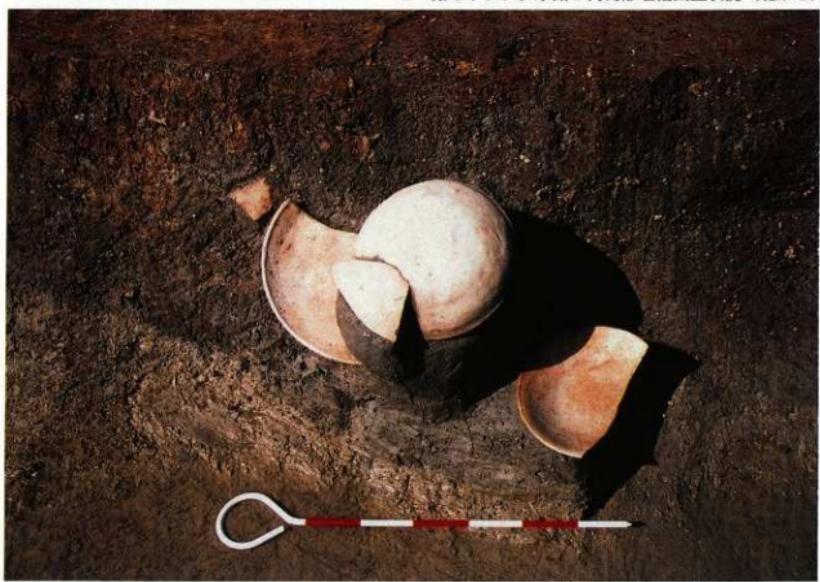


2 下田東古墳周濠内人物形埴輪出土状況（南から）

図版4 下田東遺跡 五位堂区画第1次（4）



1 第5トレンチ水路1円筒形埴輪出土状況（北から）



2 下田東古墳後円部上溝内遺物出土状況（北から）

図版5 下田東遺跡 五位堂区画第1次（5）



1 下田東古墳北東部土坑土師器出土状況（南から）



2 第5・13トレンチ間旧河道内遺物出土状況（北東から）

図版6 下田東遺跡 五位堂区画第1次 (6)



1 第18トレンチ大溝遺物出土状況（東から）

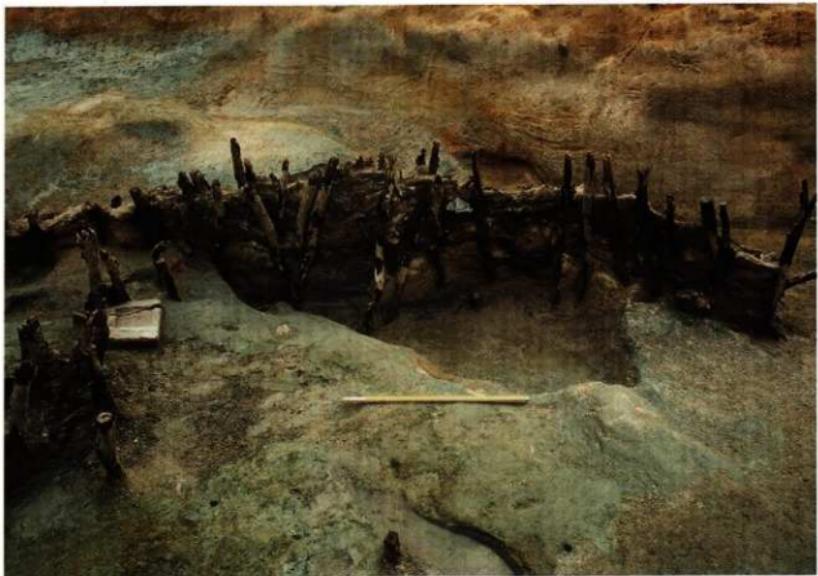


2 第23トレンチ掘立柱建物跡-SB-01-（南西から）

図版7 下田東遺跡 五位堂区画第1次 (7)



1 第18トレンチ水路2・堰 (南から)



2 第18トレンチ水路2・堰 (北から)

図版8 下田東遺跡 五位堂区画第1次（8）



2 第18トレンチ水路2馬鎌出土状況（南西から）



2 第18トレンチ西南拡張区掘立柱建物跡—SB-03—（北から）

図版9 下田東遺跡 五位堂区画第1次（9）



1 下田東古墳周濠出土土器

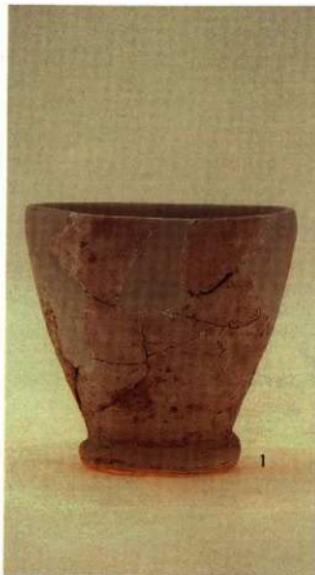


2 第18トレンチ大溝出土土器

図版10 下田東遺跡 五位堂区画第1次 (10)



1 第18トレンチ水路2出土木製品（馬鋤）



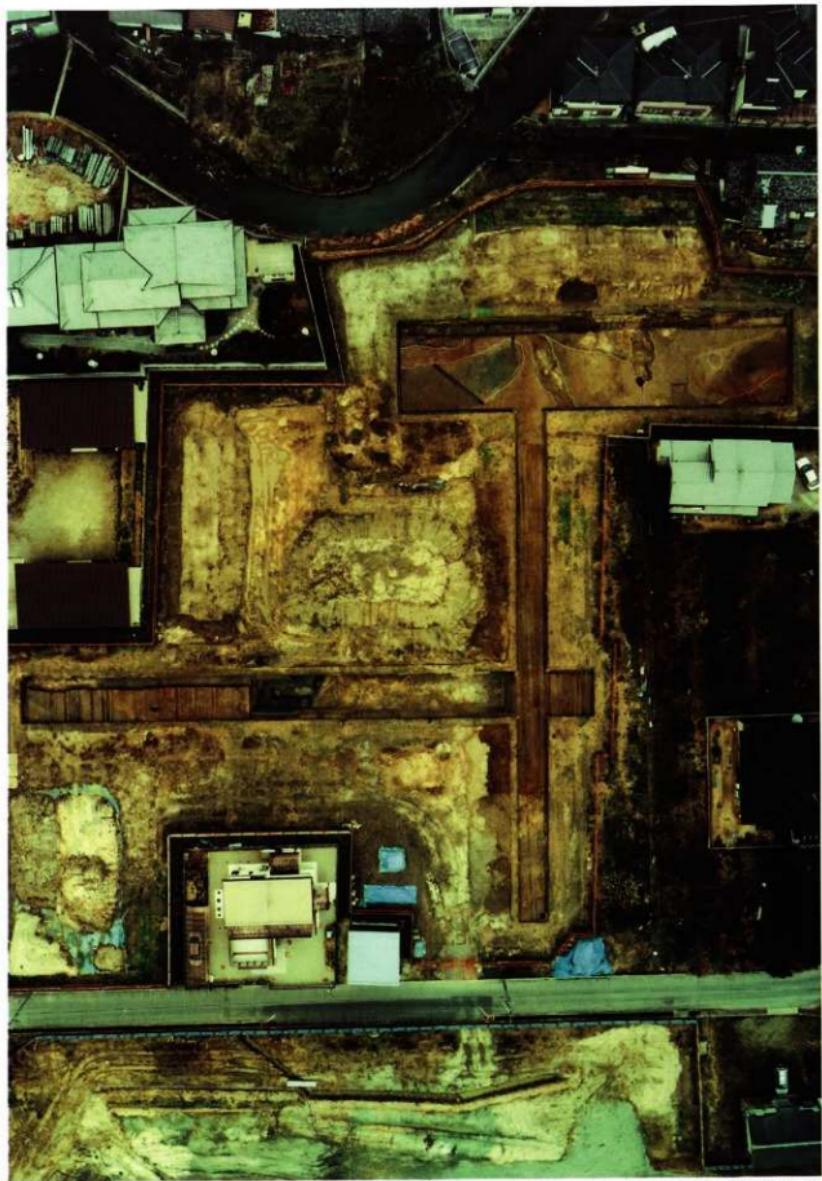
1

2 第13トレンチ旧河道出土土器（左：須恵器擂鉢・右：須恵器双耳壺）



2

図版11 下田東遺跡 五位堂区画第2次（1）



第25～27トレンチ全景（南上空から）

図版12 下田東遺跡 五位堂区画第2次（2）



1 第25トレンチ井戸1512土層断面（南から）



2 第27トレンチ溝1500・井戸1501土層断面（北から）



3 井戸1501枠内遺物出土状況（北から）

図版13 下田東遺跡 五位堂区画第2次（3）



第28～30トレンチ・本調査北区・南区全景（南上空から）

図版14 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (4)



1 本調査北区北西部第3層上面素掘小溝群検出状況（南西から）



2 本調査北区北西部第4層上面素掘小溝群完掘状況（南東から）

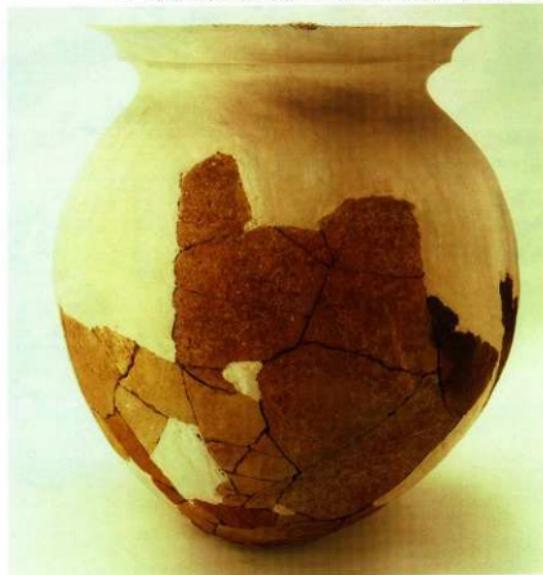


3 本調査北区南西部第5層上面素掘小溝土層断面（南から）

図版15 下田東遺跡 五位堂区画第2次（5）

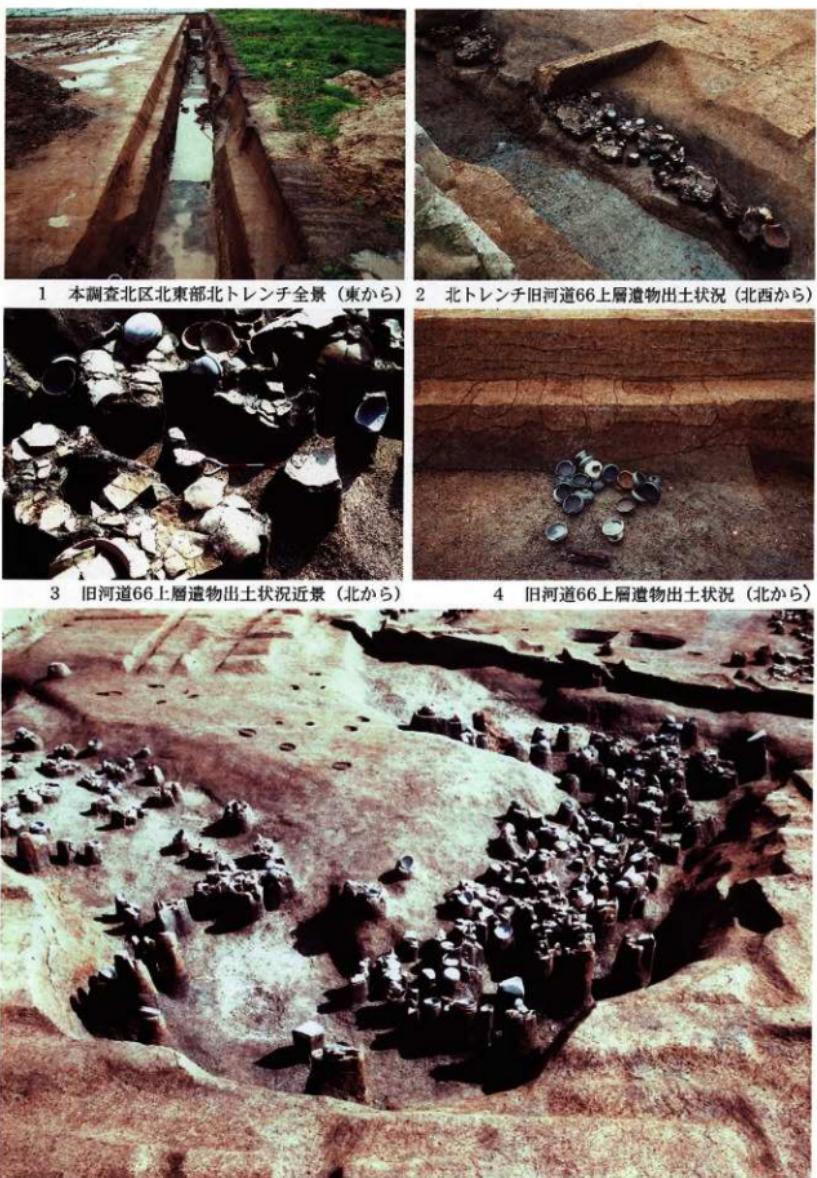


1 本調査北区南西部土坑10遺物出土状況（南東から）



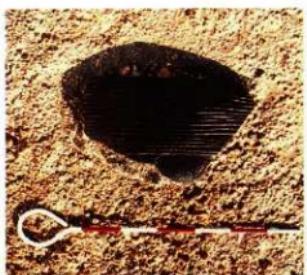
2 土坑10出土遺物（古式土師器大壺、復元高85cm）

図版16 下田東遺跡 五位堂区画第2次（6）



5 本調査北区南東部旧河道66上層遺物出土状況（北西から）

図版17 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (7)



1 旧河道66下層繩文土器（東から）



2 旧河道66下層石刀（南から）



3 旧河道66下層打製石剣（西から）



4 本調査北区北西部土坑100上層断面（北から）



5 本調査北区北西部柱建物2（南東から）



6 本調査北区南東部柱建物8（北西から、奥：柱建物9）



7 本調査北区南東部柱建物10（南西から）



8 本調査北区南東部柱建物13・14半截状況（北から）



9 柱建物13・14完掘状況（北から、人物位置：14）

図版18 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (8)



1 本調査北区南東部井戸85枠内半截状況（東から）



2 井戸85枠内遺物出土状況（東から）



3 井戸85枠内遺物出土状況（東から）



4 井戸85枠内完掘状況（東から）



5 本調査中央区全景（東から）

図版19 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (9)



1 本調査南区溝1008遺物出土状況（北西から）



2 溝1008遺物出土状況（北西から）



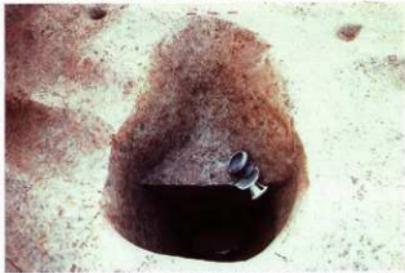
3 溝1008上層断面（北西から）



4 本調査南区土器埋納遺構1063遺物出土状況（南から）



5 本調査南区井戸1014土層断面（北から）



6 本調査南区井戸1025遺物出土状況（北東から）



7 本調査南区柱穴1271・1270半截状況（北から）



8 本調査南区土坑1083遺物出土状況（南西から）

図版20 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (10)



1 本調査南区柱建物群（北から）



2 本調査南区柱建物41（東から）



3 本調査南区柱建物45柱穴1127木製磁盤（南から）



4 本調査南区柱建物54（南から）



5 本調査南区柱建物55柱穴1181半截状況（北から）

図版21 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (11)



1 第28トレンチ南壁土層断面（北から）

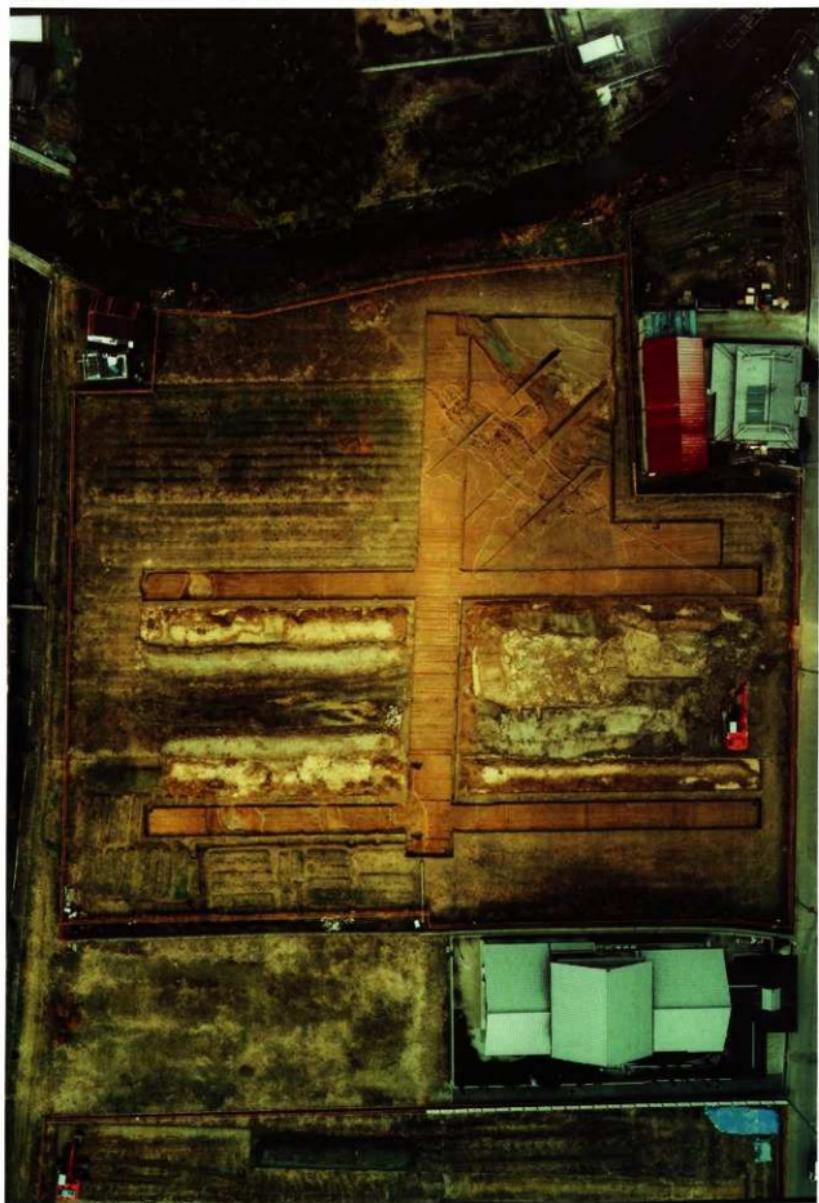


2 第29トレンチ全景（南東から）



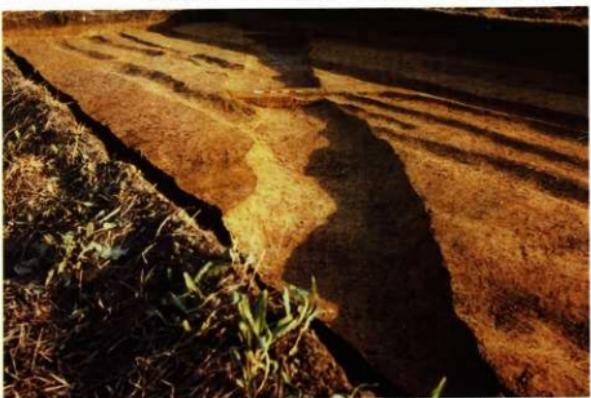
3 第30トレンチ井戸1010半截状況（東から）

図版22 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (12)



第31～34トレンチ・本調査北西区全景（南上空から）

図版23 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (13)



1 第32トレンチ溝1601完掘状況（北西から）



2 第34トレンチ全景（西から、中央：旧河道1600）



3 本調査北西区旧河道1600遺物出土状況（北西から）

図版24 下田東遺跡 五位堂区画第2次 (14)



1 第36・37トレンチ全景（南上空から）



2 第36トレンチ全景（南から）

報告書抄録

ふりがな	しもだひがしいせきはくつちょうかいほう いち						
書名	下田東遺跡発掘調査報 報告書						
副書名	五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう						
巻次							
シリーズ名	香芝市埋蔵文化財発掘調査報						
シリーズ番号	21						
編著者名	佐藤良二、湯本 整(編集)、金松 誠、波多野 篤						
編集機関	香芝市二上山博物館						
所在地	郵便番号639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号 電話番号0745-77-1700						
発行年月日	西暦2006(平成18)年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号	°°°	°°°			
下田東遺跡 (五位堂駅区画第1次)	奈良県香芝市 下田東3丁目・孤井	29210 98	34度 32分 23秒	135度 42分 49秒	20010814～ 20020326	6097m ²	大和都市計画・ 五位堂駅前北第二 土地区画整理事業
下田東遺跡 (五位堂駅区画第2次)	奈良県香芝市 下田東3丁目・孤井	29210 98	34度 32分 22秒	135度 42分 41秒	20020529～ 20030330	16264m ²	大和都市計画・ 五位堂駅前北第二 土地区画整理事業

所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下田東遺跡 (五位堂駅区画第1次)	古墳・集落跡	縄文時代	旧河道	サヌカイト、縄文土器	馬見丘陵南西側平坦地での初の大規模発掘調査を実施した。
		古墳時代	帆立貝式古墳、溝、 土坑	土師器、須恵器、瓦、 金属製品	下田東古墳と命名した帆立貝式古墳からは円筒・形象埴輪が多数出土。
		飛鳥時代～ 奈良時代	柱穴、土塙、井戸、溝、 掘立柱建物跡、旧河道	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、綠釉陶器 土製品、石製品、 金属製品	旧河道からは、縄文～古墳時代の土器、飛鳥～平安時代の瓦、律令祭祀関係遺物が出土した。
		平安時代	柱穴、井戸	土師器、須恵器、瓦、 黒色土器、石製品	古代～中世の掘立柱建物群が掘開することが確認された。
		中世	素掘小溝・井戸	土師器、瓦器	
下田東遺跡 (五位堂駅区画第2次)	集落跡	縄文時代	旧河道	サヌカイト、縄文土器	古代～中世の掘立柱建物群が掘開。
		古墳時代～ 中世	柱穴、掘立柱建物、 土坑、井戸、溝、 瓦	土師器、須恵器、埴輪、 黒色土器、瓦、 土製品、石製品、 金属製品	古墳時代の区画溝を作り建物、奈良～平安時代の大屋建物が注目される。
		近世	土坑	土師器	中世～近世の素掘小溝群を一町分確認した。

香芝市埋蔵文化財発掘調査概報 21
五位堂駅前北第二土地区画整理事業にともなう
下田東遺跡発掘調査概報 I

—平成13・14年度—

2006年(平成18)年3月31日

編 集 香芝市二上山博物館
〒639-0243 奈良県香芝市藤山1丁目17番17号
TEL 0745-77-1700 FAX 0745-77-1601

発 行 香芝市・香芝市教育委員会
〒639-0244 香芝市本町1397番地
TEL 0745-76-2001

印 刷 堀内印刷株式会社
〒635-0067 奈良県大和高田市春日町1丁目9番10号
TEL 0745-52-0557 FAX 0745-23-2330

